『萊翁默仙語録』・『長栄静高開堂録』について

田島柏堂

序

『萊翁默仙語録』・『長栄静高開堂録』の両書は、いずれも写本であって、前者は福井県永平寺に襲蔵されており、後者は島根県安来市松源寺に所蔵されている。先に私は、「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」（『愛知学院禅研究所紀要』第六・七合併号所収）を行なった際、新資料としての両書により、頑極官慶（默子素淵の法嗣）と尾張新豊寺（廃寺）に関した貴重な記録が発見され、多くの不詳な点を解明することが出来たので、それぞれの箇所にこれを引用し発表しておいた。その際、両書の全体にわたって一見するに、頑極・新豊寺を初め、尾張地方の宗侶、寺院に関係深い法語類が数多く収録されている語録であることがわかった。その後、さらに両写本の書冊形式および内容に関して一々検討を加えることができたので、その研究成果について叙述するとともに、両書を影印に付し、ここに紹介したいと思う。

一　『萊翁默仙語録』について

本書の書冊形式は、一冊、袋綴本、寸法は縦二十四・五糎、横十五糎である。前表紙は、のち新しく付したもので、後表紙はない。原表紙は、墨筆で書いた方を裏側にして、反故が利用してある。その表側は、題簽はなく、真中に大きく「開山老人語録」と墨書してある。遊び紙の右端の上には、「山陽道周防州□」と墨書してある。[1]「開山老人語録」と記されているところよりして、後に述べるよう

に、萊翁黙仙は、頑極の法嗣で、尾張松雲山仏音寺の二代（中興と称す）の住持となった人であるが、事実上の開山であるので、のちの住持（第三世東洲契之・第五世曇華泰秀へいずれも萊翁の法嗣）か(2)によって書かれ、同寺に所蔵していたことが知られる。また「周防州」とあるから、周防（山口県）の某寺に、その後所蔵されていたが、いつ頃からか、さらに永平寺に襲蔵されるに至ったのである。この間の顚末については不明であるが、察するに、永平寺の住持（第五十世）となった玄透即中、その本師頑極および玄透の法眷に関する人々の法語類が多く収載してあるところよりして、周防の某寺より因縁深い永平寺に寄進され、今日まで伝えられてきたものと思われる。

次に本文の最初の行には、「侍者霊苗篇」とあり、関防印と落款が押捺してある。本文は、行数片面八行書きにして、各法語類の題名を除いて、文字は一行十六字から成っており、上端（約三糎）・下端（約一・五糎）とも空白にしてある。ただし上端の空白欄には、本文の誤字を訂正した正字、字の解説、嗣法の次第、寺院の本末関係などを注記したところ（二十六箇所）が存する。紙数は、全部で五十七紙である。本文は、漢文で返り点や送り仮名が付けられている。

本書には、奥書・識語もなく、成立年代も記されていない。本文の最初に「侍者霊苗篇」と書き、落款を押しているので、霊苗が編集し、かつ書写したことが知られる。さればば霊苗とは、いかなる人物であるかというに、本文中に「為天然霊苗上座正法寺百春和尚請」と見え、萊翁が尾張正法寺の住持（第十二世）劫外百春の請によって、天然霊苗に与えた法語が見えているから、霊苗は天然と号したことが知られ、その法語の内容からして、かれは百春の弟子であったように推考される。霊苗は、萊翁のもとにあって修行し、侍者の役を勤めていた人であることがわかる。この法語の冒頭には、「忍子死時(スルキ)同歳生(ニル)」とあり、その上欄に「霊伝(3)苗法兄有二大忍者一」と注記しているから、すでに入寂しているが、法兄に大忍という人があったことも知られる。その他については明らかにすることができない。また萊翁が、宝暦九年（一七五九）十二月十一日仏音寺に入寺した際、山門、仏殿、拠室などの法語の編者として、「侍者魯宗篇」と記している。本書の中には、「為別伝魯宗上座火」、「悼魯宗侍者(4)」の二つの法語が見えているから、萊翁の存命中に示寂していることがわかる。

本書の成立年代については、明瞭でないから、そこでこのことを明らかにするために、まずこの中に記している年号を拾い集め、順に並べると、宝暦五年、同九年、同十四年、明和五年、安永六年、同八年、天明二年などが見られるから、宝暦五年（一七五五）より天明二年（一七八二）頃までの約二十七年間のものが集録してあることが知られる。なお除夜小参の語に「三百五十餘日更籌臘逼（マリ）七十二數時候主歳此終（ニル）」云々(5)と見えており、萊翁は寛政十二年（一八〇〇）に入寂しているから、かれの存命中に、仏音寺において侍者霊苗が編纂し書写したものと推定される。また内容の上から考察して、法語類の殆んどが、同寺に住山中に作られたものであることが窺い知られる。従って本書の成立は、天明二年以後、余り年数の経過しない時期で、萊翁の示寂以前すなわち江戸中期、十八世紀の末葉に編集・書写したものと推断される。

次に本書の内容は、萊翁によって作られた法語類百四十一首から成っておる。これを大約十一のジャンルに分類して、それぞれの数とその内容を（　）内に示し、左に掲げることとする。

一　仏事法語　三十八首
（仏生会・成道会・達磨忌・永祖忌・大般若会・水陸会・開眼会・年忌等）

二　葬儀法語　九首
（下炬・奠湯）

三　上堂　九首
（晋山・開炉・結夏・結冬・満戒）

四　小参　三首
（入寺・半夏・除夜）

五　示衆　十二首
（元旦・端午・梅雨・半夏・中秋・結冬・冬至・除夜・解制・庫院落成）

六　疏　五首
（正忌・遠忌・進山同門・祝誕開堂門弟）

七　賀偈　二十二首
（首座・開堂演法・結制）

八　輓偈　七首

九　鐘銘　三首

十　題賛　十首
（寿像・渡宋天神・三聖人・鶴・寿老人等）

十一　贈酬雑詩類　二十三首

さらに法語類の内容を理解する上に必要のため、僧名（道号・法諱・嗣承・住持の寺院の府県名・寺名・世代）、山号、寺名（現在地）を出来る限り調査して、丁数順に掲げ、僧名、山号、寺名が各丁に記されている場合は、これを一括し示しておいた。

玄透即中（頑極官慶の法嗣・永平寺五十世・愛知新豊寺三世・大阪仏眼寺六世等）……一丁表
天然霊苗（劫外百春の法嗣・萊翁の侍者）……一丁表
義勇天英（神奈川雲林寺十世）……一丁裏
智雲上人（宝光寺）……二丁表
別伝魯宗（萊翁の侍者）……二丁裏
洞源首座（不詳）……五丁裏
良運首座（不詳）……六丁表
鐵門霊樹（不詳）……八丁表
爽明首座（永岩寺前住）……八丁裏
順我子（不詳）……十丁表
峯上座（不詳）……十丁裏
應侍者（不詳）……十丁裏
雲侍者（不詳）……十丁裏
卍顔首座（不詳）……十一丁裏
悦峯覚民（崑山玉峰の法嗣・愛知霊松寺四世）……十一丁裏
頑極官慶（黙子素淵の法嗣・愛知新豊寺開山・大阪仏眼寺開闢二世等）……十二丁裏
燈外禅燈（大興超禅の法嗣・愛知新豊寺四世・岡山円通寺十二世・愛知春養寺法地開山）……十三丁裏
黙子素淵（徳翁良高の法嗣・大阪仏眼寺開山等）……十四丁表
雲関（閑）珠崇（周鼎仲昜の法嗣・愛知報恩寺開山・同天沢院二世・同乾坤院四世）……十四丁裏
乘輪弘宗（松山義柏〈一に地照紹天〉の法嗣・岐阜長国寺八世・愛知福昌寺三世）……十四丁裏
実参不毛（乘輪弘宗の法嗣・愛知玉林寺二世）……十四丁裏

宣叟曇周（輝英慶萼の法嗣・愛知宗円寺開山
・同正眼寺八世等）……十七丁表
三十三丁裏
大眉首座（尾張〈愛知〉城北稲生山〈宗円
寺〉）……十九丁裏
鳳山覚瑞（不詳）……二十一丁表
石門蘊聰（頑極官慶の法嗣・萊翁の法弟）……二十一丁裏
月泉性印（霊嶽洞源の法嗣・愛知福厳寺開山(二世)）……二十二丁裏
大應智有（頑極官慶の法嗣・石川天徳院十三
世・大阪仏眼寺三世等）……二十五丁表
要山祖髄（月耕灌田の法嗣・愛知報恩寺十四
世・同宗円寺九世）……二十四丁表
三十六丁表
四十二丁裏
大興超禅（頑極官慶の法嗣・萊翁の法兄・愛
知新豊寺開闢二世・大阪仏眼寺四世）……二十六丁裏
三十三丁表
三十六丁表
鐵文道樹（黙子素淵の法嗣(千)・泉松寺開山・岡
山円通寺九世等）……二十七丁裏
三十四丁表
五十二丁表
一名祥麟(明)（聞桂無隠の法嗣・愛知宗円寺八世）……三十丁裏
実源祖参（萊翁の肉の兄弟）……三十丁裏
天鷹祖祐（通幻寂霊の法嗣・愛知正眼寺二世
・同雲興寺開山等）……三十二丁裏
劫外百春（宝園霊樹(円)の法嗣・愛知正法寺十二
世）……三十三丁表
大忍（天然霊苗の法兄）……三十三丁表
活道首座（羽後〈秋田県〉由利郡象潟(きさかた)某寺に
て立僧）……三十四丁裏
不點首座（不詳）……三十五丁表
瑞應首座（不詳）……三十九丁裏
豪仙魯雄(選)（覚雄海満の法嗣・愛知洞雲院九世）……四十四丁裏
荊巌恵璞(えはく)（犂翁耕田の法嗣・愛知彌勒寺五世
・同大慈院開山）……四十五丁表
祖快上座（不詳）……四十六丁表
岱宗圜橋（勢陽〈三重〉四天王寺二十九世・昭臨
禅師）……四十七丁表
月海珠公（勢陽〈三重〉四天王寺十五世）……四十七丁裏

『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について（田島）

『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について（田島）

俯貫雄道（雷州惟黙の法嗣・愛知黄龍寺四世・同法持寺十六世・石川天徳院十四世）…四十九丁裏
大賢首座（不詳）……五十丁表
丹牛具壽（濃陽〈岐阜〉桃源山〈全昌寺〉住持）……五十二丁表
永平高祖（永平寺開山道元禅師）……五十二丁裏
亮山（愛知神蔵寺住持）……五十四丁表

次いで山号、寺名（現在地）を列挙することにしよう。

龍谷山雲林寺（神奈川県横浜市戸塚区矢部町）…一丁裏
宝光寺（不詳）……二丁表
松雲山仏音寺（愛知県西春日井郡春日村落合）…二丁表
臨月山小野寺（旧、信州〈長野県〉伊那郡山分荘小野村・廃寺）……六丁表
天龍山天松院（旧、尾張〈愛知県〉春日井郡北野邑・廃寺）……六丁裏
永岩寺（不詳）……八丁裏
鳳凰山新豊寺（旧、尾張〈愛知県〉愛知郡川名村・廃寺）……十一丁表
十二丁表
三十五丁表
三十六丁表
三十七丁裏
天龍山霊松寺（愛知県西春日井郡西春町北野）……十一丁裏
熊耳山仏眼寺（大阪府豊中市熊野町）……十四丁表
十五丁裏
二十六丁裏
稲荷山長国寺（岐阜県恵那市大井町）……十四丁裏
大寿山玉林寺（愛知県小牧市小牧）……十四丁裏
乳竇山報恩寺（愛知県知多郡美浜町奥田）……十四丁裏
二十四丁表
三十六丁表
稲生山宗円寺（名古屋市西区名塚町）……十七丁表
十九丁裏
三十丁裏
三十三丁裏
大叢山福厳寺（旧名、宝積寺・愛知県小牧市大草）……二十二丁裏

橘谷山大洞院（静岡県周知郡森町）……二十二丁裏
舟木山洞松寺（岡山県小田郡矢掛町）……二十二丁裏
宇宙山乾坤院（愛知県知多郡東浦町緒川）……二十四丁裏
宝壺山天沢院（愛知県常滑市山方町）……二十四丁裏
二十五丁表
金龍山天徳院（石川県金沢市小立野）……二十五丁表
凍鶴山泉松寺（現在、「泉」は「千」と書す
・愛知県西春日井郡豊山町青山）……二十七丁裏
三十四丁表
五十二丁表
補陀山円通寺（岡山県倉敷市玉島柏島）……二十七丁裏
青松山正眼寺（愛知県小牧市三ツ淵）……三十二丁裏
日東山正法寺（愛知県海部郡甚目寺町上萱
津）……三十三丁表
光明寺（愛知県稲沢市下津町・廃
寺）……三十五丁裏
嵩山少林寺（静岡県掛川市子隣）……三十六丁表
龍渓山洞雲院（愛知県知多郡阿久比町）……四十四丁裏
四十五丁裏
龍華山彌勒寺（愛知県海部郡十四山村）……四十五丁表
白華山大慈院（愛知県海部郡弥富町）……四十五丁表
四十五丁裏
答世山四天王寺（三重県津市栄町矢下）……四十六丁裏
梅林山黄龍寺（名古屋市南区呼続町）……四十九丁裏
萬年山総心寺（愛知県常滑市社辺）……五十丁表
萬霊山周泉寺（名古屋市西区天神山町）……五十丁表・裏
桃源山全昌寺（岐阜県大垣市船町）……五十二丁表
吉祥山永平寺（福井県吉田郡永平寺町）……五十二丁裏
龍華山神蔵寺（名古屋市名東区一社）……五十四丁表

以上、種々の資料[6]により考査した結果、僧侶については、四十八員の名を挙げることができ、この内、二十余員の約半数が尾張（愛知県）地方に関係している人々であることが判明した。しかもこれらの中には、頑極官慶（一六八三―一七六七）[7]、玄透即中（一七二九―一八〇七）[8]、鐵文道樹（一七一〇―一七八一・『百則評頌』・『假名法語』の撰者）[9]、荊巌恵璞（？―一七八二・『洞上伽藍雑記』の撰者）[10]等、当時における錚々たる学匠の名が見えている。また寺院については、三十五箇寺（上欄の注共）の名を列挙することができるが、内、二十一箇寺の半数以上がやはり尾張地方で占め、多くの有力な寺院名が見えておる。

『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について（田島）

二　萊翁黙仙の生涯

萊翁その人の生涯について述べることにするが、師の行歴、思想を纏めた著作は存しない。従って、その生涯については、本書によって知る以外にはない。されば本書により萊翁の生涯・風格などの一端を垣間見ることにしよう。

萊翁の生誕紀年は詳らかでないが、本書の最後の「除夜小参」に、「三百五十餘日更籌臘逼七十二數時候主歳此終」[11]云々の語が見えているので、入寂の寛政十二年（一八〇〇）は、その翌年と仮定し、これより七十三年を逆算すると享保十一年（一七二七）の誕生となる。しかし「籌臘：七十二」とは、法臘すなわち僧臘の数を算えて七十二年の意味であるから、例えば十三歳の出家得度と仮定すると、誕生はさらに遡って正徳三年（一七一三）に該当し、八十五歳で入寂されたことになる。しかし、これは仮に法臘七十三歳の年を入寂として算えたのであるから、確実な生誕紀年ではないが、一まず正徳三年（一七一三）誕生とし、八十八歳で入寂されたのではないかと想定しておく。なお確実な生誕紀年と入寂の年齢は、今後の研究に俟つこととする。

その後、萊翁は、出家得度し、明峰派の月舟下、頑極官慶（月舟宗胡―徳翁良高―黙子素淵の法嗣）に参じて師の法を嗣いだ[12]。従って、かの永平寺第五十世に晋住し、祖規復古と『正法眼蔵』の開版等に偉大なる業績を残した玄透即中[13]を初め、摂津仏眼寺より加賀天徳院に進院した大應知有[14]、また尾張新豊寺を開創して、頑極を招請し、師匠と共に寺門の機構整備をはかり、尾張地方に曹洞の禅風を挙揚した大興超禅[15]など三十余人（『新豊頑極和尚年譜』による・『曹洞宗大系譜』には四十四人を記載す[16]）とは、いずれも法眷である。

次に本書の中より萊翁の事蹟を摘出し、「年譜」[17]でもって示すことにする。

萊翁黙仙略年譜

年次	西暦	事蹟
正徳　三年	一七一三	誕生？
宝暦　五年	一七五五	秋、相模の雲林寺に遊び、住持義勇と面晤す。
宝暦　九年	一七五九	十二月十一日、尾張仏音寺に入寺す。

宝暦十四年	一七六四	五月十四日、尾張報恩寺要山祖髄等、同寺開山雲関（閑）珠崇の二百五十回遠諱法会を修すため、需により疏を撰す
明和　四年	一七六七	十二月十日、摂津仏眼寺頑極官慶入寂し、輓偈を撰す。次いで尾張新豊寺にて初七日忌法会の導師を勤む
明和　五年	一七六八	春、摂津仏眼寺に詣で、頑極官慶の牌を拝す
安永　三年	一七七四	玄透即中、尾張新豊寺に住し、賀偈を呈す
安永　四年	一七七五	頑極官慶の七周忌法会の導師を勤む 六月二十七日、大應知有、加賀天徳院に住し、七月進山開堂同門疏を撰し、次いで偈を呈してその入院を賀す 大興超禅、摂津仏眼寺に住し、開堂式典を挙ぐ、その同門疏を撰し、次いで賀偈を呈す
安永　六年	一七七七	九月、尾張新豊寺頑極官慶の開山忌法会の導師を勤む
安永　八年	一七七九	三月、尾張新豊寺開闢二世大興超禅〈安永七年三月二日寂〉の一周忌法会の導師を勤む 五月、尾張泉松寺鉄文道樹の祝誕開堂式を修す為、需により門弟疏を撰し、式典に参じて賀偈を呈す
安永　九年	一七八〇	六月、尾張新豊寺開山頑極官慶の十三回忌法会の導師を勤む 十二月、尾張新豊寺開山頑極官慶の祥月忌の導師を勤む
天明　二年	一七八二	十二月、『頑極官慶語録』開版の資財者の一人として名を刻す 尾張泉松寺鉄文道樹〈天明元年八月二十七日寂〉の一周忌法会の導師を勤む
寛政　三年	一七九一	九月、玄透即中、摂津仏眼寺を退住のため、同寺（第七世）に進住す
寛政十二年	一八〇〇	七月二十八日寂す（八十八歳？）

なお法嗣には、曇華泰秀（仏音寺五世・文政十三年〈一八三〇〉一月五日寂）と逸堂不染（愛知県西春日井郡清洲町清涼寺十五世・同豊田市千鳥町千鳥寺十二世）がある。[18] また本書の岸沢文庫本の添書によれば、東洲契之（仏音寺三世・寛政元年〈一七八九〉十一月二十一日寂）も法嗣と記されている。[19]

以上、本書およびその撰者萊翁等について詳しく考究した次第である。本書は、他の語録に比すると量としては余り多くない。萊翁には、この他に多数の法語類が存したことが想像される。本書は、恐らく仏音寺住山時代における法語類の一部が収録されたのであろう。これらの法語類は、萊翁が各種の仏事、法事、葬儀等の導師に招聘されて捧読したもの、或は需に応じて作った詩、偈、疏、賛、鐘銘等、十一部門百四十一首を収録したいわゆる珠玉篇である。萊翁は、頑極の多くの法嗣中、すぐれた人物であって、行持綿密な宗師家であると共に、漢文に精通し、作詩偈に体達した風格の善知識であったことが窺い知られる。本書により、萊翁（仏音寺）の徳を慕って、その会下に多くの僧衆が参集した様子が窺われ、かつ師を中心として、各宗匠（寺院）たちとの交渉、地方における教学・教団の情況等を窺知することができる。もって宗門の教学・教団の発展史研究の上に、貴重な資料であるといわねばならぬ。

三　『長栄静高開堂録』について

本書の書冊形式は、一冊、袋綴本、寸法は縦二十糎、横十二糎である。表紙は、題簽はなく、左端に大きく「長栄静高和尚開堂録」と墨書してあり、後表紙はない。次に本文は紙面全体に細字で大きくだいたい行書体で五行または六行（一箇所のみ七行）に書かれてある。紙数は、全部で九紙である。本文は、漢文で返り点、送り仮名が付されている。本書は、三つの疏が収録されている。

最初の疏は、その末尾に「維時天明萬年龍舎丙午、孟夏穀旦、興国山見住大枝欽和南拝疏」[20]と三行に記してある。「天明丙午」は、天明六年（一七八六）であり、「孟夏」は四月、「穀旦」は吉日の意である。「興国山」は、尾張大光院（名古屋市中区大須）の山号である。「大枝」は、同寺第十七世の梅嶺大枝（大鈍心庭の法嗣）で、同師の捧読した道盟疏であることがわかる。梅嶺の伝については、他の機会に詳述することとして、ここには省略する。

次の疏は、末尾に「維岩天明萬年龍次丙午孟夏結制之日、山門両序等謹九拝疏」[21]と二行に書いてある。これは山

門両序疏である。また最後の疏は、「維旹、天明萬季良月令旦、城震鳳皇山新豊禅寺禅燈九拝、謹撰」[22]と四行に記されておる。「鳳皇山」は正しくは「鳳凰山」と書き、前記の『萊翁黙仙語録』中にも見えているように尾張新豊寺の山号である。また「禅燈」も前述のごとく同寺第四代の住持を董した燈外禅燈（?～一八〇二）[24]で、これは同師の唱えた江湖疏である。「謹撰」とあるから、或は三疏とも燈外が撰書したのではないかと推考される。

本書は、いずれも臥山静高が、天明六年四月、尾張金剛山長栄寺（名古屋市中区橘）第十一世に晋住し、結制開堂の式典を挙行した際、梅嶺大枝、燈外禅燈等の宗匠が捧読した三つの疏を纏めた、極めて短篇の語録である。本書がどうして島根県松源寺に襲蔵されたかについては、詳かでないが、同寺には他に『妙外喝玄禅師開堂語録』、『甘雨爲霖禅師開堂録』等の類書を初め、多数の貴重な宗典を蔵しているので[25]、いずれ何代かの住持によって蒐集されたのではないかと想像される。

四　臥山静高の行歴

因みに、臥山静高は、峨山派の石屋下（石屋真梁―竹居正猷―器之為璠―全巌東純―天甫存佐―助翁永扶―絶澥大頂）定保慧胤の法嗣である。臥山は元文二年（一七三七）尾張海東郡甚目寺村（愛知県海部郡甚目寺町）に生まれ、東松氏と称した。同郡北間島村、玉峯山龍源寺（海部郡大治村北間島）定保慧胤について薙髪得度し、師が長栄寺に移住したので随



臥山静高筆　年徳大善神之書
（名古屋市　桂芳院蔵）

侍して同寺に赴き、専心修行した。のち越中光禅寺（富山県氷見市丸ノ内）関山道察（二十四世）に久しく参究し、さらに華厳曹海（滋賀県長福寺開山）、一入覚門（石川県大乗寺三十九世）、悦巌素忻（石川県天徳院八世）、大参便成（滋賀県曹沢寺十七世）、呑舟透鱗（愛知県瑞泉寺二十世）等、諸方の宗匠に歴参し、また定保のもとに帰り、明和八年（一七七一）五月二十五日永平寺に瑞世した。天明六年四月、定保（十世）の後席をついで同寺に晋住し、住すること二十四年、その間、同寺の殿堂を一新し、尾張公より時服を賞賜された。また諸方より招請されて結制演法およそ二十四会、授戒会の戒師を勤めること三十九回におよんだ。さらに大光院（十九世）に十一年、亀岳山萬松寺（二十四世・名古屋市中区大須）に六年住山し、文化六年（一八〇九）長栄寺明星庵に退隠し、同八年（一八一一）十二月六日七十五歳にて示寂した。[26] その他、明叟山安清院（法地開山・名古屋市中区丸の内）、碓屋山宋吉寺（二世・名古屋市中区新栄）、仙境山松岩寺（二世・愛知県江南市小折）に住山している。[27] なお伝によれば「師慈容温雅、道骨卓爾、尋常以二法門興起一為レ念、有レ所二請益一、唯以二真参実究一示レ之而已」とあり、さらに、叙上の動静より推して、臥山が当時稀に見る高徳の宗匠であったということが、窺い知られる。法嗣には、慧海禅智（宋吉寺六世・長栄寺十五世・安清院五世）、瑞巌台橋（岐阜市岩田、林陽寺四世・岐阜県恵那市長島町永田、高安寺一世）、月海光禅（長栄寺十二世・安清院二世）、雲巌石獅（松岩寺四世）の四人がある。[28]

結語

以上、『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』の両書について、詳しく考究した結果、両書はともに丁度、江戸中期すなわち十八世紀に撰した語録であることが首肯される。この中には、洞門のすぐれた禅匠の名が数多く見られ、地方における宗侶の禅風が知られ、またその行動を通じて寺院の様相が窺われる等、当時の宗門の動向が知られうる。されば、両書は、近世禅宗史の好箇の史料として貴重なものである。

注

（1）「山陽道周防州□」の左側に、短冊形の細長い小札に「頑極官慶禅師ノ法嗣萊翁黙仙禅師ノ語録ナリ」と、大久保道舟博士の付箋が貼付してある。『曹洞宗大年表』には

『萊翁黙仙和尚語録』と命名して収録されている。

(2) 永平寺本より謄写した写本が、岸沢文庫に所蔵されている。この写本の遊び紙の裏には、

愛知県西春日井郡春日村仏音寺世代

開山佳雲陵大和尚　正保二丙戌年十二月二日

仏眼七世仏音二世中興萊翁黙仙大和尚　寛政十二庚申年七月廿八日

三世東洲契之大和尚　寛政元己酉年十一月廿一日　萊翁和尚法嗣

四世達観良頴和尚　寛政五癸丑年三月五日示寂於越中瑞龍寺

五世曇華泰秀和尚　文政十三寅年正月五日　萊翁和尚法嗣

と、添書がしてある。

因みに、仏音寺には開山祖佳雲恩陵の木像が安置してある。萊翁は、同寺第二世であるが、世代牌は存しない。また仏眼寺にも住山しているので、両寺を調査した際、示寂の年月日は不詳であったが、右の写本の添書により判明した。なお『頑極官慶語録』(『続曹洞宗全書』語録二、四九四頁)の末尾、助刻者の芳名中には「尾州仏音黙仙」と見えていることを付記しておく。

(3) 『萊翁黙仙語録』三十三丁表。

(4) 『萊翁黙仙語録』二丁裏・四十三丁裏。

(5) 『萊翁黙仙語録』五十四丁表。

(6) 『頑極官慶語録』(『続曹洞宗全書』史伝下)、『曹洞宗全書』鉄文樹和尚事実』(『曹洞宗全書』語録二)、『泉松開山大系譜一・二、『宇宙山乾坤院住山記』(『知多郡史』巻中)、『延享度曹洞宗寺院本末牒』、『曹洞宗寺院名鑑』(昭和五十五年版)、『寺院名簿〈名古屋市仏教会〉』(昭和五十五年版)、『大日本寺院総覧』巻上・下、『張州府志』、『尾張名所図会』巻上・中・下、『東春日井郡誌』、『小牧町史』、『尾張人物志』(市立刈谷図書館蔵)、『正眼寺文書目録』(愛知学院大学図書館)、『名古屋市史』社寺編・人物編第二、『良寛修行と玉島』(考古堂刊)等。

(7) 拙稿「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」(『愛知学院禅研究所紀要』第六・七合併号)。

(8) 拙稿「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」三一―三二頁、三九―四〇頁。

(9) 『鉄文樹和尚百則評頌』(明和八年、柳枝軒刊)、『禅学大系』祖録五、『鉄文樹和尚假名法語』(『続曹洞宗全書』法語、五四九―五五一頁・解題、五五九頁)、『泉松開山鉄文樹和尚事実』(『曹洞宗全書』史伝下、五六七―五七九頁・解題、四〇九頁)。

(10) 『曹洞宗全書』清規、八三七―八六六頁。

『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について(田島)

(11) 『萊翁默仙語録』五十四丁表。
(12)・(13)・(14)・(15)・(16)拙稿「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」。
(17) 「年譜」中、本書以外の記録は、右に掲げた拙稿のうちより摘出して補った。
(18) 『曹洞宗全書』大系譜、二三五頁。
(19) 注(2)参照。
(20) 『長栄静高開堂録』四丁表・裏。
(21) 『長栄静高開堂録』六丁裏。
(22) 『長栄静高開堂録』九丁表・裏。
(23) 『萊翁默仙語録』山号・寺名の項参照。
(24) 燈外禅燈については、拙稿「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」三二―三七・四〇―四一頁。
(25) 『曹洞宗全書』解題、附録、七〇〇―七〇一頁。
(26) 臥山静高の伝記は、現在の『亀山志』には散佚して収載されていない。幸い『名古屋市史』社寺編、「長栄寺」の項（六四三―六四四頁）に詳細にわたって収録してある。なお末尾に「嗣子長栄光禅謹誌」と見えているから、法嗣の月海光禅の記したものであることがわかる。
(27) 『曹洞宗全書』大系譜、七四八頁。前掲の拙稿、三三・四〇頁。『名古屋市史』社寺編「安清院」の項、五八一頁。
(28) 『曹洞宗全書』大系譜、七四八頁。

【付記】
両書の研究調査に対して、種々ご協力を賜った関係ご寺院各師に対して、深く感謝の意を表する。
また特に、両書を影印に付するについて、快諾を与えられた大本山永平寺監院故加藤默堂老師、島根県安来市松源寺住持佐瀬淳光老師、種々便宜をはかって頂いた駒沢大学図書館、愛知学院大学図書館等のご厚意に対して、甚深の謝意を表する次第である。

萊翁默仙語録

（福井県　永平寺蔵）

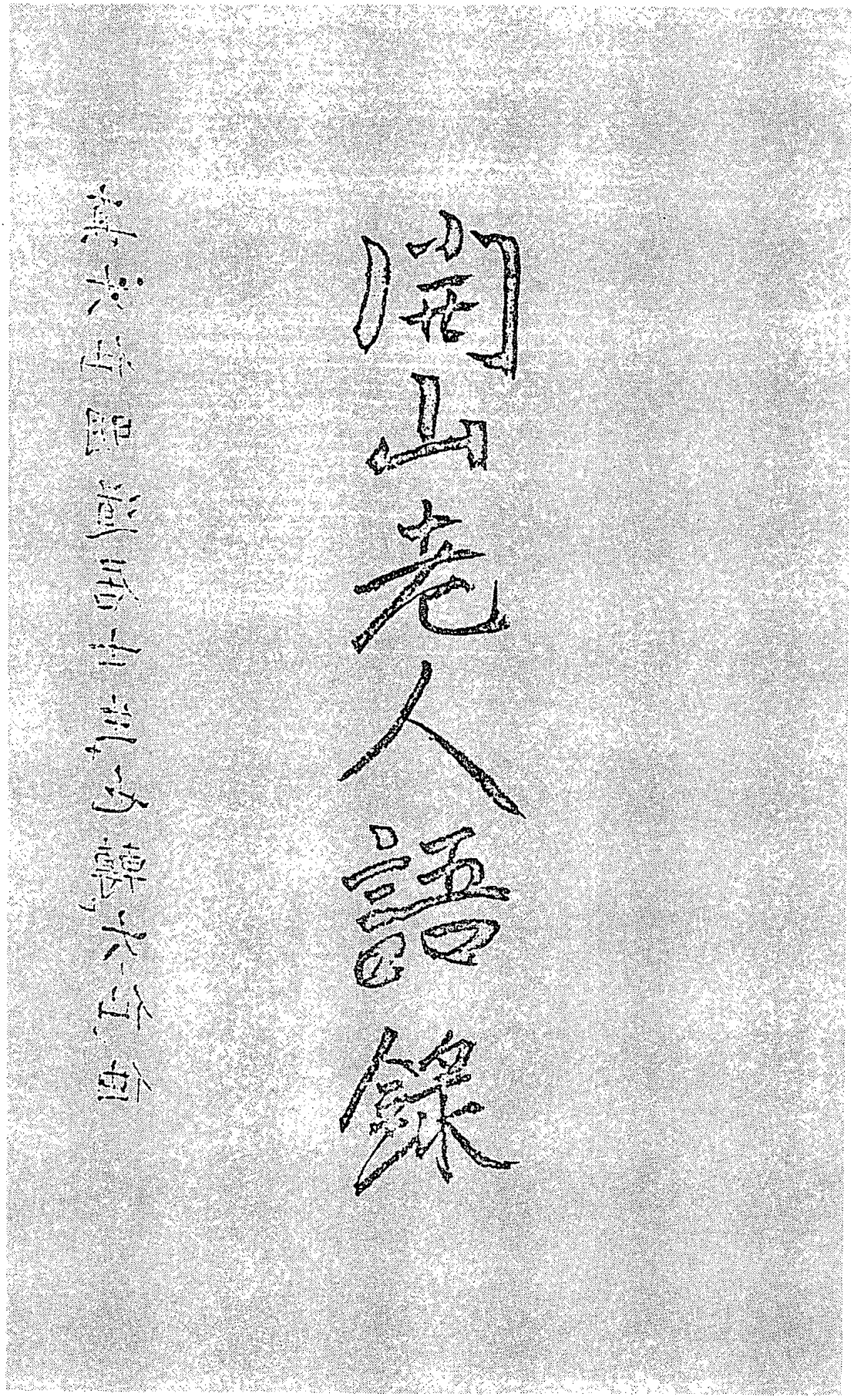
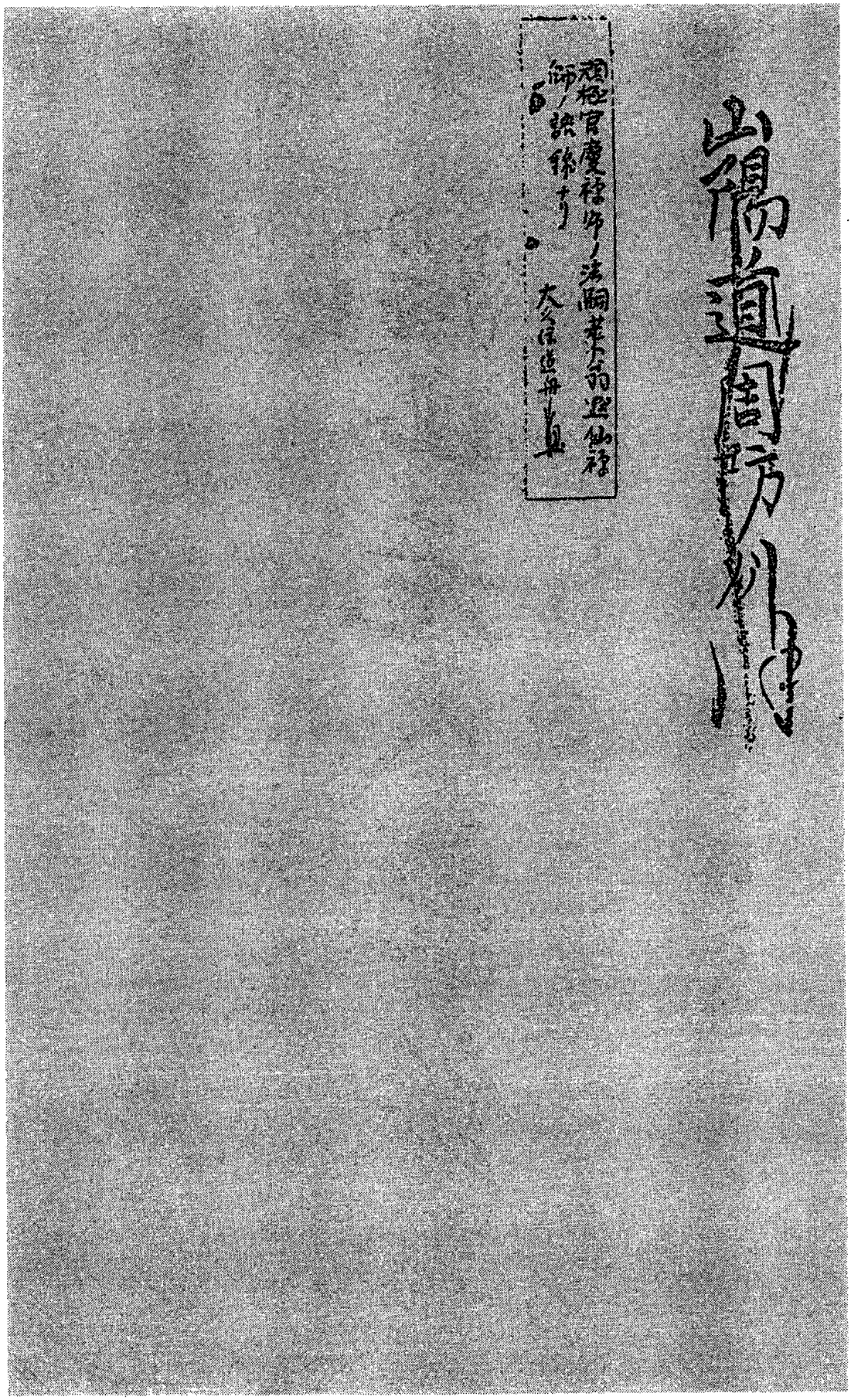
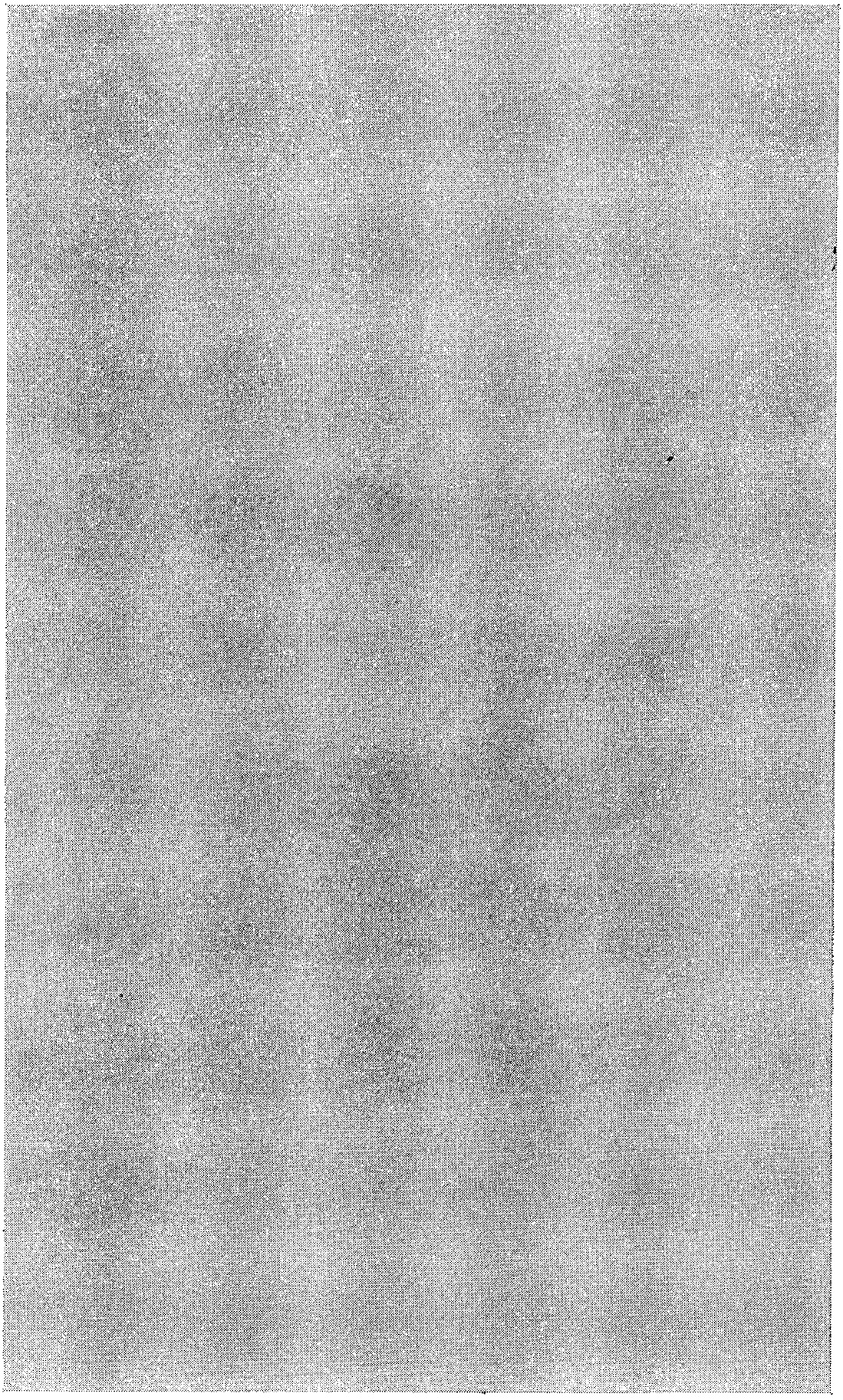


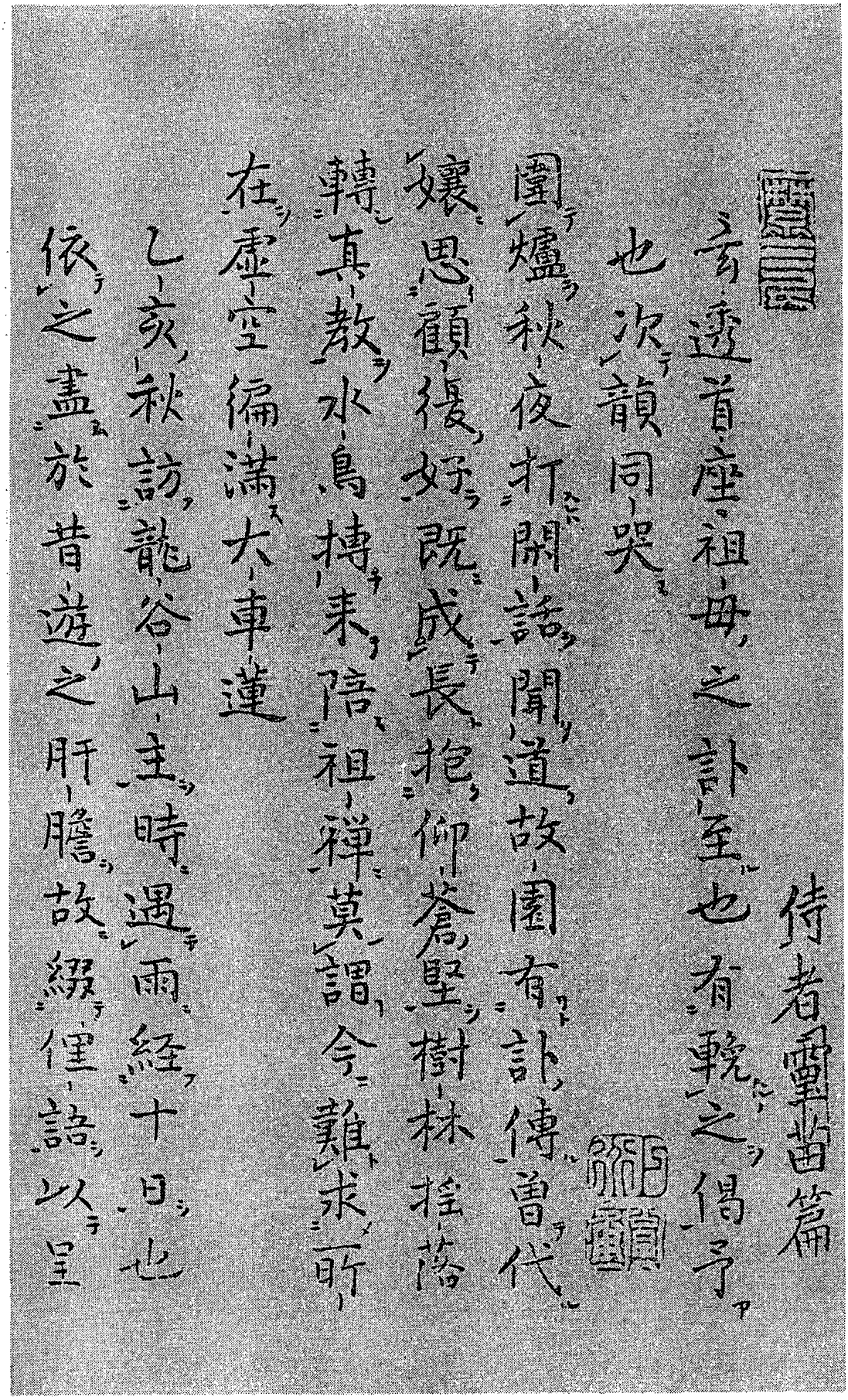
表　紙



遊紙表



遊紙裏



侍者雪崩篇

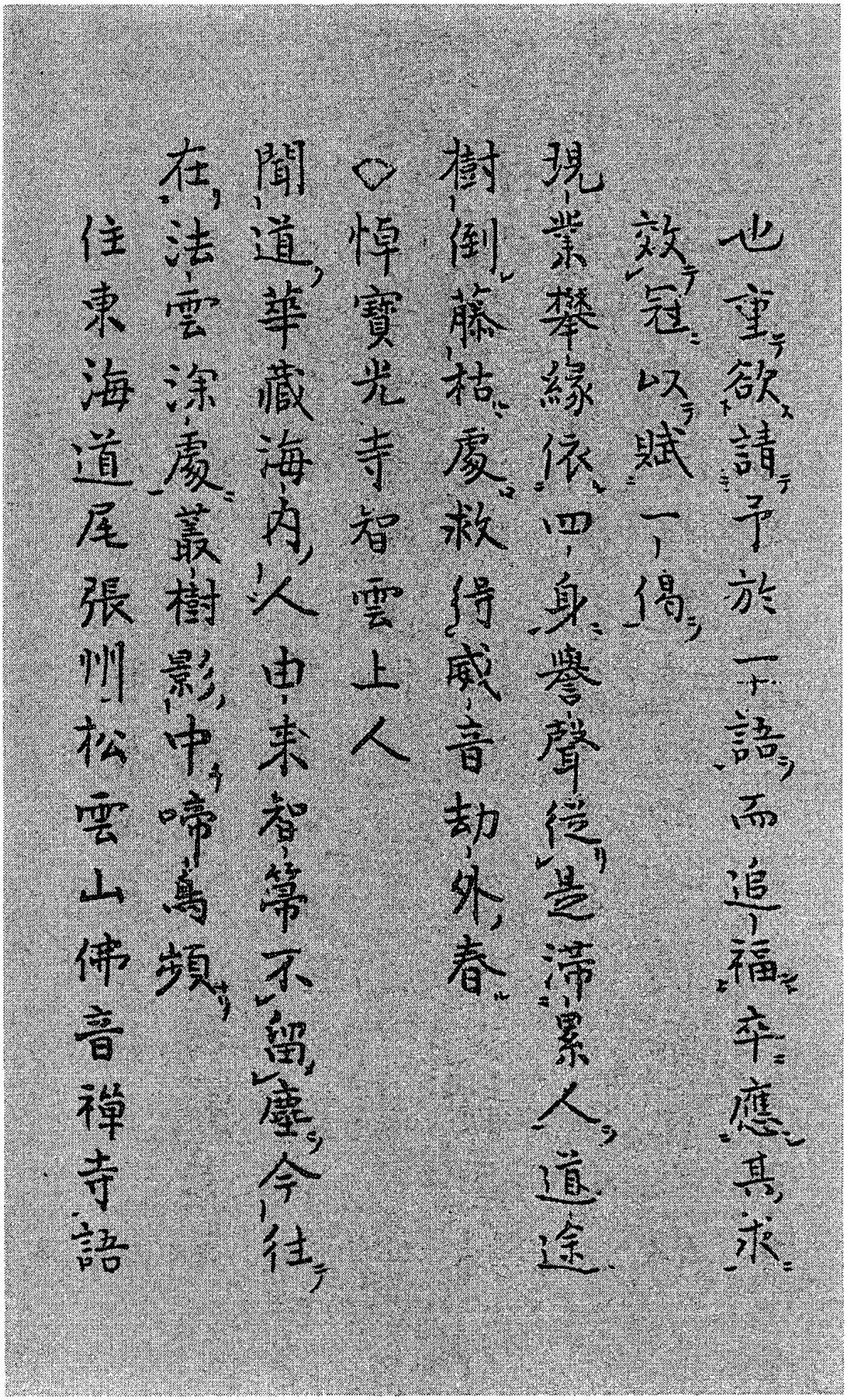
玄透首座祖母之訃至也有輓之偈子
也次韻同哭

閨爐秋夜打開話閑道故園有訃傳當代
孃思顧復好既成長抱仰蒼堅樹林挫落
轉真教水鳥栖来陪祖禅莫謂今難求昨
在虚空偏滿大車蓮

乙亥秋訪龍谷山主時遇雨経十日也
依之盡於昔遊之肝膽故綴俚語以呈

第一丁表

上座右也　龍谷山者相州雲林寺
山號也時義勇長老住
戸塚引テ此ニ汾ノ流ニ瘦藤跋渉満林秋蕭々
霖雨無ク容キ避ケ寳主重テ看ル機相投ケ
在雲林寺逢重陽
作ル容ト相陽逢フ九日ノ風塵任ニ従ヒ共ニ交歓雲林
深キ處無ク人ノ蔗ナ雨後依然タリ萬境寛ク
西復院主有リ輓ナ道救居士ノ倡熟ク見テ之ヲ以テ
現警道救之四字ヲ冠ニ句頭ニ而其ノ意能ク貫ケリ

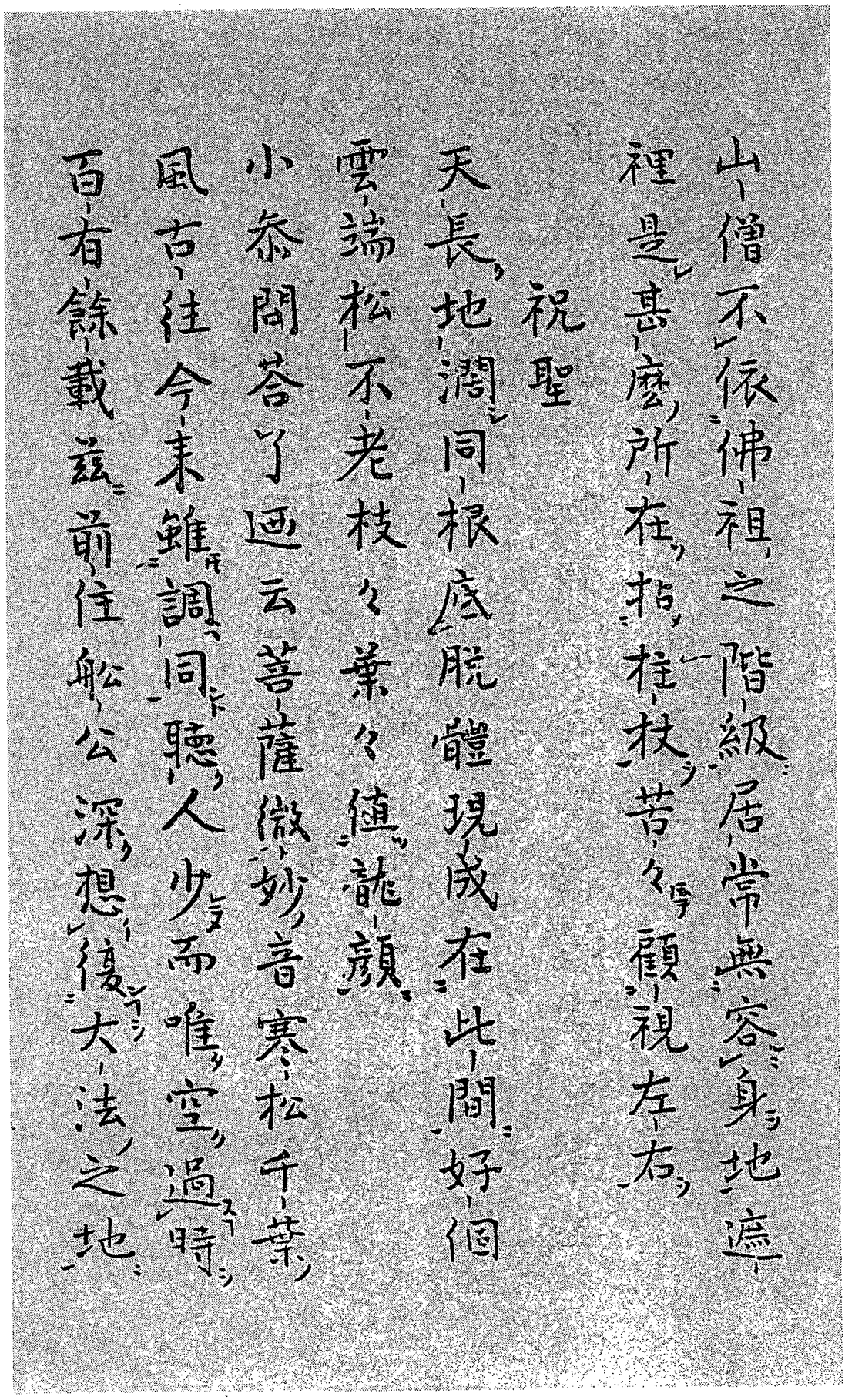


心重テ欲ス請テ予ニ於一ト語ノ而追福ヲ幸ニ應ン其求ニ
效テ冠ニ以テ賦ス一ト偈ノ
現業攀緣依ル四身ニ譽聲從リ是滯累人ノ道途
樹倒藤枯ル處ニ救得ル威音劫外ノ春ヲ
悼寶光寺智雲上人
聞道ク華藏海内ノ人由来智篤不ル留ル塵ノ今往テ
在リ法雲深キ處ニ叢樹影ノ中ノ啼鳥頻リ
住東海道尾張州松雲山佛音禪寺語

第二丁表

師於寶暦九己卯歳十二月十一日入
寺山門　侍者會宗篇
ムステ柱杖ヲ打メ圓相ヲ云乎坦々地立マ大一関ヲ透
也タ不透共ニ不ス相関ラ何ノ故ソ卓柱杖ノ即進ム
佛殿
圓通無礙應物現形觀音薩埵誰カ是安名ゾ
拈香云實哉々々即ウ禮拜
塔室

第二丁裏



山僧不依佛祖之階級居常無容身地遮裡是甚麼所在拍拄杖苦々顧視左右

祝聖

天長地濶同根底脱體現成在此間好個

雲端松不老枝々葉々値誰顔

小參問答了廻云菩薩微妙音寒松千葉

風古往今来雖調同聽人少而唯空過時

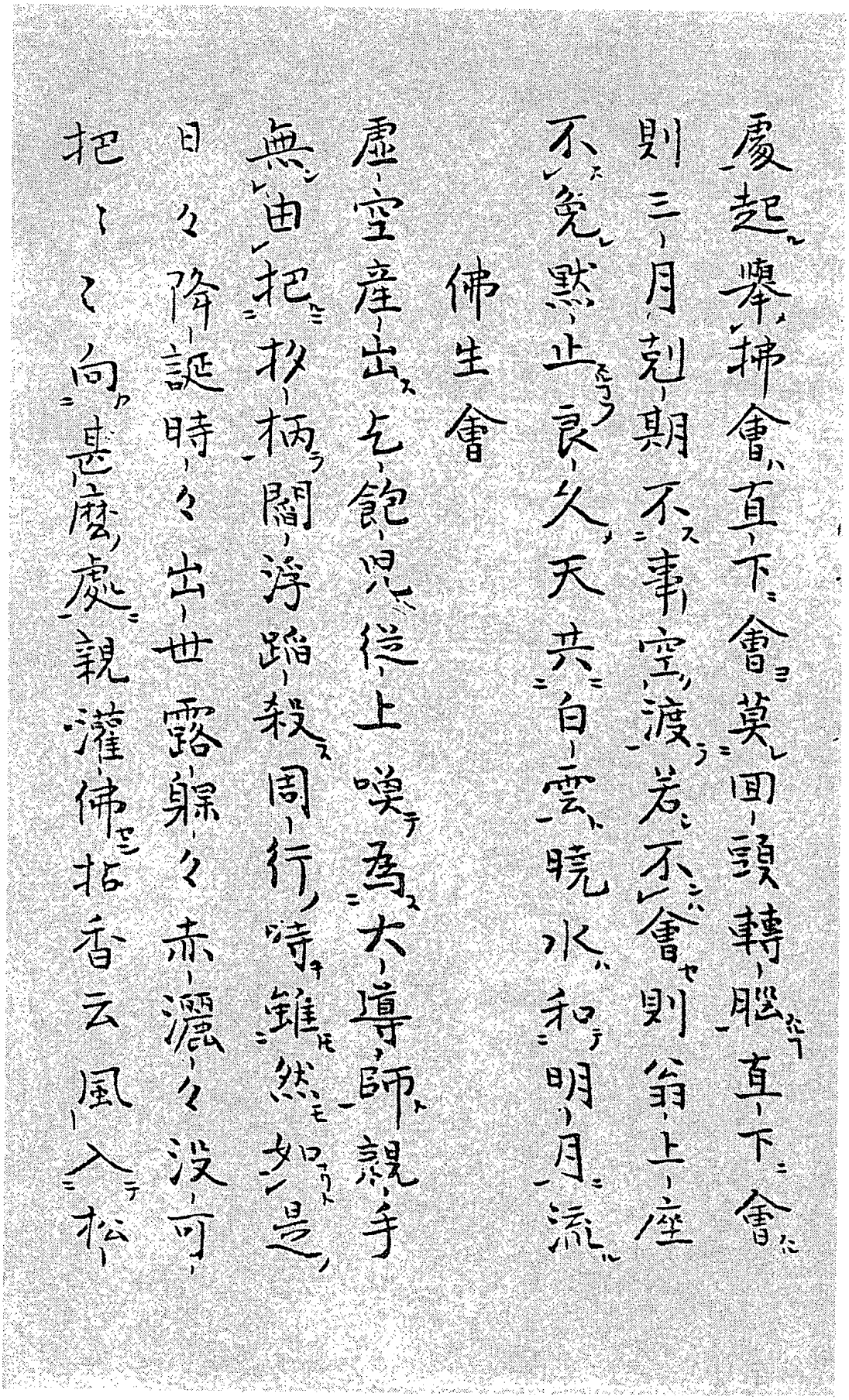
百有餘載茲前住舩公深想復大法之地

諸堂錐未營建悲時節移乃使余中興演
法余豈出山公之慈手者也依是直捨萬
緣全身荷擔忽是今古一般松風畫作獅
子吼之音諸禪德還聽也麼聽者皆耳聾
若有此耳聾底漢則是與翁上座全身荷
擔底大丈夫而他後出沒應機得大自在
隨順世緣無罣碍若又不然萬古習潭空
海月再三撈摝始可得

第三丁裏

結夏上堂微塵刹界有掌握中噢為掌則
禁足不安居噢為刹界安居不禁足直是
道當所悳然為我伽藍似遂首認影所行
以道海底泥牛嘗浪雲中木馬嘶風一行
一切行一切生一切刹一切塵一
切塵是法界一如平等性智自己微塵不
相異易同一安居同一禁足同一法身同
一取證雖然如是畢竟微塵法界從甚麼

第四丁表



慶起拳拂舎直下舎莫回頭轉脳直下舎
則三月剋期不事空渡若不舎也則翁上座
不免默止良久天共白雲暁水和明月流

佛生舎

虚空産出乞飽児従上嘆為大導師親手
無由把柄闊歩踏殺周行時錐然如是
日々降誕時々出世露躯々赤灑々没可
把ゝ向甚麼處親灌佛拈香云風入松

雲響小盡幻川日夜遶西坡
梅雨示衆
扉々梅雨竹窓曛歩頭濂水林間作暮雲正是
波濤繞千樹此脊能有幾人聞
半夏示衆
九十刻期今半過有前有後奈中何中間
指點通霄路南至薫風拂僧伽
相共一期在寮窟経行坐臥絶塵埃松雲

第五丁表

山裏夏涼滿ッ錯テ向テ外ニ邊ニ惹キ熱ト来ル
解制示衆
去来倶ニ絶ス舊家鄉爽氣風清ク敲ス草房ニ休ヨ閒ラ
出ルト門ヲ兼ラ不レ出テ七ノ通ハ一達有レ誰レ妨ン
風鈴
不レ管ニ東西南北ノ風ヲ説キ妙ニ談ス玄ト二ノ六中檐ノ間
倒ニ吐ス廣長舌ノ傾ケ耳ヲ聲塵滿ッ太ノ空ニ
賀河源首座

第五丁裏

洞也一日瞎ノ源流又長ク看ヲ歸ス福聚海洋ノ魚龍活潑多ク波浪盡ク出テ琳元ノ紀綱ヲ

賀ス良運首座

一歩千跋天地寛ク良擔運轉ノ斛ニ袍笏ノ牧牛信ヲ手ニ放閑了ス祥壽堂中ニ走盤ス

報鐘銘并序

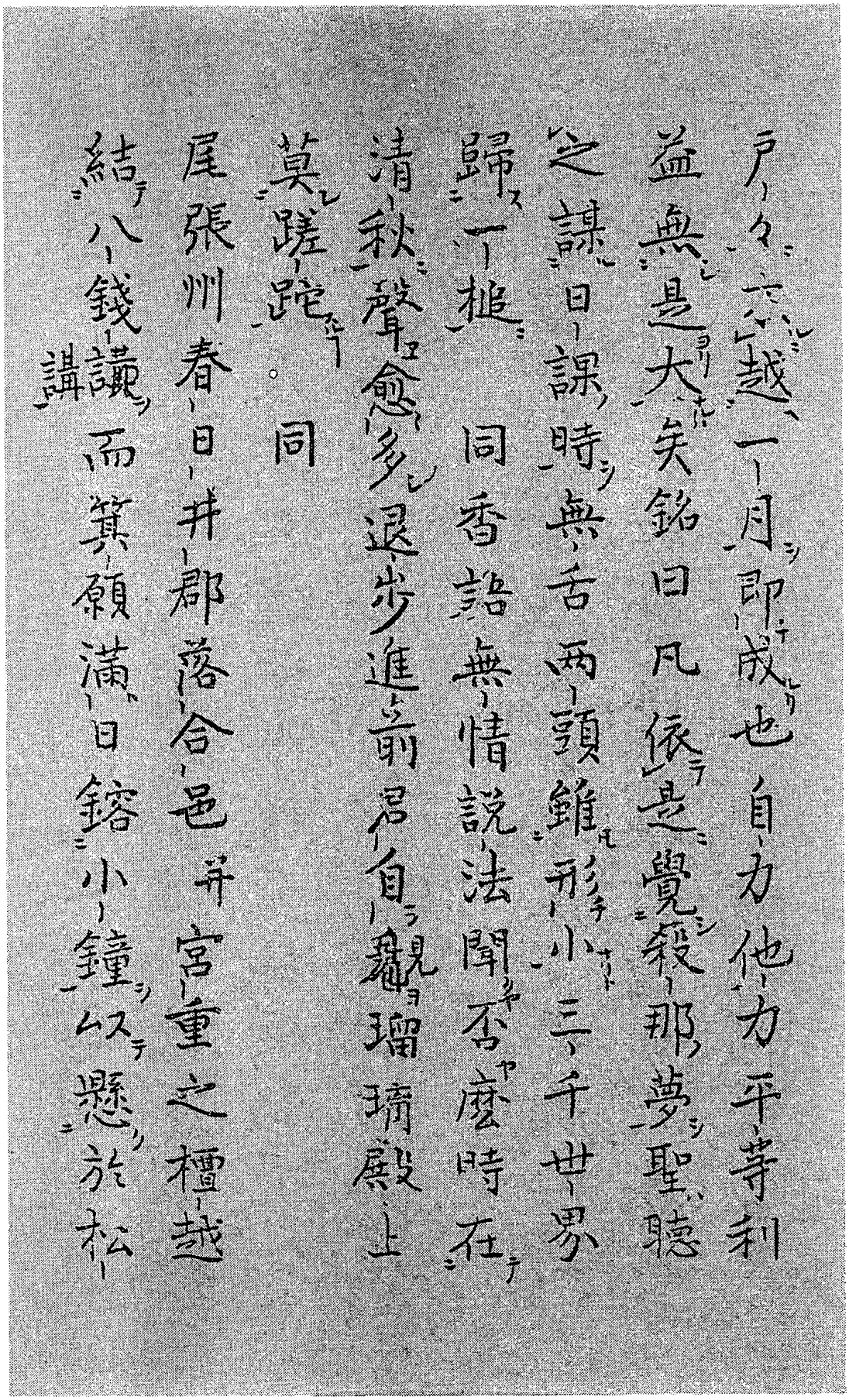
信州伊那郡山分荘小野村臨月山小野

第六丁表

寺者四壁蔵景一茅覆首之小庵無律器
一一備者於是荘内有縁之檀越計篤報鐘
而備於晨夕也遠告山僧乞銘欲銘曰
小野鐘鳴響覚昏沈雲聞月答往古来今

同

機者発當願者起成矣粤春日井郡北野
邑天龍山天松禅院恨無報鐘関於晨夕
備於其一同邑壮年者一同発願而募家々



戸々ニ六越ヘ一月ニ即チ成リ也自力他力平等利
益無シ異大矢銘曰凡依テ是ニ覺シ殺シ那夢シ聖聽
定課日ノ課ノ時シ無舌両頭雖凡ヲヲヲヲ有リ三千世界
歸スル一椹ニ同香語無情説法聞ヤ否ヤ彼時在テ
清秋ニ聲ヲ愈多シ退歩進前君自ラ見ヨ瑠璃殿上
莫レ蹉跎ヲ
同
尾張州春日井郡落合邑ニ并富重之檀越
結テ八銭講讃而冀願満日鎔小鐘シ
ムステ懸リ於ニ
講

第七丁表

雲山佛音禪寺之殿上賀福寔多矣依之
銘短偈云常張口吐無畏音通身聞底
砕染着心香語為度鈔輪苦海衆金鐘
挂在太虚空元来大地醒々者何事被叫
別調風
世人行年至四十二歳謂之生涯厄難之
年故往々抛於庫財而代于其障礙也于
厄歳之前冬依随老師于鳳山而役典座

第七丁裏

職ノ憶ニ入レ尼易レ役ニ則尼災消盡ス實ニ我從来無
物之財貨代ルニ以テ苦役之尼ニ耳ニ也矣雖モ然ト柔
門狎レ俗ニ亦タ是レ不ン他ニ也故ニ營ニ鐸ノ羹ニ菜一鍾ヲ以テ
伸ン避尼之微志ヲ耳也幸ニ初春之試ニ毫不レ覺ヘ
級ルニ短偈ヲ菜根做レ咬ニ供レ衆ニ求ル滋味愧ハ忘ン鹽ト與ラ
梅四十一年無ニ是處依然挽不レ盡春ヲ回ス

鐵門雲樹和尚一七日香語

守保山上久ク栽培不レ借ラ春信霜雪摧シ休ム言ノ

第八丁表

色香已謝去看々鐵樹鐵花開

蘆奄明首座 前住永岩寺

臘雪渾邊藏白生煙霞影裏自明々来々去々痕難覓無欠無餘全體清全體清

露々老梅別景落花日正是永岩月一輪

次韻訪病室

未開不二法門去病懶為他被頂摩勿道

畢耶疾者無翻却此一甌茶

次到幼川濯足
四圍入草廬深更汲幼川誰得禁未濕
脚頭通體潔請看水月印禪心
又有感用原韻
古城北釣幼川深弄清漪頭示不禁水景
摧殘松半樹華亭猶憶故人心
原氏持扇来請余書於一筆取之見擬
千朝鮮之製而以鐵作骨蓋雖時々納涼

第九丁表

其實有備不虞之意嗚呼不如勞其手休其陰見其敵守其主然則不得用之不用則閑其也其用與不用乃其人而得焉爲有

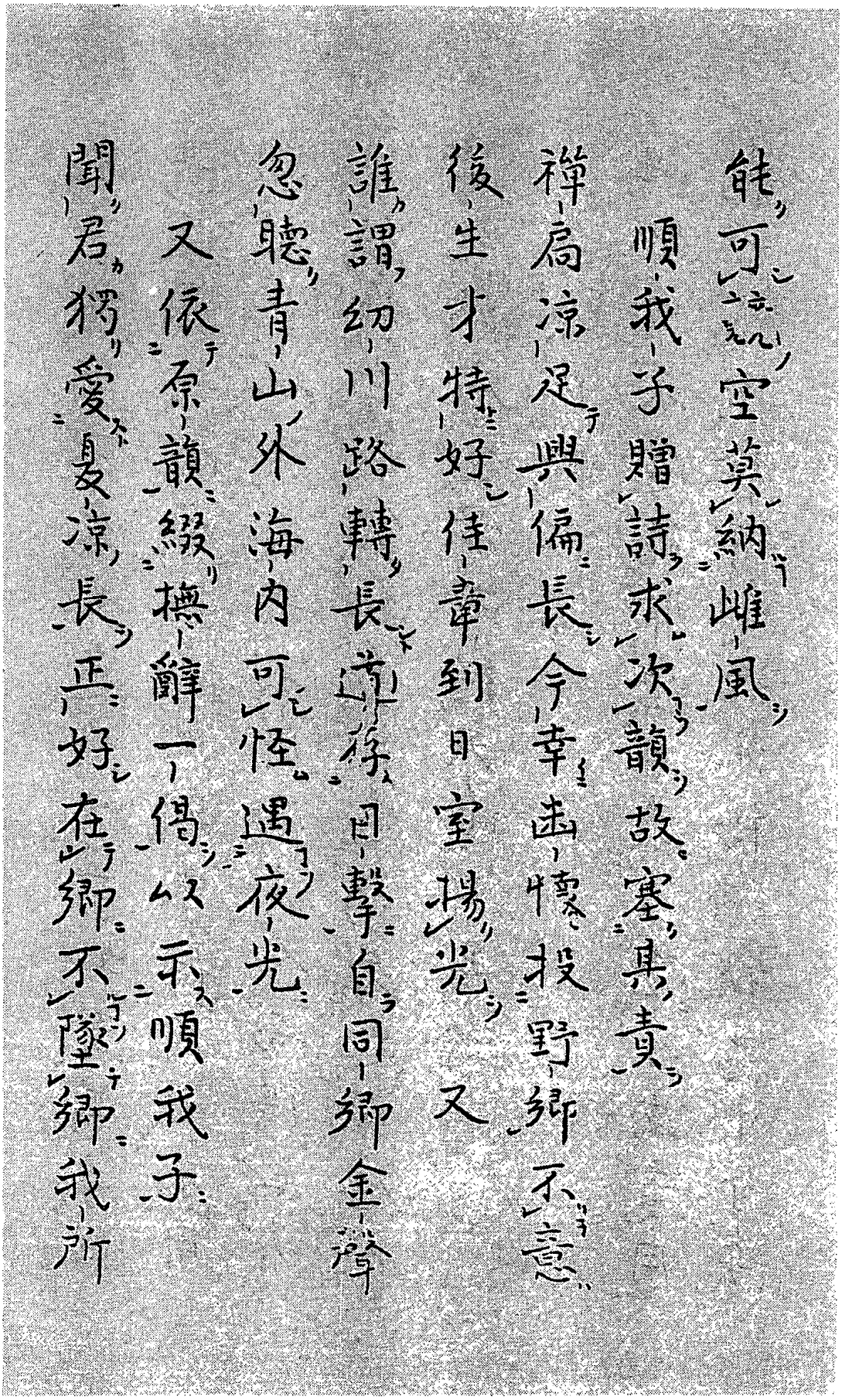
偈紙竹合成鐵作鉗打迸觸着起風塵從

来死活虚空骨不得天邊月半輪

應原氏妻之需

此物由来遠獨常重日康賀包千歲實用

表一ツカン脩竹夏涼外梧桐秋露中寸陰



能可（よきかな）空莫（なきを）納（いれ）雌風（めすかぜを）
順我子贈詩求次韻故塞其責
禅扇涼足興偏長今幸遇牧投野郷不意
後生才特好佳章到日室場光
又依原韻綴撫辭偶示順我子
聞君猶愛夏涼長正好在郷不墜郷我所

第十丁表

忘時無順逆柔門自見和光
次韻峯上座呈山僧妙偈
起我發吾非子哉和流彈出幼川隈山僧
沫掛縷糸了好個耳畳舞古墨
送書扇子應侍者
雲籠松翠月陵秋此去杖頭何摩攸臨別
錐無官老手他時須是弄牛
送女扇子雲侍者

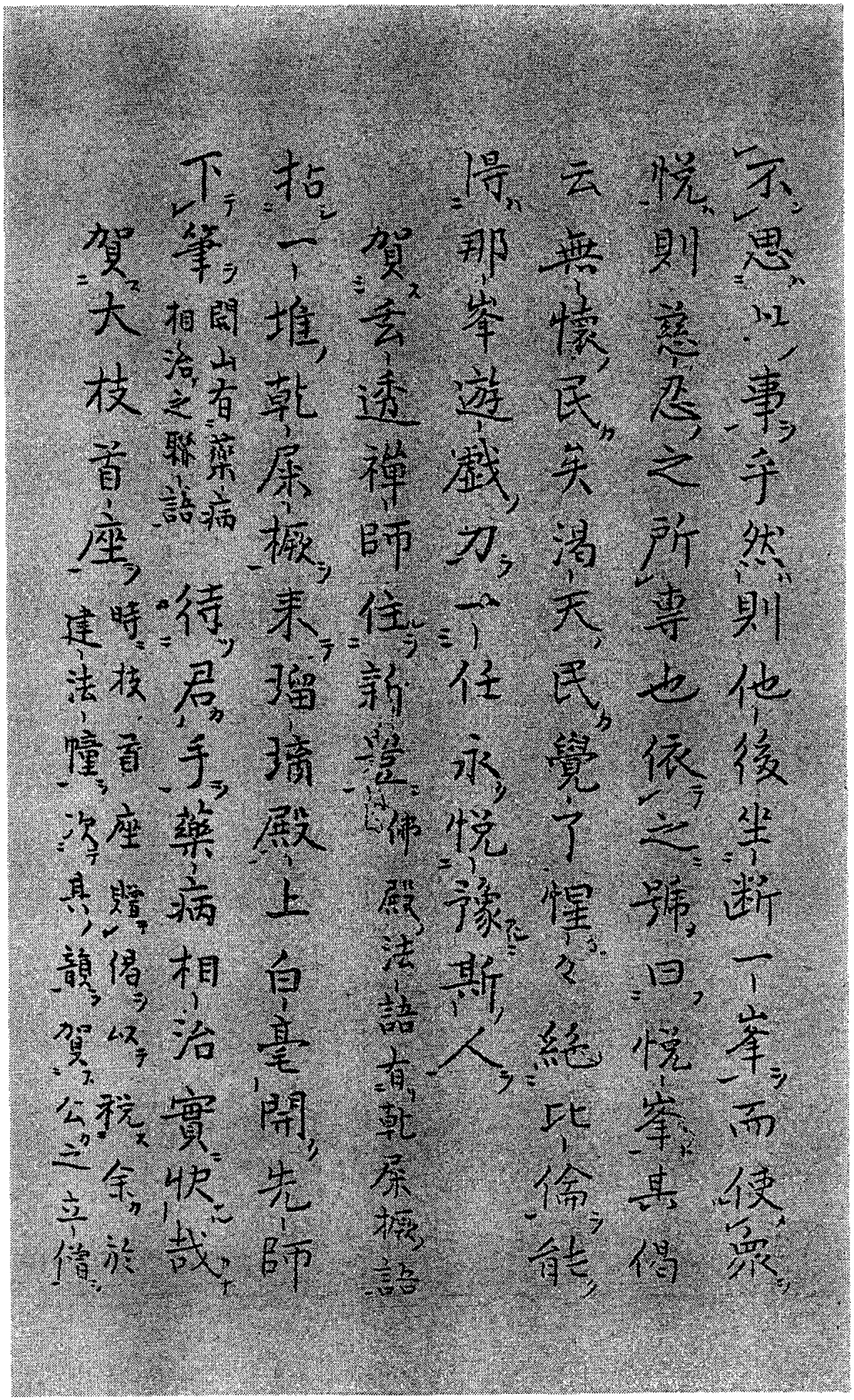
虎。

一、親旨、汲、幻川、涯、古。策欲、飛、報、我知、書、送
別、雁、扉扇子請、看、破却、値、秋。時、秋。又
泰雲出、山由、幾行、飄尓飛来、慰、道情、又、欲、傍
秋風、巻去、巻舒盡、處自、天晴、

賀新豊勝會、

意、兄禅公功、偉、哉、請、師、締構、浄梵壹撮、耕、
遊徑、計、閑坐、變動、絃歌、聴、喝雷、覺苑、拈華、
方法立、心田、掃、草、大義開、一戦猶、未、揮、文、

了亦是三舎残照田
賀屯顔首座
久和風日波江湖須是個寡量丈夫分化
今為示祖意掌中指點拄杖蘆
覺民弗悦拳拳引
有覺民者未請安弗覺民乎慧覺自然之
民尊礼遵天此是大覺世尊最初之一歩
而為一心悲忍度出現於世矣弥天釋氏豈



不レ思ニ此ノ事ヲ一、然ハ則チ他ノ後生ニ新ニ峯ヲ而使ニ衆ヲ
悦ニ、則チ慈忍之所レ尊也、依テ之ニ、弗ニ、曰ク悦峯ト号ス偈
云ク無懐民カ矣渇天民カ覚了惺々絶ニ比倫ヲ者ノ
得ニ那峯遊戯ノ刀ヲ一ニ任ス永ク悦ニ豫ニ斯ノ人ヲ
賀ス玄透禅師住ス新ニ佛殿、法語有リ乾屎橛ノ語ニ
拈シ一堆ノ乾屎橛ヲ来ラ獺瑣殿上白毫開リ先ニ師
下レ筆ヲ問ニ山有ニ薬病相治之聯語一ニ待ツ君カ手ヲ薬病相治實快哉
賀ス大枝首座ノ時ニ枝首座贈ラムステ祝ス余カ於ニ
建法ノ幢ヲ次テ其ノ韻ヘヲ賀スルカ之ニ立偈ニ

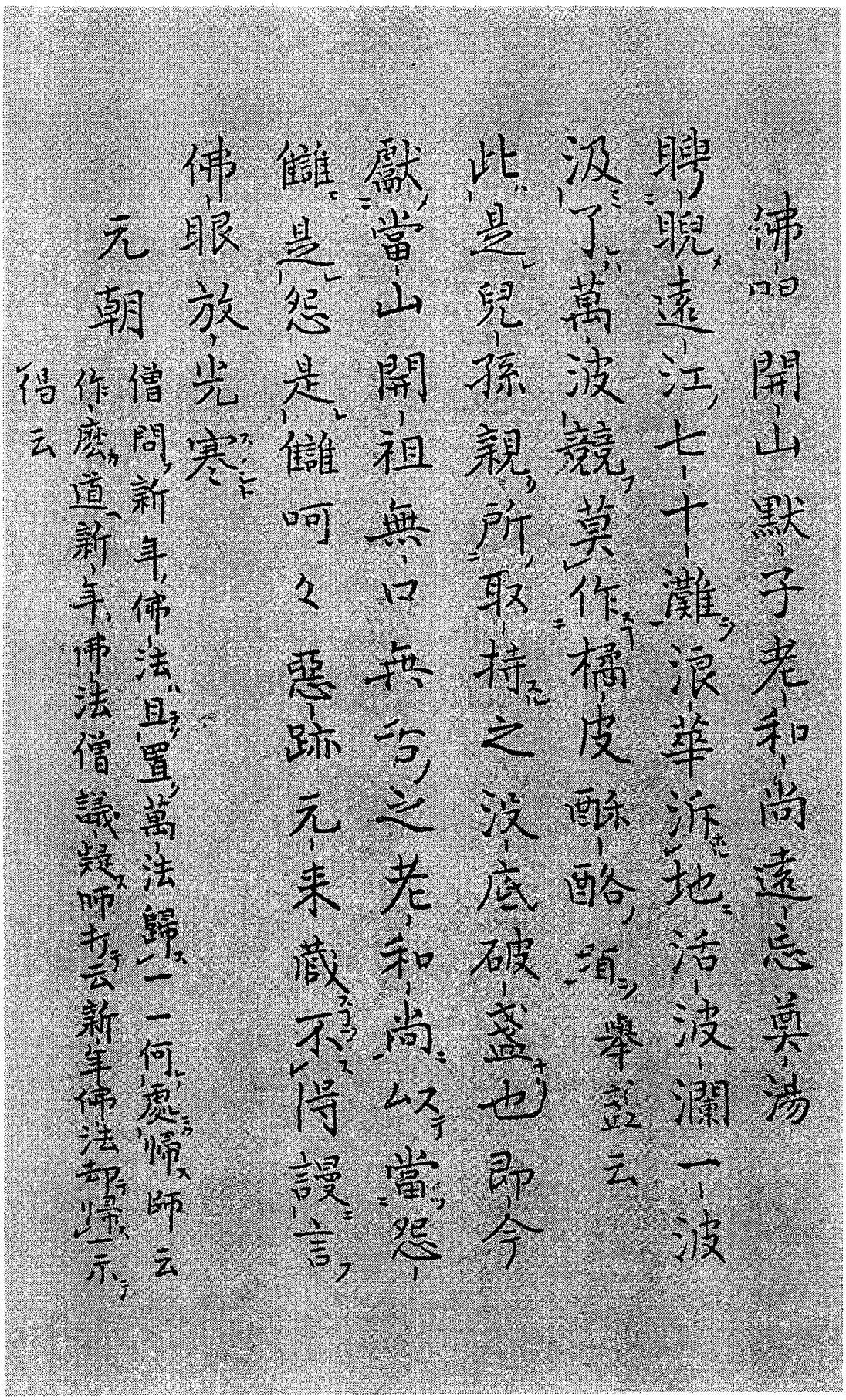
第十二丁表

叢林種草由来聽蓋覆人天揚譽聲好個
大枝生實地葉陰繁茂自史々
悼本師老和尚示寂
噫師示寂何夫駅月次風寒通體慵雙樹
枝頭空止鳥連河波底不藏龍鸞兒轉地
鳳凰嶺鷹塔曠天熊耳峯違命直饒到日廣
劫悲愉歸泣痛摧胷新豊寺山謂鳳凰山
佛眼寺山曰熊耳山
於豊寺先師和尚一七日香語

太古ノ日、音豈ニ随レ情ニ聲ヲ鳴ス天下ニ元ト無レ聲ノ頭
錯テ奏ス新豊ノ曲ヲ餘韻洛テ聞ニ洗ヒ不レ清カラ
重ネ禅容来テ問フ寒中之安否ヲ也特ニ賤ノ佳句ヲ一
章ヲ呈ス於山僧者伸フ心ヲ於ニ手ニ窮レ歳盡シ矣山僧
次レ韻ヲ二ニ絶ヲ是レ翁カ之示レ汙蝸廬中ノ三昧ヲ兼テ謝ス
来儀ヲ云 蘆雪渾テ邊全體、窮ス不レ知浮世ノ變ト
兼テ通人来テ問ハ歳盡ノ時節ト退ノ縮ス蝸廬ノ一老翁
變體時々不レ可レ窮ム唯タ依テ来儀ニ作ス神通ヲ耽ス今ニ

第十三丁表

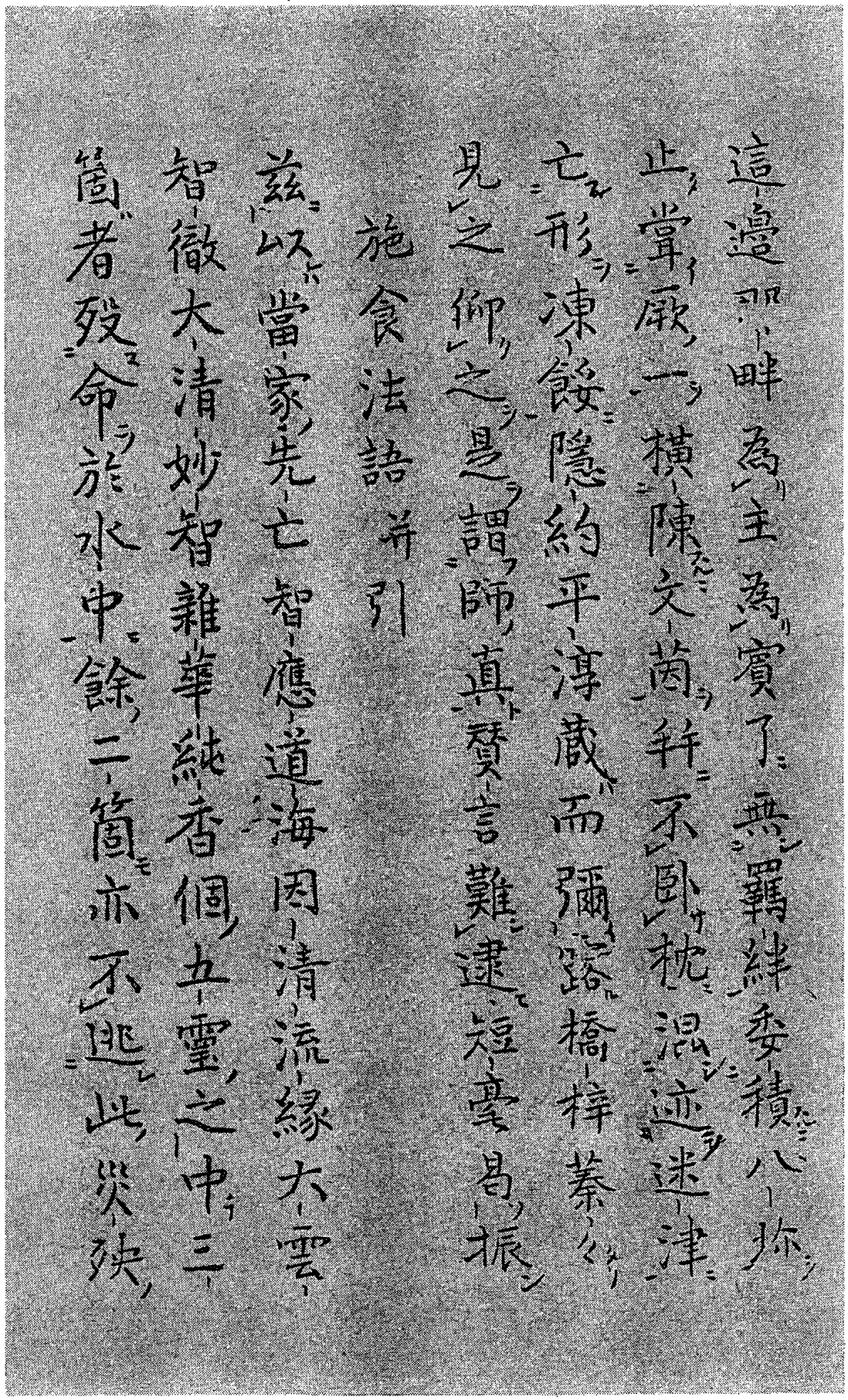
奏歳未佳曲懶慵踈容稱此筍
賀禪燈首座
自如不效庸流禪賛賞有言未發先果視
解袍安投夕一燈挑照人天
明和五戊子春到于佛眼寺先師牌前
香語
山遠水長馳不遑雙趺可恨欠隱藏餘腥
猶在一無地攫作一爐爛木香



佛曰開山默子老和尚遠忌奠湯
聘覩遠江七十灘ノ浪華汴地活波瀾一波
汲了萬波競ノ莫作ス橘皮酥酪ノ頌ヲ擧ス云
此是レ兒孫親ノ所ニ取持之波底破盞也即今
獻ル當山開祖無口老和尚ニムステ當ツ忌
辰是レ忌是レ辰呵々惡跡元来藏不レ得謾ニ言フ
佛眼放光寒ト

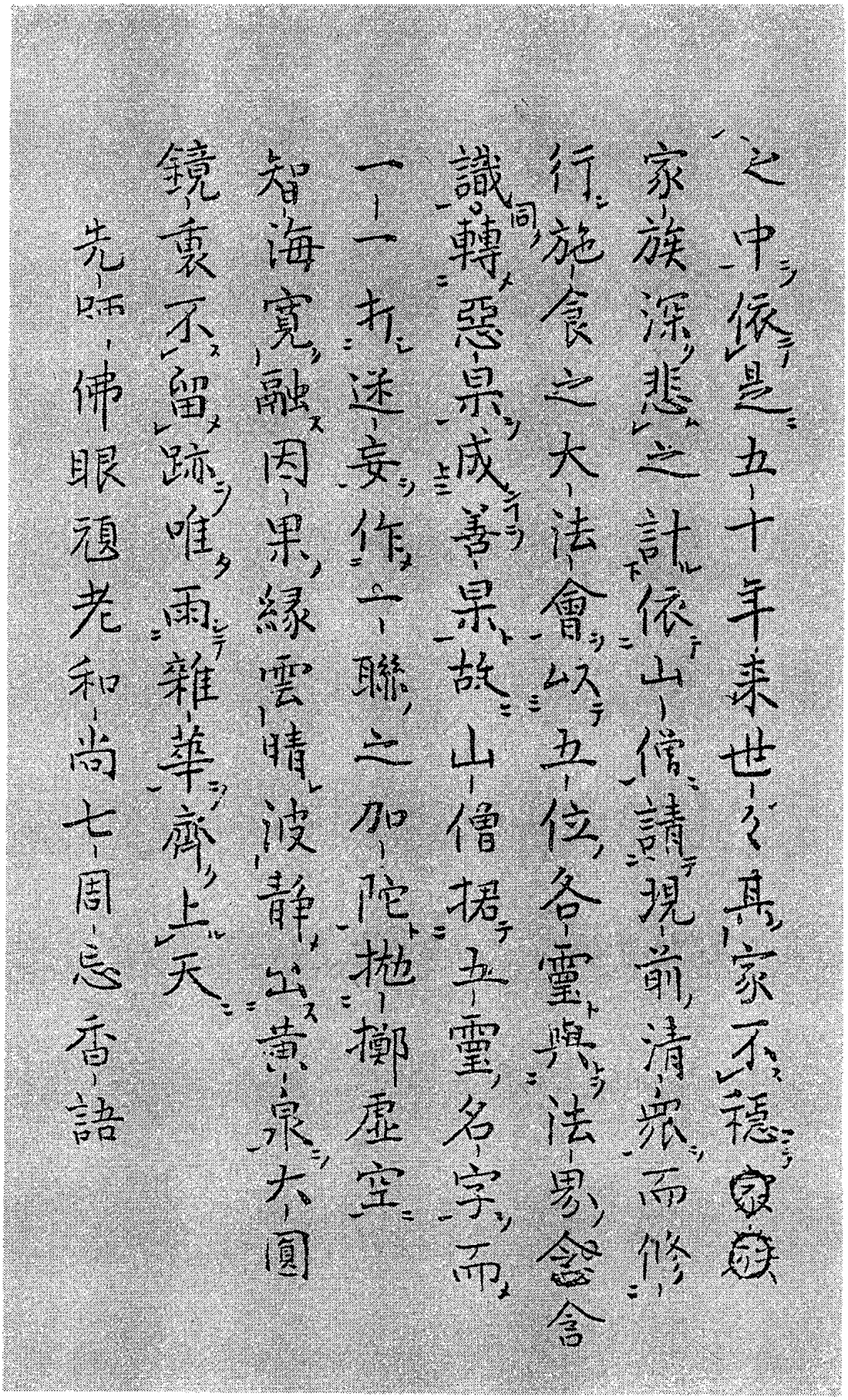
元朝僧問新年佛法且置萬法歸一一何處ニ歸ス師云
作麼カ道新年佛法僧議疑ス師打テ云新年佛法却テ帰ル一示テ
倡云

新年佛法却テ歸レ一ニ賓主交參當面ニ失ス見ヨ
雨華散乱春今来古往都テ好キ日
報恩開山雲閑和尚遠諱香語
遠ク分テ源流ヲ茲ニ泳ギ游ス逕ヲ閣テ乳峯シ汲ム怨雛ヲ二ニ百
餘年多シ逆浪有ル誰急水ニ打ス毛毬シ打ス毛毬シ咄
咄拳香嘸樓一炷如シ雲ノ起ル直ニ傍テ熏風ニ住ニ不ス留ラ
長國孔宗和尚壽像賛布毛和尚請
顔貌ニ口ニ一嗇踞坐峻郷。革レ席シ三一所ニ乘ス個ニ一圓頂ノ事ニ
辞ス。



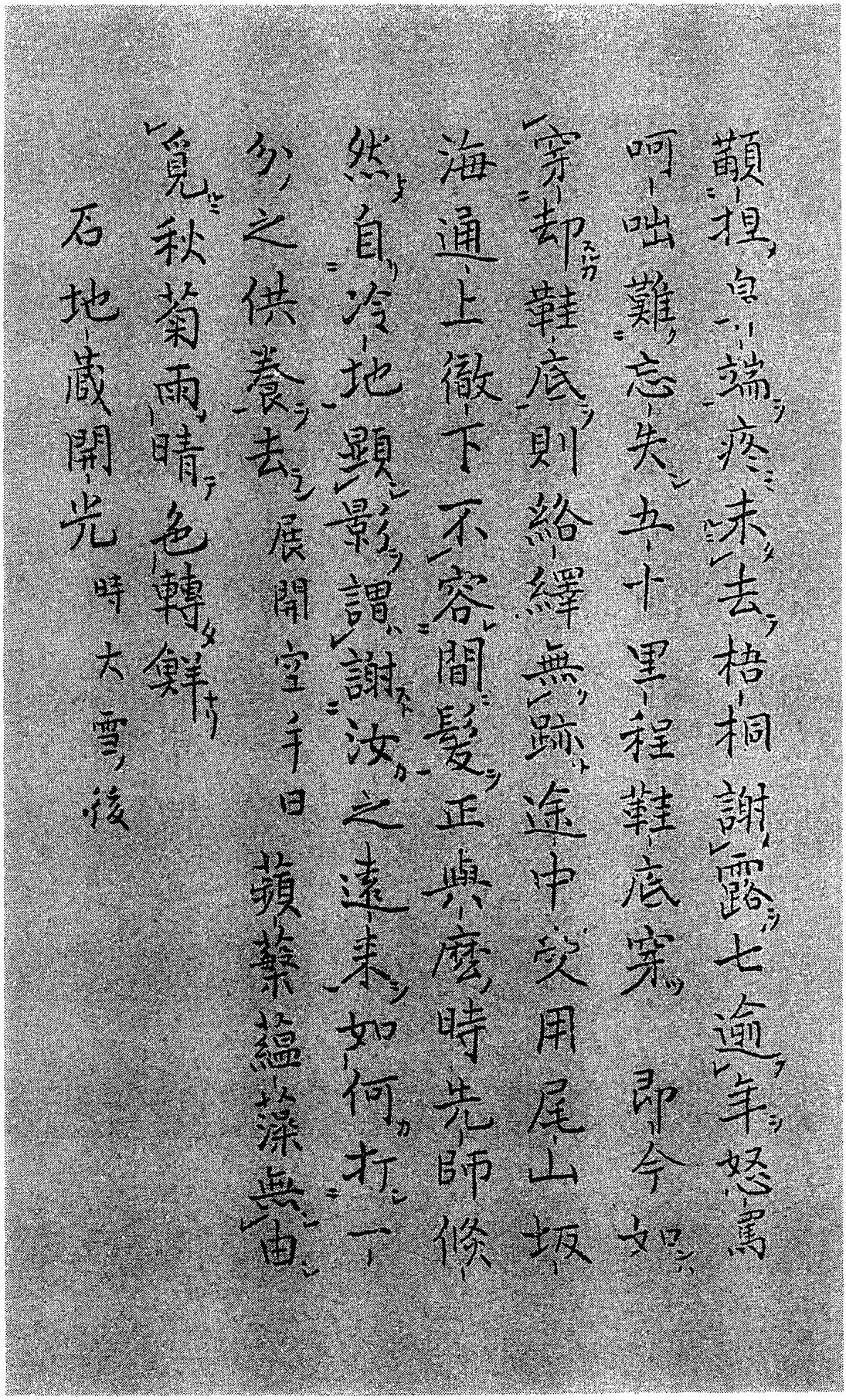
這邊叩畔為主為賓了無羈絆委積八九
止當厥一橫陳文茵幷不臥枕混迹迷津
亡形凍餒隱約平濘蔵而彌路橋梓蓁々
見之仰之思謂師真贊言難逮短宴易振
施食法語并引
茲以當家先亡智應道海因清流緣大雲
智徹大清妙智雜華純香偈五雲之中三
箇者歿命於水中餘二箇亦不逃此災狹

第十五丁表



之中依是五十年来世々其家不穏寂
家族深悲之計依山僧請現前清衆而修
行施食之大法會ムステ五位各霊與法界冥合
識轉惡果成善果故山僧招テ五霊名字而
一一打迷妄作一聯之加陀抛擲虚空
智海寛融因果縁雲晴波静出黄泉大圓
鏡裏不留跡唯夕雨雜華廣上天
先師佛眼禅老和尚七周忌香語

第十五丁裏

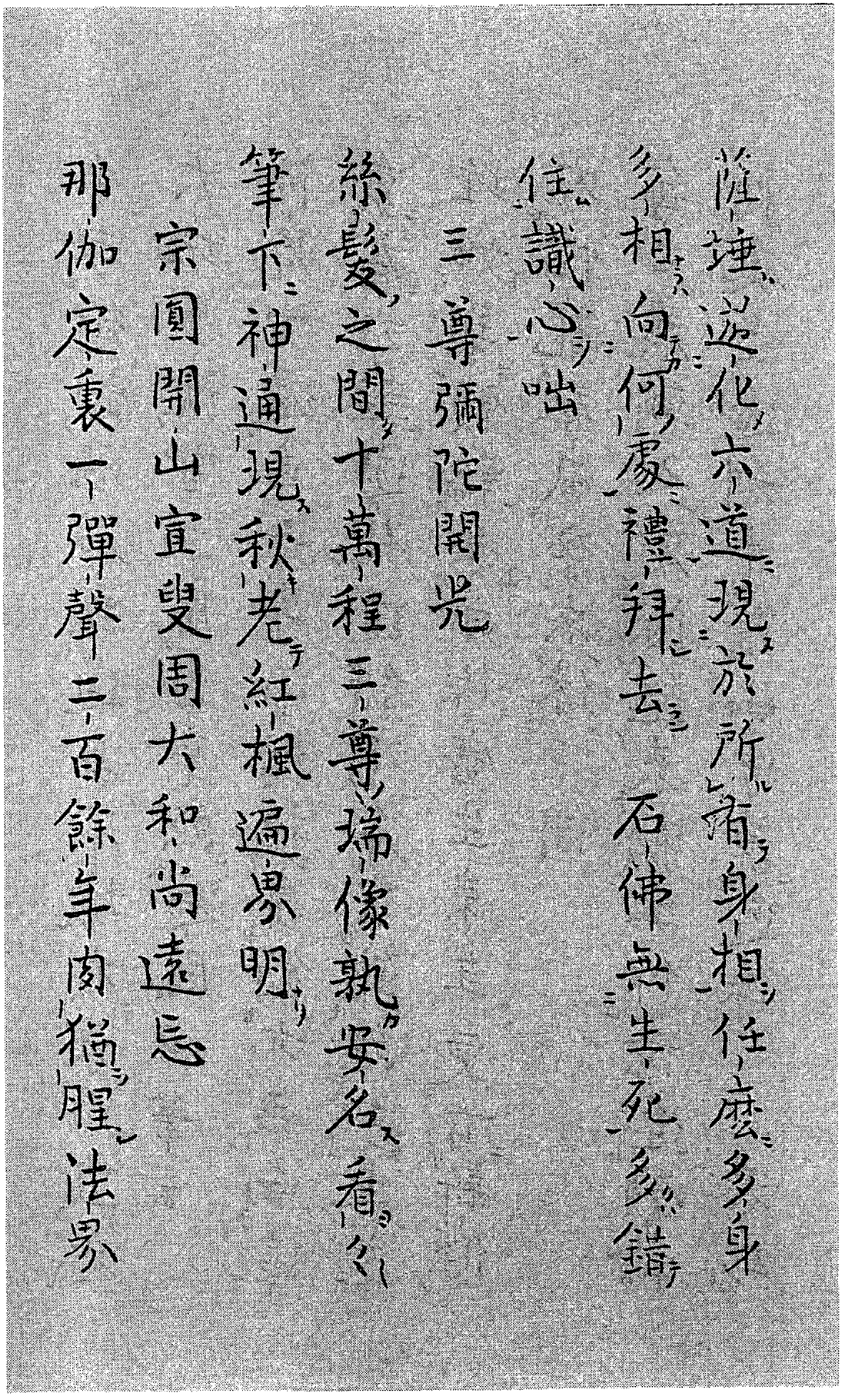


顆担白一端疫未去梧桐謝露七逾年怒罵
呵咄難忘失十里程鞋底穿即今如
穿却鞋底則給繹無跡途中受用尾山坂
海通上徹下不容間髪正與痩時先師條
然自冷地顕影謂謝汝之遠来如何打一
分之供養去辰開空手曰頭纔縁深無由
覚秋菊雨晴色轉鮮
石地蔵開光時大雪後

第十六丁表

十字街頭、履石頭通身不壊有来由直看
大地平沈、雪一片、白毫照遍周沙界一遍、白毫光山僧措身錐亦無向這
裏為六趣遊化道、錯下名言雖然如是、薩
埵如乗願輪来亦作麼生来年更有新條
在惱亂春風卒未休 同
毎日晨朝入定深起来織土作黄金願輪
轉處々々過刹土寶山中莫迎尋 恭々

第十六丁裏

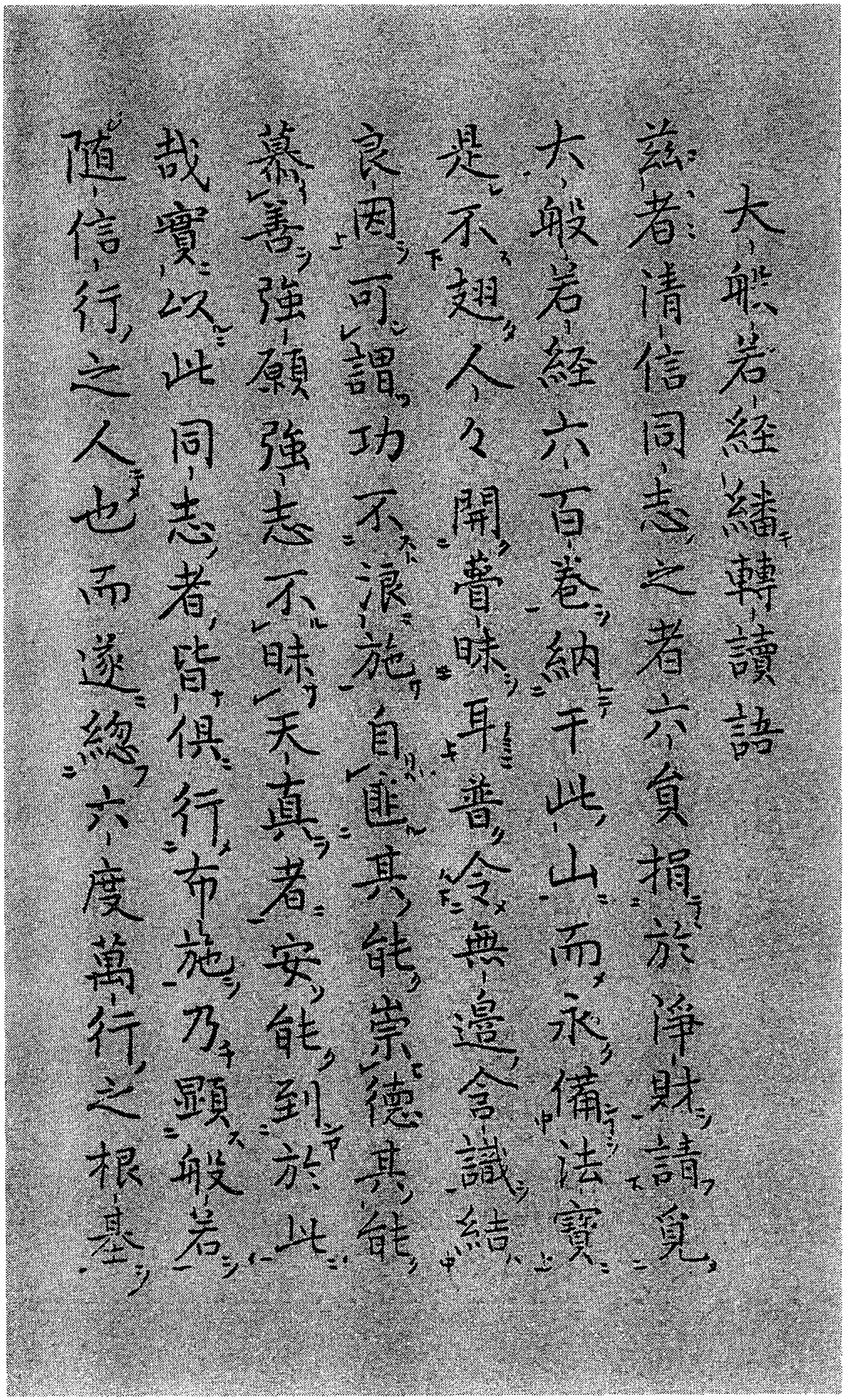


隨逢逆化六道現於所止身相住處多身
多相向何處禮拜去石佛無生死多錯
住識心出
三尊彌陀開光
絲髮之間十萬程三尊瑞像孰安名看々
筆下神通現秋老紅楓遍界明
宗圓開山宜叟周太和尚遠忌
那伽定裏一彈聲二百餘年肉猶腥法界

第十七丁表

周遍宣説、外涼風佳月可憐生
般若十六善神開光
巍々(ぎぎ)萬徳、紫金身行智圓明自相親ニ一八ノ
神王通ス妙力ヲ開花野草芽々含ム春ヲ芽々含ム春ヲ
滿座聖賢和氣諧々向テ遮裏ニ説ク默眼ト累ル他ノ
佛菩薩護法十六善神菩ヲ惱門著ト地ニ何カ故ソ
指道場云普賢象王文殊師坐不聽カ如ク来ノ
海潮音ヲ七千夜又各鎮ス其ノ品ヲ

第十七丁裏

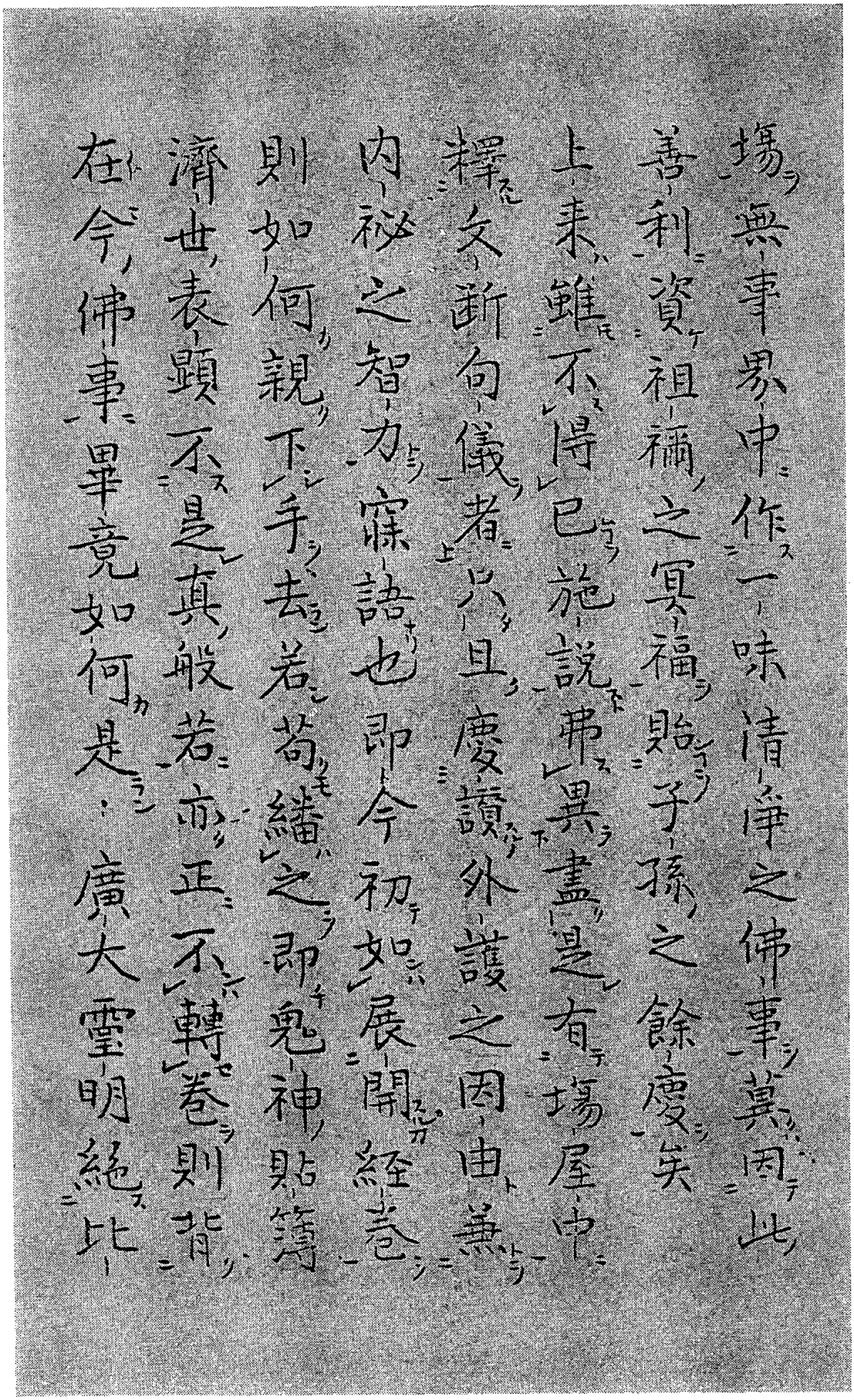


大般若経轉讀語
茲者清信同志之者六員捐於淨財請覓
大般若経六百卷納于此山而永備法寶
是不翅人々開耆昧耳普令無遠含識結
良因可謂功不浪施自匪其能崇德其能
慕善強願強志不昧天真者安能到於此
哉實以此同志者皆俱行布施乃顯般若
隨信行之人也而遂總六度萬行之根基

第十八丁表

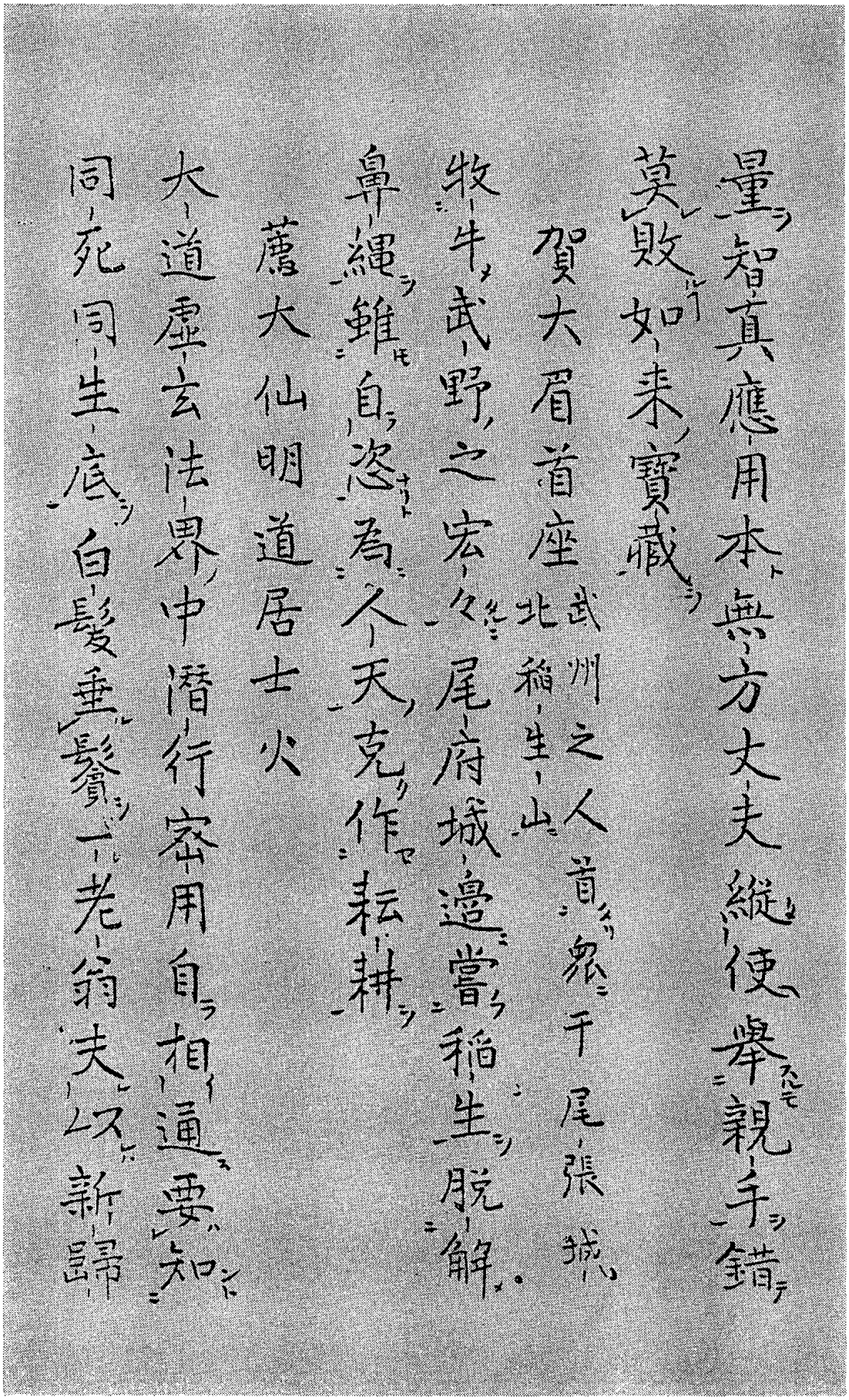
也是故六負契會六波羅蜜六情混融一識其識素無所有故轉倫滿無相之空中通聖通凡曰貴曰賤或禍或福恍惚乎雖似有象窈冥而不可得觸着其不可得之象故通身之般若爲有所。間然也夫般若也者雖ムストモ百喩千況所不能歎者也又曷可待予贅言于雖然今將借山僧千緒無緜約之一紐故一寞端上起百寶莊嚴之道

第十八丁裏



場ノ無事界中ニ作ス一味清淨之佛事ヲ冥冥ノ裏ニ此ノ善利ニ資ケ祖禰ノ之冥福ヲ貽シ子孫之餘慶ニ矣上来雖モ不レ得レ已ラ施説ヲ弗レ異ラ盡リ是レ有テ場屋ノ中ニ擇ん文ヲ斯ノ句ノ儀ノ者ニハ八ノ一旦ノ慶讀ス外ノ護之因由ト兼シテ内ノ祕之智力ヲ寔ニ詰リ也即今初テ展ニ開スル経巻ニ則如何ノ親リ下レ手シ去ラ若シ苟モ緒ハ之ヲ即チ鬼神ノ貽簣濟世ノ表顕ス不ス是レ真ノ般若ニ亦ノ正ニ不レ轉ラ巻ヲ則チ背リ在今ノ佛事ニ畢竟如何カ是ラン廣大靈明絶ス比ニ

第十九丁表



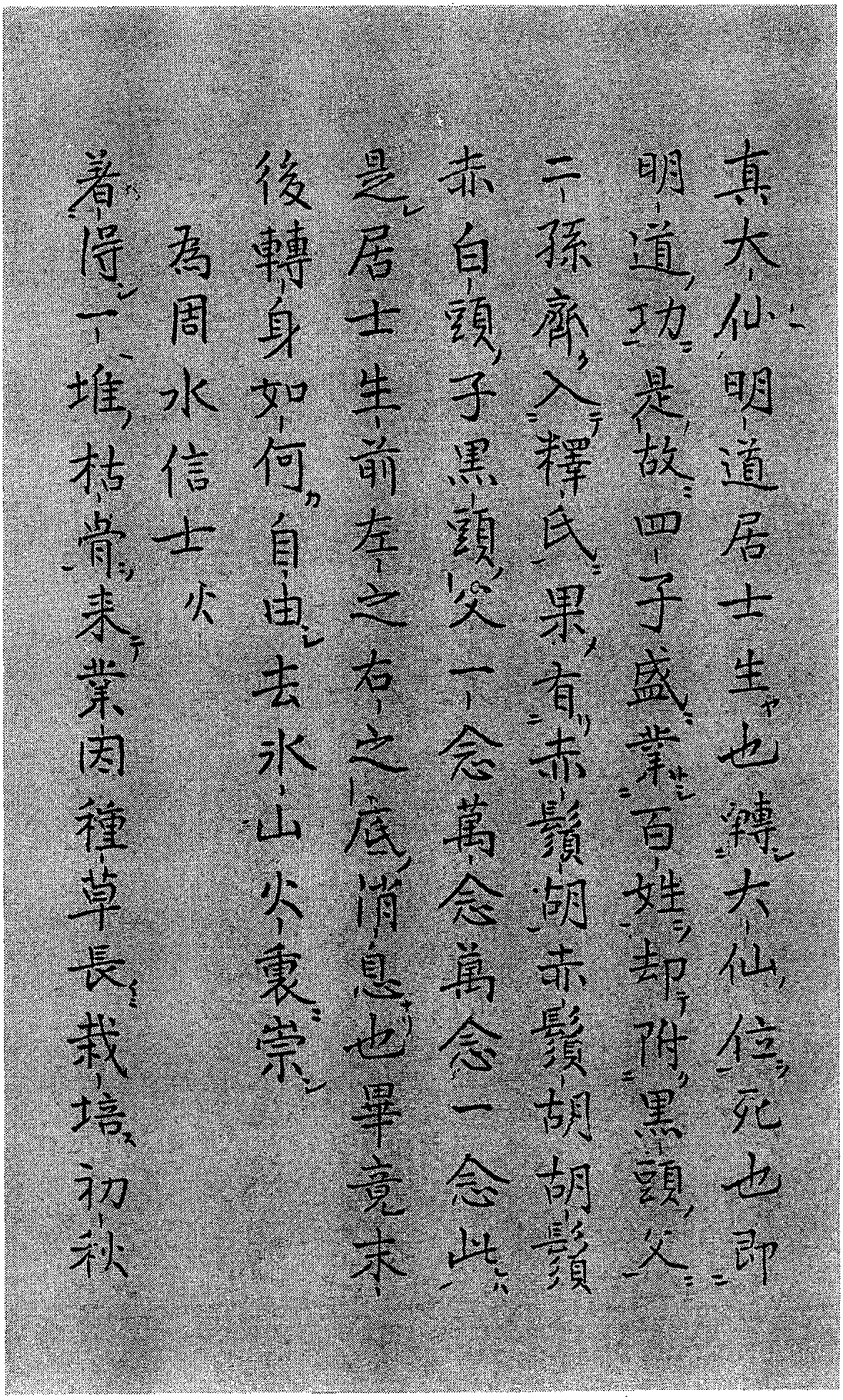
量智真應用本無方丈夫縱使舉親手錯
莫敗如來寶藏

賀大眉首座 武州之人 首衆于尾張城
北稲生山

牧牛武野之宏々尾府城邊當稲生脱解
鼻縄雖自恣為人天克作耘耕

贈大仙明道居士火

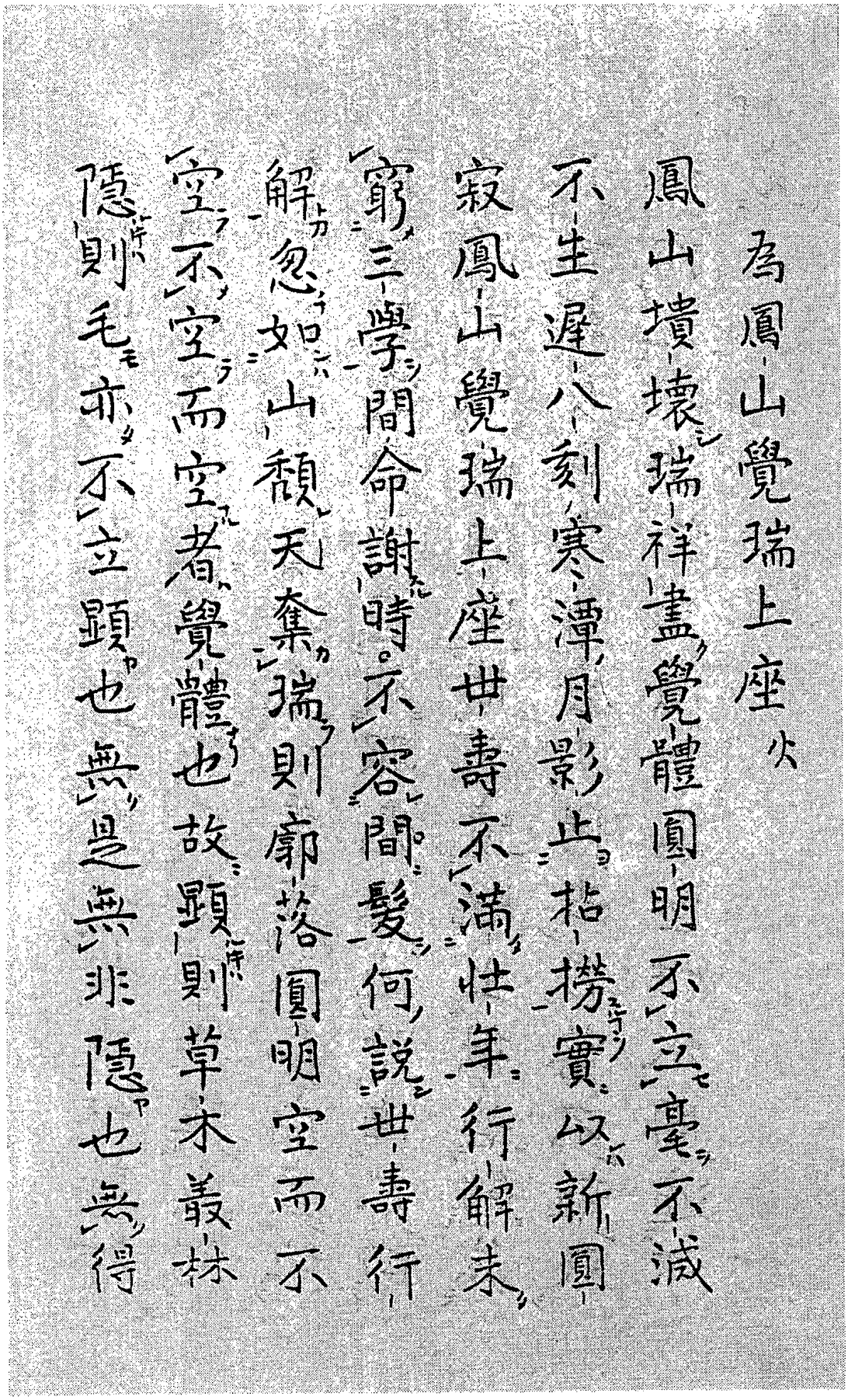
大道虚玄法界中潜行密用自相通要知
同死同生底白髪垂鬢一老翁夫レスル新歸



真大仙明道居士生也縛大仙信死也即
明道功是故四子盛業百姓却附黒頭父
二孫廓入釋氏果有赤鬚胡赤鬚胡鬚
赤白頭子黒頭父一念萬念萬念一念此
是居士生前左之右之底消息也畢竟未
後轉身如何自由去氷山火裏崇
為周水信士火
著得一堆枯骨未業因種草長栽培初秋

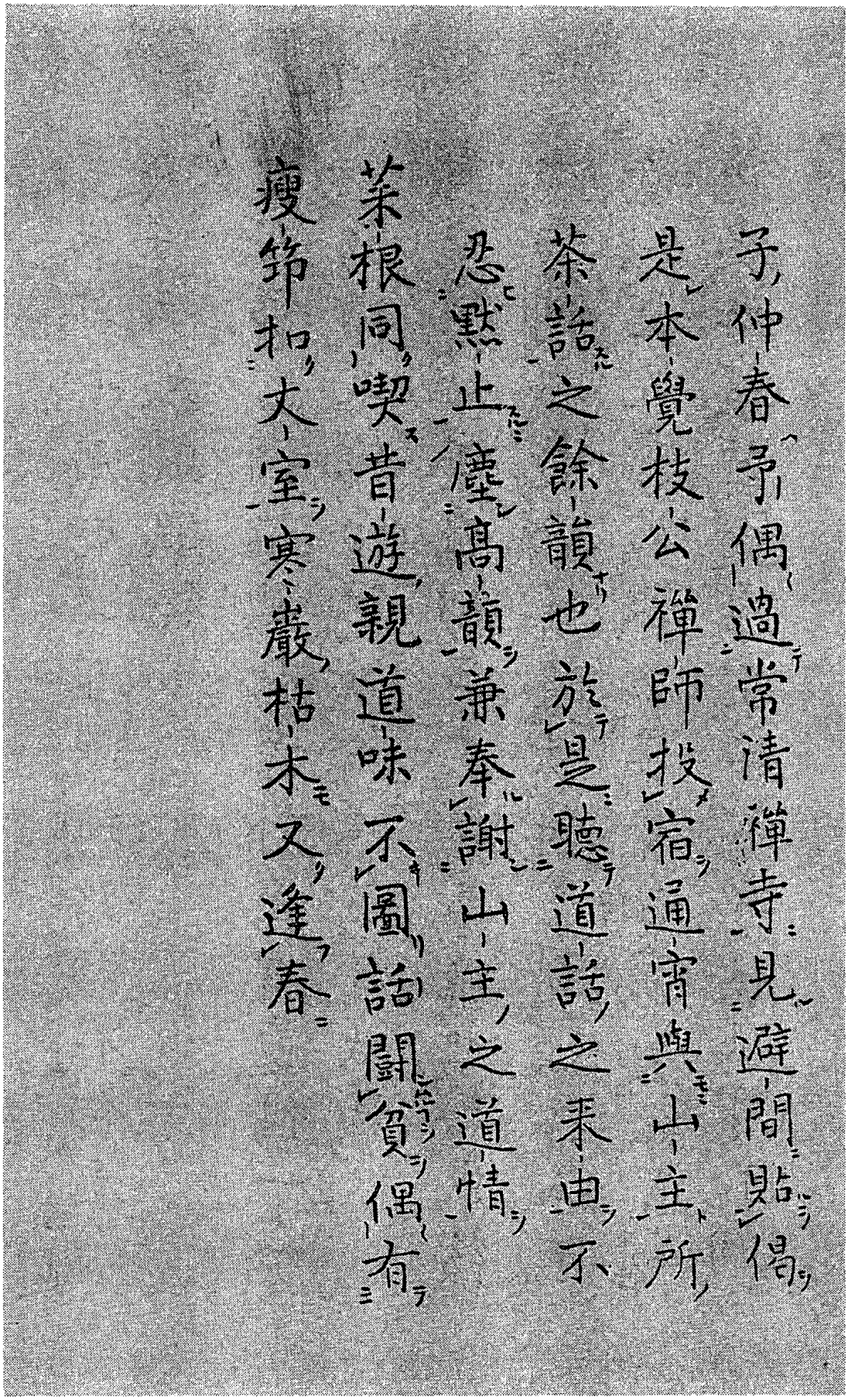
第二十丁表

乘個天籟氣爲雨爲風實快哉夫レムス新歸
元周水信士受形男子取業百姓雖生個
佛國不知三寶名字口業且天身病盡地獄
墮獄罪避無所忽到眼光落地時悔不及
未後幸依山僧逢筒呵嘖脫出獄苦雖然
如是轉身自在作麼生得去月落不離天
水流元入海如来藏中真空性水周遍十
方



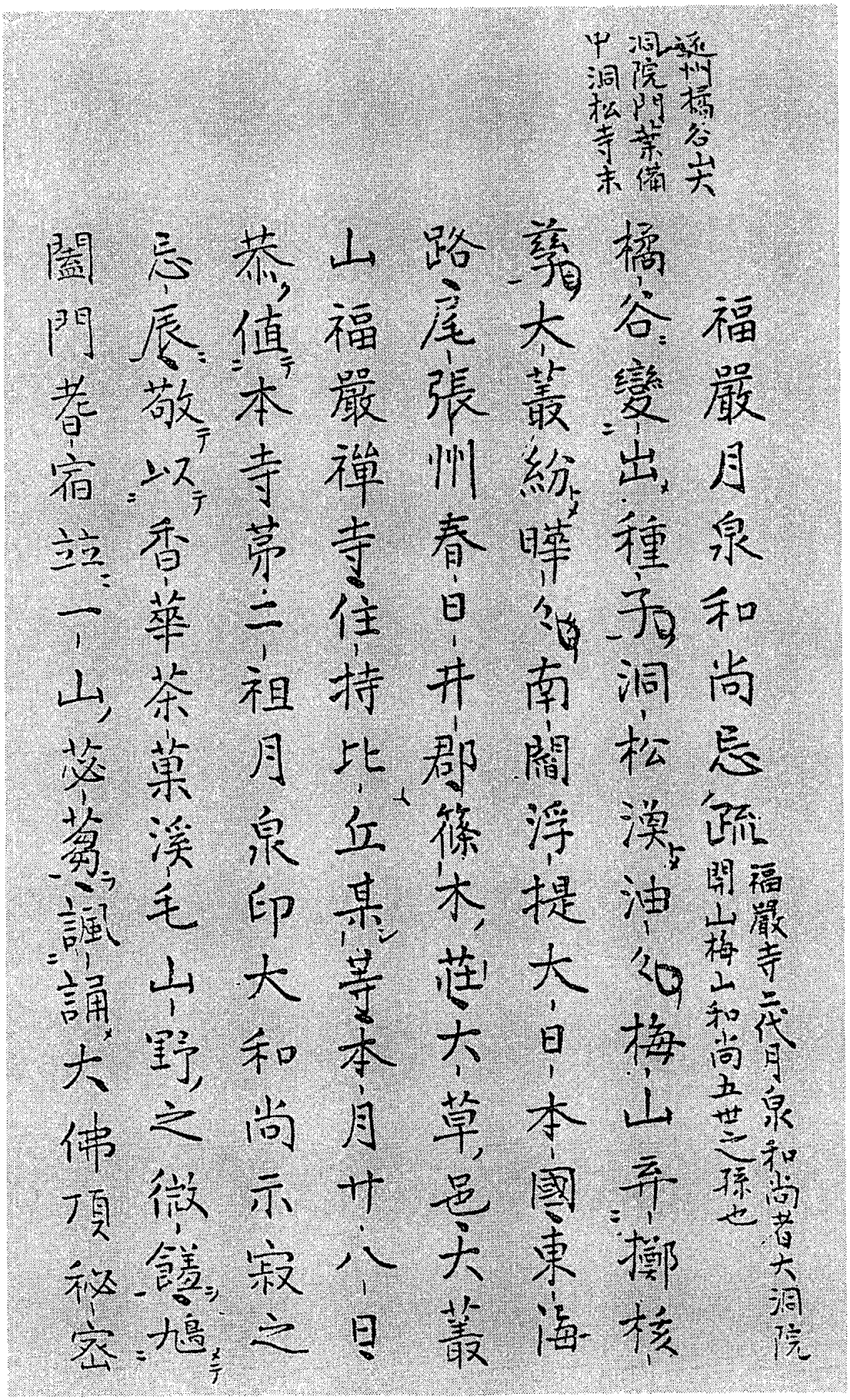
為鳳山覺瑞上座
鳳山壞瑞祥盡覺體圓明不立毫不滅
不生遲八刻寒潭月影止指撈實ムス新圓
寂鳳山覺瑞上座世壽不滿壯年行解未
窮三學間命謝時不容髮何説世壽行
解忽如山頽天棄瑞則廓落圓明空而不
空不空而空者覺體也故顕則草木叢林
隠則毛亦不立顕也無是無非隠也無得

無失正與麼時上座還卿路頭在何處柳
鍍子云大衆諷経
法弟石門縕聰長老訃至有遺偈一
取掲上作一聯伽陀為薦微勝
戴天立地紫盧都三十五年雖也無未後
一句何太速獨脚箭誰絃射空圖出松山不
覺似為蛇畫足錐然畢竟獨脚箭誰絃還知
落處也謾莫向虚空誹白春花秋月不同
途



予仲春予偶過常清禪寺見避間點偈
是本覺枝公禪師投宿通宵與山主所
茶話之餘韻也於是聽道話之来由不
恐默止塵高韻兼奉謝山主之道情
茶根同喫昔遊親道味不圖話闊貧偶有
瘦節和太室寒巖枯木又逢春

第二十二丁表

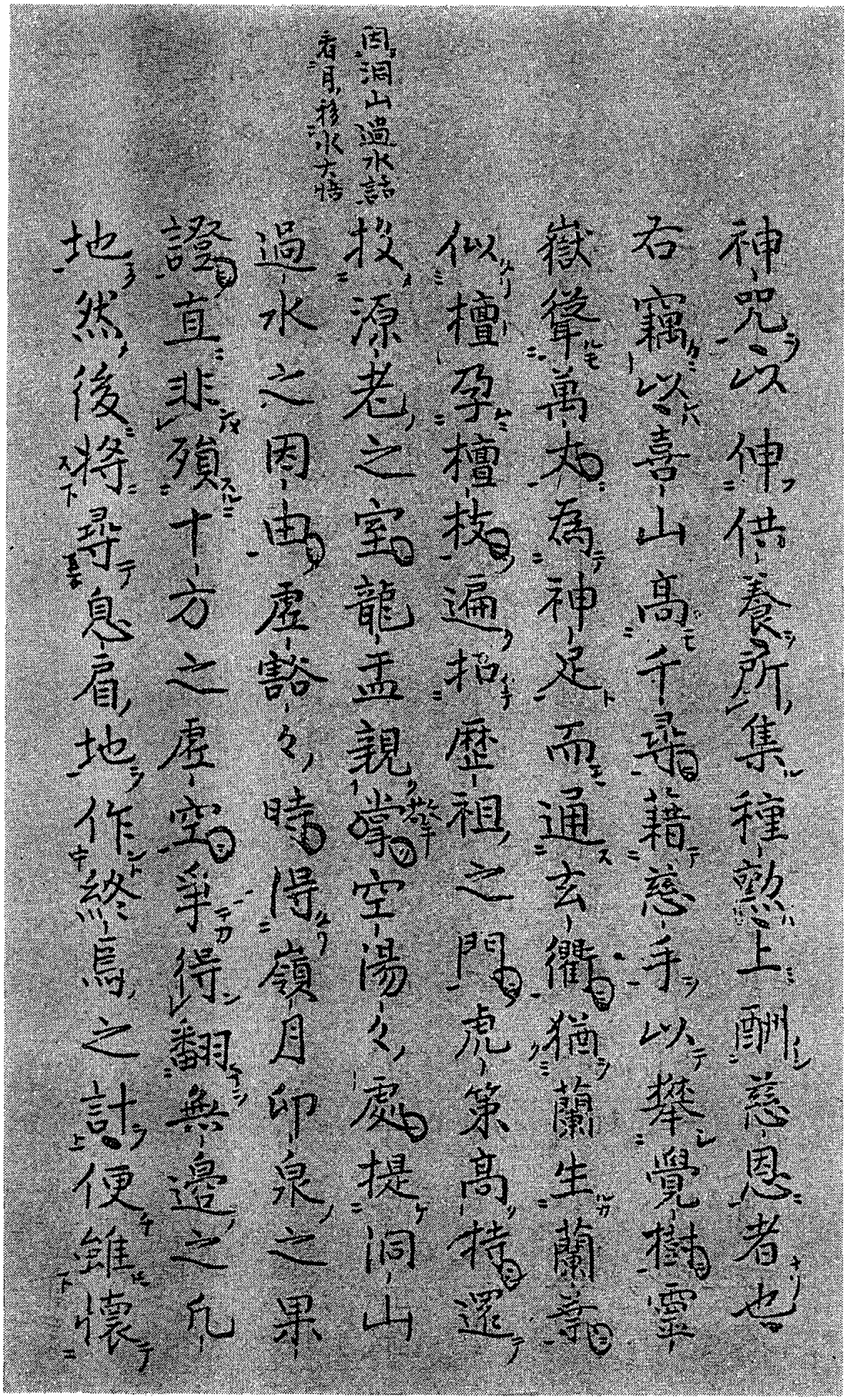


福嚴月泉和尚忌辰　福嚴寺二代月泉和尚者大洞院開山梅山和尚五世之孫也

越州橘谷宍洞院門葉儛中洞松寺未

橘谷變出種子洞松溪油如梅山弄椰核

掌大蓑紛曄如南閻浮提大日本國東海路尾張州春日井郡篠木莊大草邑大蓑山福嚴禪寺住持比丘某等本月廿八日恭値本寺第二祖月泉印大和尚示寂之忌辰敬以香華茶菓溪毛山野之儀饌九盌闔門耆宿竝山衲等諷誦大佛頂祕密

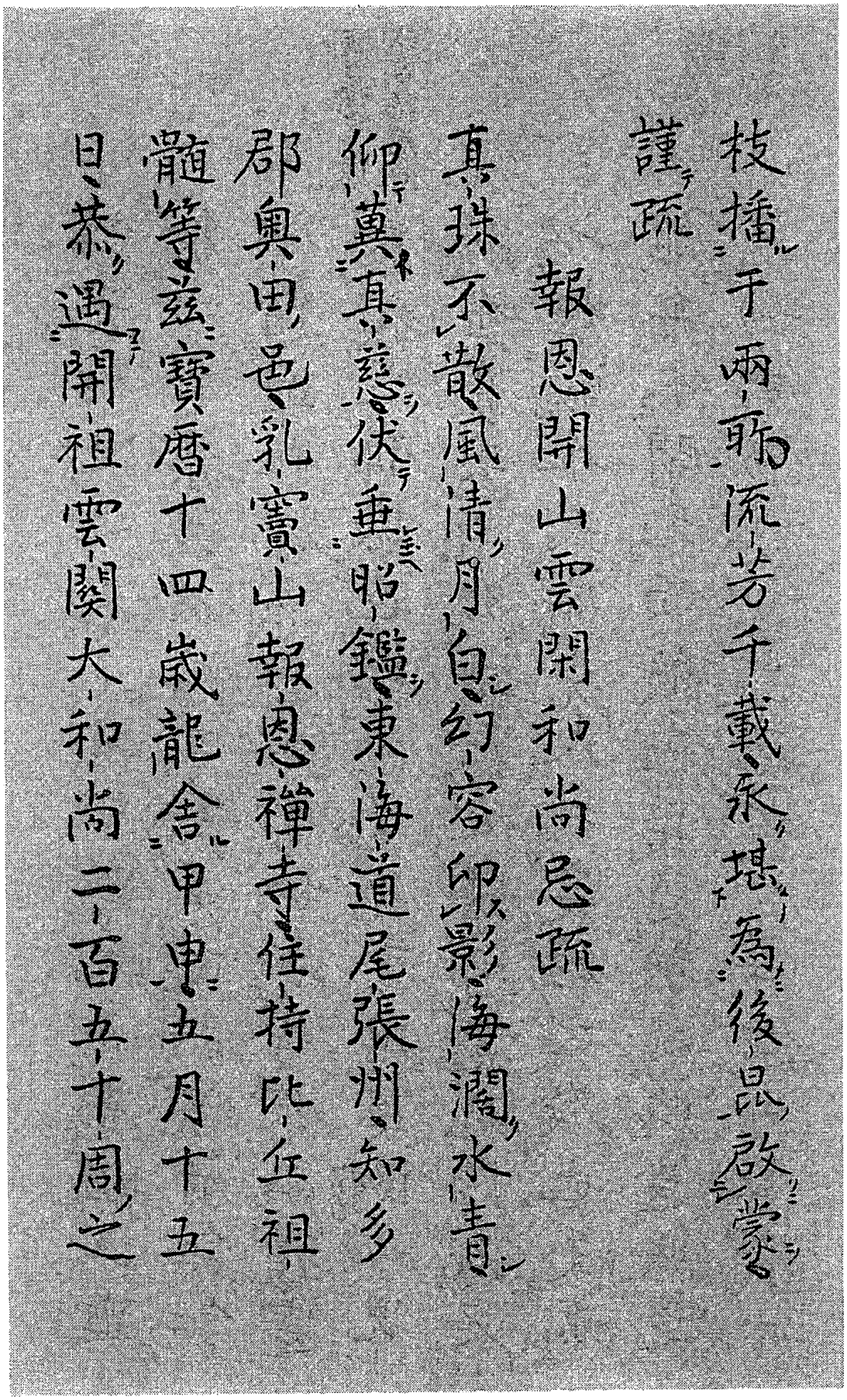


神咒以伸供養所集種熟上酬慈恩者也
右竊以喜山高千尋籍慈手以攀覺樹雲
嶽聳萬丈為神足而通玄徹猶蘭生芬
似檀孕檀枝遍招歷祖之門虎策高将遥
投源老之室龍盂親掌空湯々慶提洞山
過水話 洞山過水話有月移水方悟
過水之因由虚豁々時得嶺月印泉之果
證直非須十方之虚空手得翻無邊之凡
地然後将尋息肩地作終焉之計便錐懐

第二十三丁表

韜光晦迹之志ト居于野口ニ其ノ奈ヒ温文進
徳之資稟数於海宮ニ繇テ是ニ想ヒ綱宗青鉢ヲ
納僧道化尉然トシテ白雲ニ馳セ寶華山積寶ニ
寶積寺後改名福嚴寺
寶積之號徴ニ終ニ白毫光裏出ニ莫則之児
孫金寶蓋中現ス無数之檀資慧光渾然トシテ是レリ
以テ輝映人天而光大ニ我カ裏祖之教ヲ也夫ノ未
離レ舟木ヲ開元而般涅槃ヲ是レ故ニ是レ收ル昌レ照ス昌レ
用ヒ妙體恢廓靈玉蹬難レ菴ニ華生ヲ手五葉ノ一

第二十三丁裏



枝播ン于兩所ノ流ヲ若干載永堪ン為ニ後昆ノ啓ニ蒙ン
謹テ疏

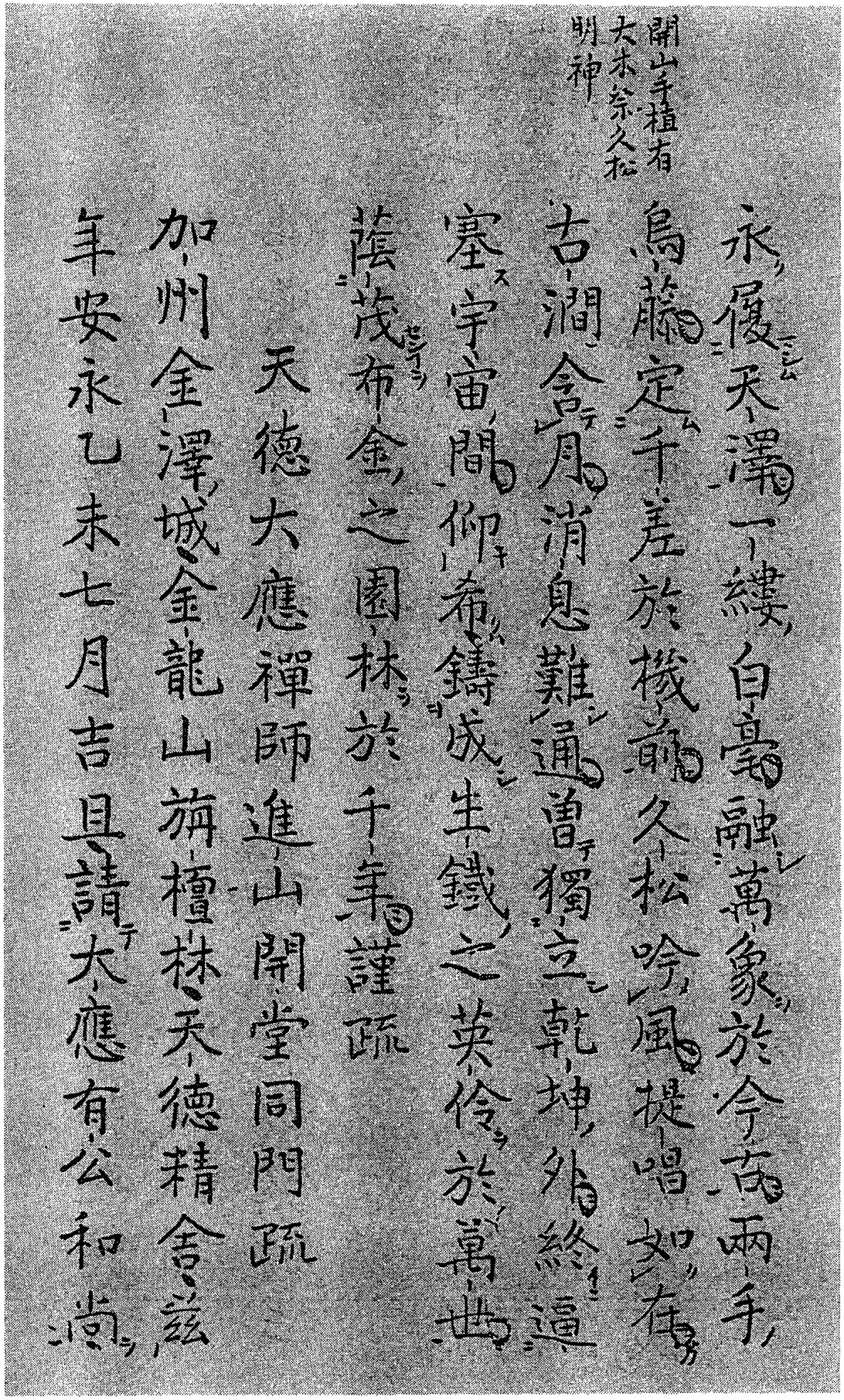
報恩開山雲開和尚忌疏

真珠不レ散風清ノ月白シ幻容即影海濶ノ水青シ
仰テ冀ハ真慈ノ伏テ垂ン照鑑ン東海道尾張州知多
郡奥田邑乳窩山報恩禅寺住持比丘祖
髄等茲ニ寶暦十四歳龍舎甲申五月十五
日恭ノ遇ニ開祖雲關大和尚二百五十周之

第二十四丁表

遠忌ニ虔營ニ薜メ香燭山茗園蔬菲薄之饋シムステ
伸ス供養ヲ集テ一ニ一汎同倫門葉之清衆ヲシ訓ニ誦スル大
佛頂萬行首楞嚴神呪ヲ斯ノ集ニ殊勲ヲムステ酬ン法
乳之深恩ニ者ヤリ也
右伏テ以ハ大洞為ニ徑截リ遠江七十灘之波瀾
楷川隔テ風興ス知多二十餘之門洲ヲ五轉至ニ
雲祖ニ若シ非ハ能リ揚ニ道化ヲ豈ニ可ンヤ啓メ凡流ヲ寿ガ感ル
慈師之徳教ヲ直ニ荷ヒ報恩ヲ親リ趣テ檀越之福場ニ

大洞院門葉
楷川色宇宙
山乾坤院末
與天澤院同
開山



永ク優ニ天澤一縷ノ白雲ヲ融レ萬象ヲ於今古ニ兩手ニ
烏藤ヲ定ム千差ヲ於機前ニ久松吟レ風ヲ提唱如ク在リ
開山手植有大木奈久松明神
右澗舍ニテ周消息難レ通ヒ曾テ獨立ス乾坤外ニ終ニ逼
塞ス宇宙間ニ仰キ希ハクハ鑄成シ生鐵ノ之英伶ヲ於萬世ニ
蔭茂ラシ布金之園林ヲ於千年ニ謹疏

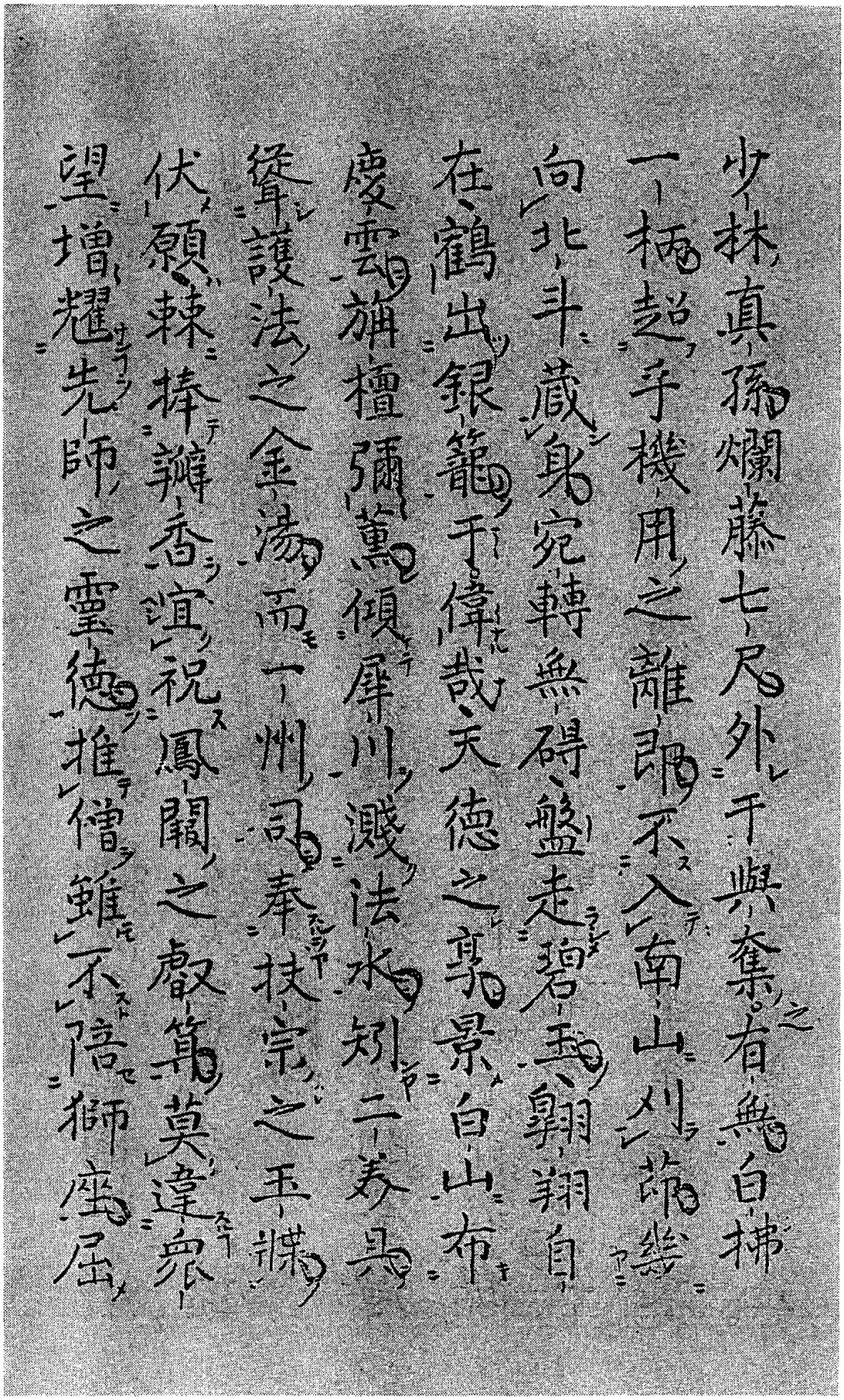
天德大應禪師進山開堂同門疏

加州金澤城金龍山薪檀林天德精舍茲
年安永乙未七月吉旦請テ大應有公和尚ヲ

第二十五丁表

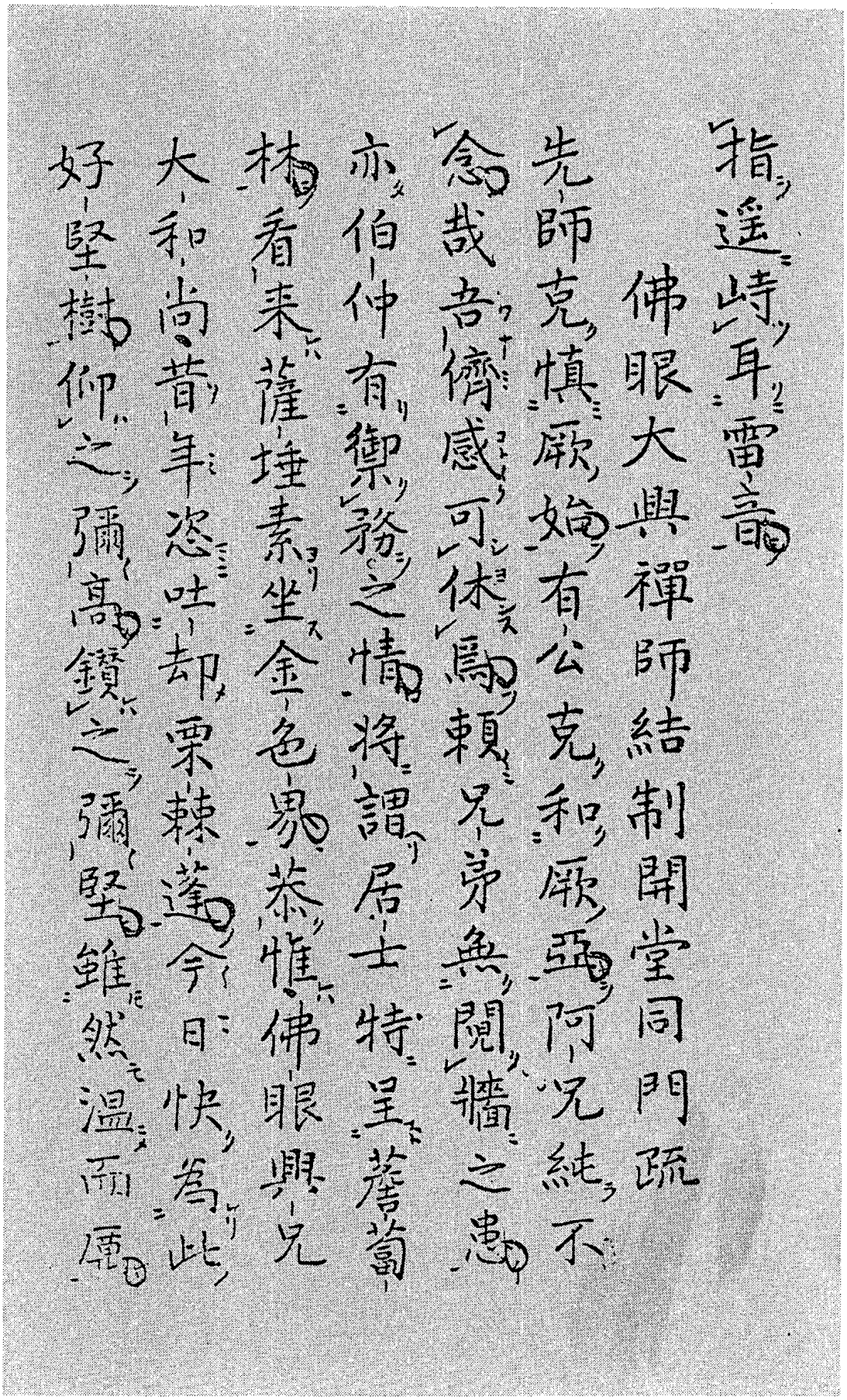
進院開堂演法實我門之光彩也同門小比丘某翁誓聞此盛擧不堪歡呼舞蹈遠贈賤疏伸慊懇之情者也其辭曰

難波江上無放鸝瀾口而納一字關金澤城邊足裹閃電機締三條簑自非我跼躋熊峯而伏猛獸安得彼龍山而擾真龍一向強不計揚家稱十日所視十手所指恭惟新命天德大應有公太和尚新豊嫡血登



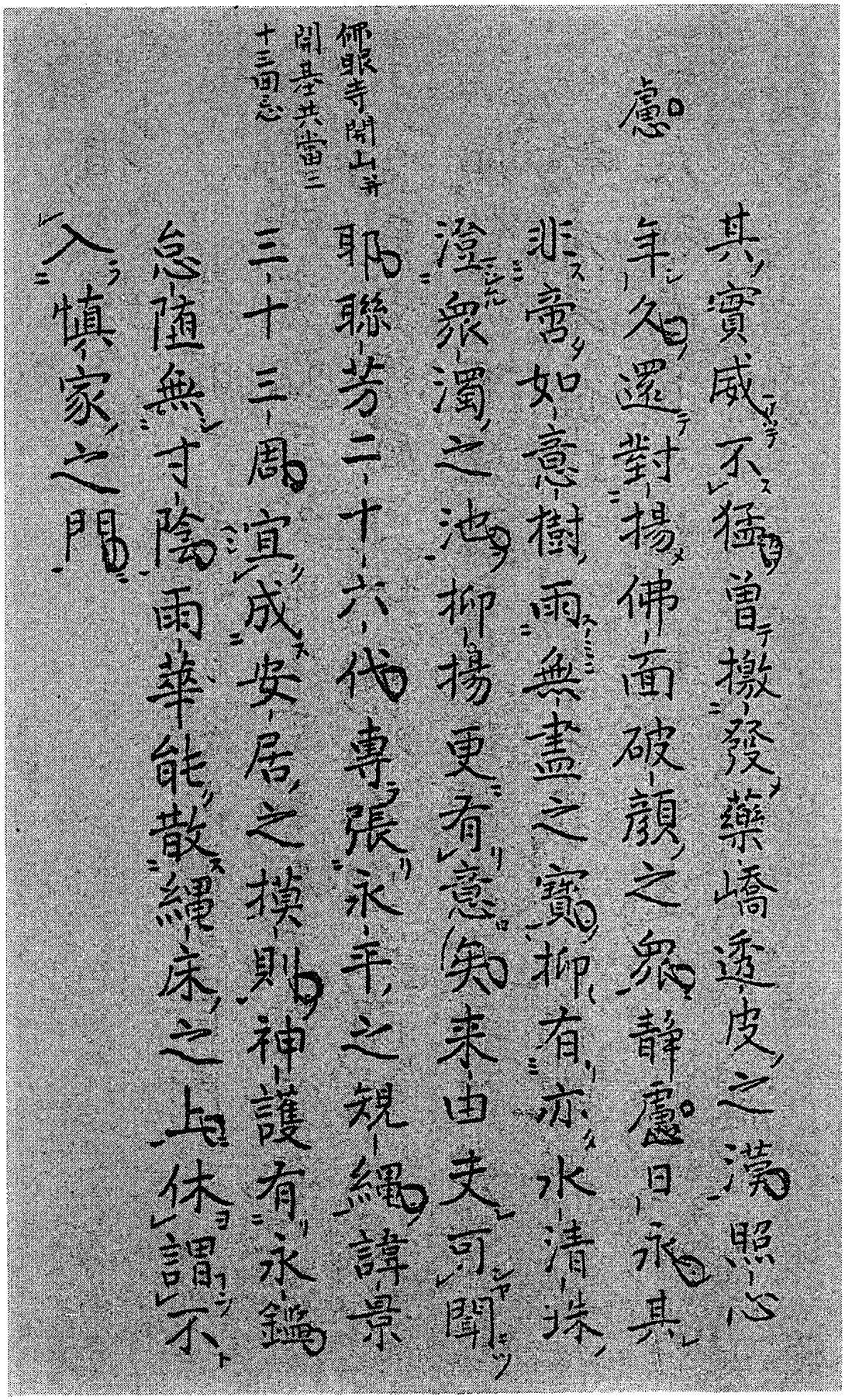
少林真孫爛藤七尺外干與奪之有無白拂一柄超乎機用之離即不入南山刈節絵向北斗蔵身宛轉無碍盤走碧玉翱翔自在鶴出銀籠千偉哉天徳之景白山布慶雲旃檀薫傾犀川濺法水刈一茅為葺護法之金湯而已州司奉扶宗門之玉牒伏願棘棒瓣香宜祝鳳闕之敭筭莫違衆望增懽先師之靈徳推倩鉢不陪獅座

第二十六丁表



指遥峙耳雷音
佛眼大興禪師結制開堂同門疏
先師克慎厥始有公克和厥亞阿兄純不
念哉吾儕感可休慰賴兄弟無閲牆之患
亦伯仲有御務之情將謂居士特呈蕘蔔
林看来旌埵素坐金色衆恭惟佛眼興兄
大和尚昔年恣吐却栗棘蓬今日快為此
好堅樹仰之彌高鑽之彌堅雖然温而厲

第二十六丁裏

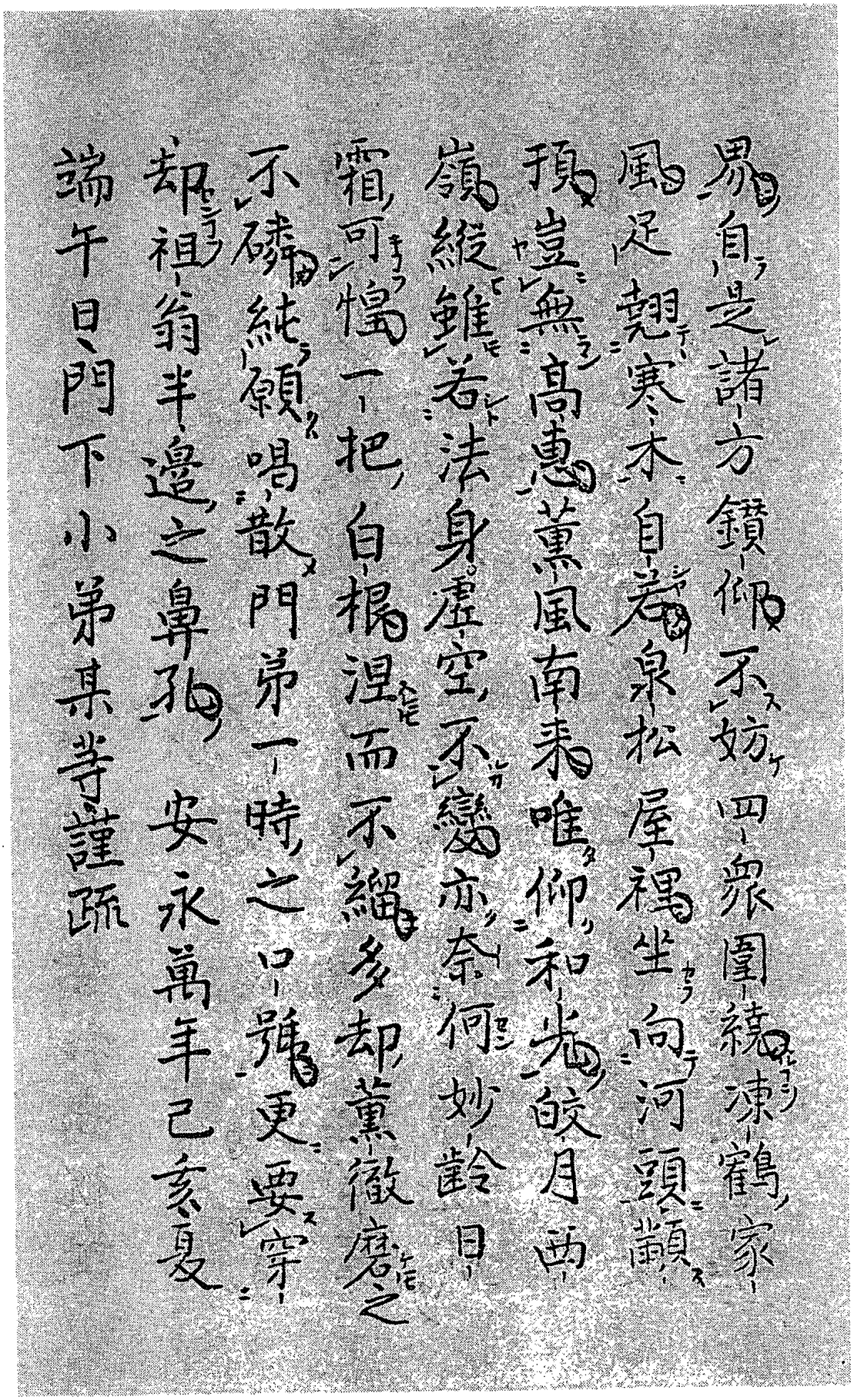


其實威不猛而撤發藥嶋透皮之滿照心慮
年久遥對揚佛面破顔之衆靜慮曰永其
非常如意樹雨無盡之寶柳有亦水清珠
澄衆濁之池柳揚更有意知来由吏可聞
耶縣芳二十六代專張永平之規繩諱景
三十三周宣成安居之模則神護有永鑑
急隨無陰雨華能散繩床之上休謂不
入慎家之門

佛眼寺開山寺開基共當三十三回忌

第二十七丁表

凍鶴山泉松寺開闢道樹和尚祝誕
開堂門弟疏代人
法届末運曲應人天箭機時値盛觀彌侈
佛祖模則況當梵刹新開之初故遇生涯
古稀之辰從教先聖過去之自得吾師現前
恭惟開闢當山上道下樹老和尚當世折
衝末法卓絶尚圓少林之方竹杖寔搏桑
六十州坐斷圓通之紫茸毬蓋須彌百億



男自ラ是レ諸方鎖ス仰ケ不レ妨ケ四衆圍繞シ凍鶴ノ家ニ
風足翅ヲ寒木ニ自ラ若シ泉松屋褐坐カラ向テ河頭ニ顧ス
預豈無ン高惠薰風南来唯タ仰ク和光皎月西ニ
嶺綬雖モ若シト法身虚空不レ變亦奈ン何セン妙齡日ノ
霜可キ慮一把ノ白榻涅而不レ縄多却薰徹磨之
不レ磷純願ク唱ヘ散ス門弟一時之口ノ雖モ更ニ要ス穿ニ
却テ祖翁半邊之鼻孔ヲ安永萬年己亥夏
端午日門下小弟某誌謹疏

第二十八丁表

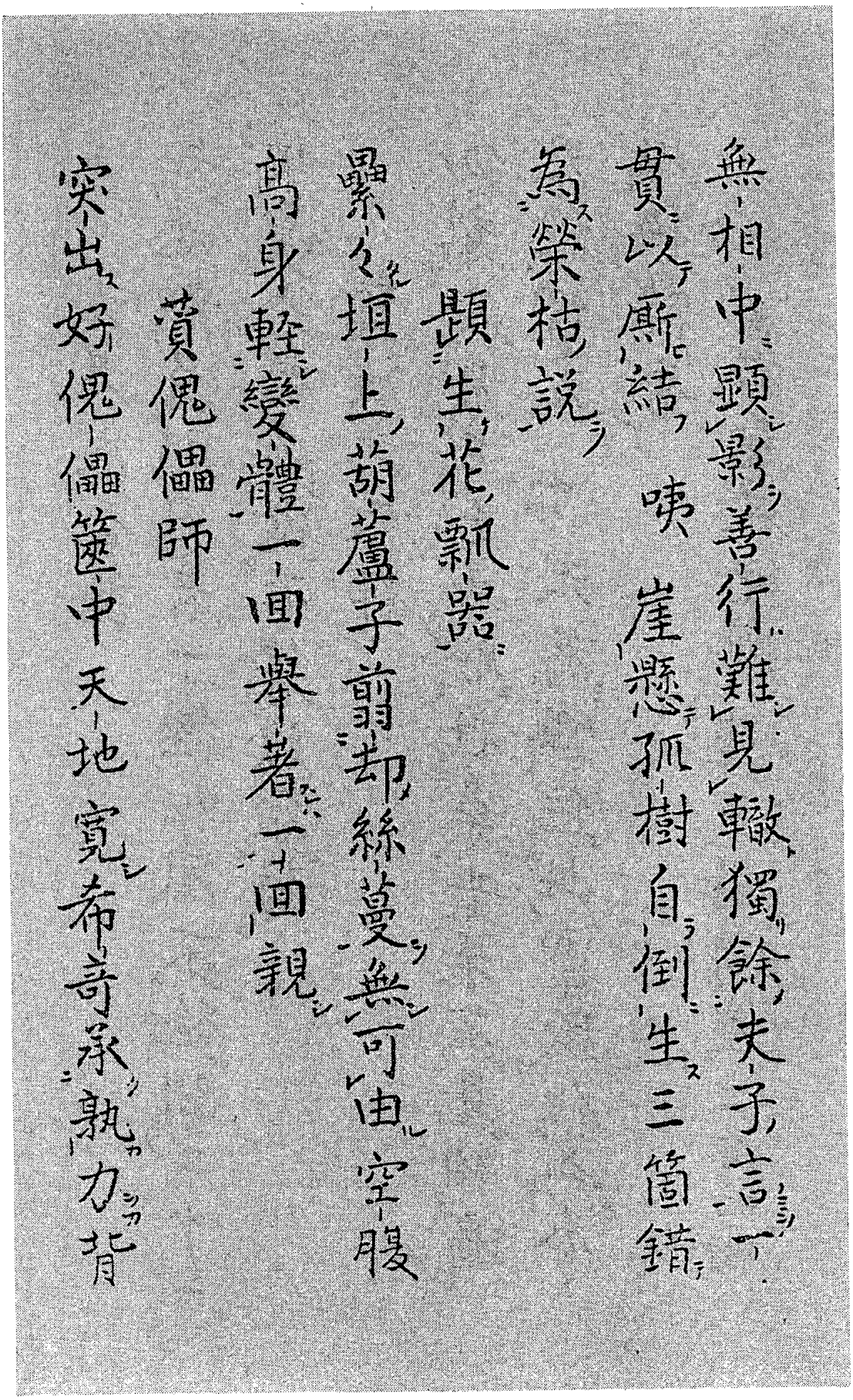
先考忌香語

知恩却報恩者一径松風不絶聞二十三
霜豈入髪毎逢存著涙難掩

賛渡宋天神

伽梨受震旦白衣脱扶桑去来不見相遍
界現神光咄天為恒住此霊威化入香
風梅蘭香

賞三聖人之圖 崖下遊行崖上有枯樹



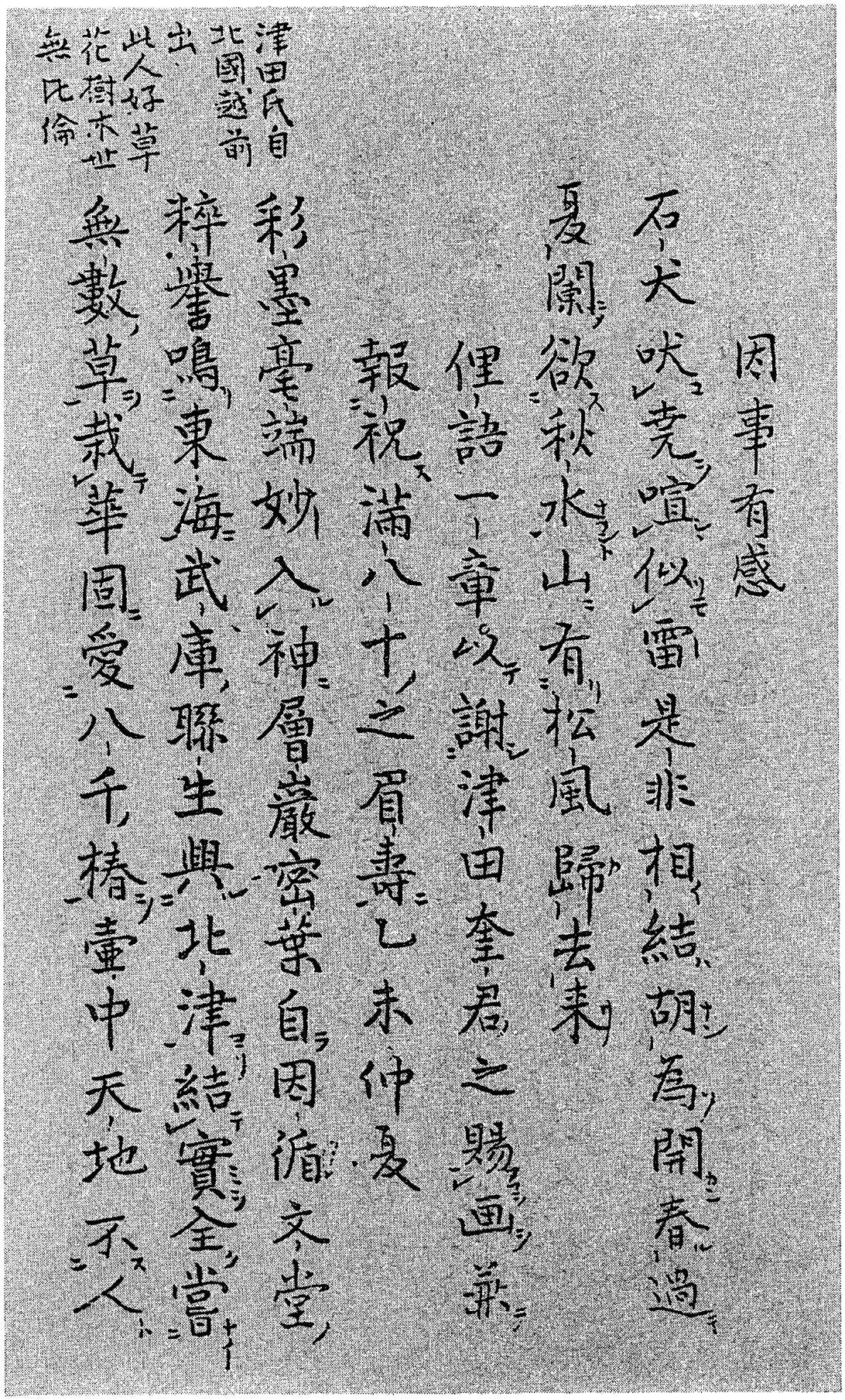
無相中顕影善行難見軟獨餘夫子言一
貫以斯結哄崖懸孤樹自倒生三箇錯
為榮枯説
顕生花飄器
纍々垣上葫蘆子翁却絲蔓無可由空腹
高身軽変體一囲擧著一囲親
漬偲偏師
突出好偲偏篋中天地寛布奇家孰力指

第二十九丁表

面甚顦頓　咄　偶人畫木休ヨ相問フ造次顛
沛君自ラ看

庫院落成示衆

諸方之叢林立テ方丈ヲ造リ齋堂ヲ或ハ法堂僧堂
ムステ容ル於十方之雲衲ヲ代テ佛揚ノ化ヲ吾個小院
轉ジ於一箇之破屋ヲ新ニ落成スト雖モ要スル諸人ノ眠
ル坐ル粥ル飯ル蓋寢行住坐臥ヲ皐主扶
一下ノ何ソ說ン晩參坐參ヲ又一下ノ三生六十劫



困事有感

石火吹レ竟ニ喧ヲ似レ雷ヲ　是非相結ンデ胡ニ為リ閙ヲ　看レ過ギ
夏閑ニ欲ス秋水山ニ　有リ松風歸ル去来
俚語一章以テ謝シ津田奎君之賜ヒ画ヲ兼ネテ
報ニ祝ス滿ハ十ノ之眉壽ヲ　乞フ未仲及

津田氏自北國越前出ヅ

彩墨毫端妙入レ神ニ　層巌窓葉自ラ因循文堂ノ
粹響鳴リ東海ニ武庫聯生興ヲ　北津結テ實金嘗ヲ
無數草栽ヘテ華圃ニ愛ハ千椿壷中天地不ス人ト

此人好草花樹木世無比倫

第三十丁表

老應是奎光日々新
宗圓一名麟大和尚忘香語
二十餘年一彈指麟德公明德不孤有好
個児孫濟々太家莫怪紫盧都
祖恭上座訃至其骨肉之兄弟以當
山有緣未設小齋弔實源
對面鉏無咫尺間因甚不見老僧顏實恭
未後窮源底爭似碎身来此山

第三十丁裏

先師先和尚小祥忌香語

爽氣軽雲繞嶺頭先師霊骨慢探捜山前
唯有丹楓在一度年過一度秋

季外了春信士父自幼出家十五歳帰俗廿四歳死
一有多種二無兩般来々去々玉走盤實
以新歸元季外了春信士初出家奉師長
後歸俗順父母至道至孝嗚呼有此人佛
言孝順至道之法名為成又名制止然

第三十一丁表

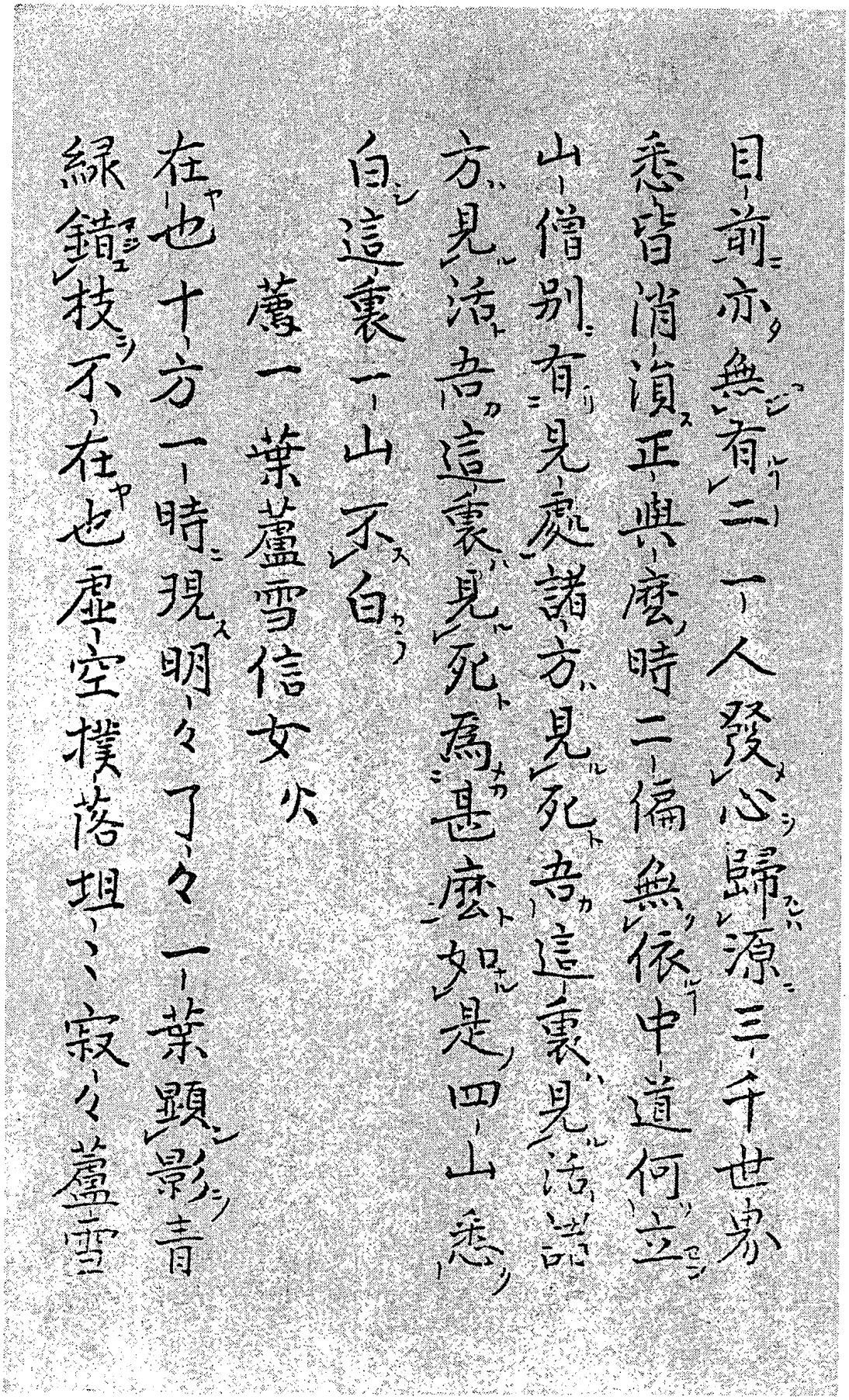
則、真俗不二、豈有二両般矣、一朝忽被吹持、
業風去、眼光落地、四大分離時、呼嗅不回、
籠罩不駐、畢竟落處作麼生、道、泣血杜鵑
何處在、雨過花謝、欲春闌、

享

利山享道信士火

有。

打圓相、這裡、吉無不有、利人以信實道有、
利世以山澤財有、利世與人無不二、人
碍念山河大地、利與不利、吉與不吉、競在



目前亦無有一人發心歸源三千世界悉皆消滅正與麼時一徧無依中道何立山僧別有見處諸方見死吾這裏見活若方見活吾這裏見死爲甚麼如是四山悉白這裏一山不白

蘆一葉蘆雪信女

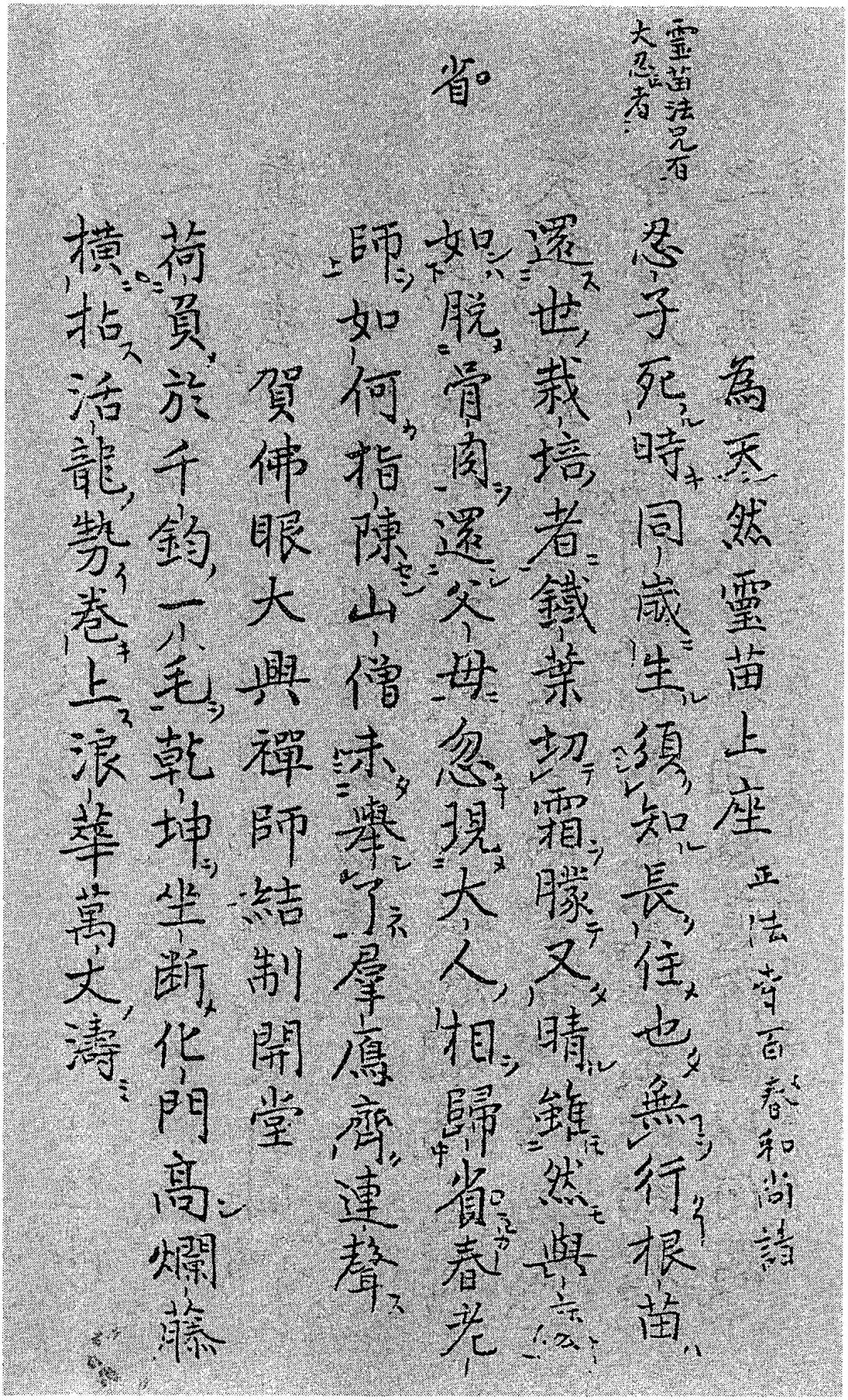
在也十方一時現明々了々一葉顯影青綠錯枝不在也虛空撲落坦々寂々蘆雪

第三十二丁表

失體色空俱泯所以謂無形體中有恒沙之用此是信文常用而不知底山僧為汝道破去以火把打圈相曰總有裏許圓圈喝

正眼寺二祖忌奠湯語

盧陵米與溫州橘和好箇無底爛鍋為自矢添斯妙味空華惹雪滿堂香時急雪洴茶煙今月今日住門葉仙不肯當任充此給贍之席即今二代老和尚感應降臨以何為驗忌景年々春二月梅花編好湯香風



為天然霊苗上座 正法首座 春和尚請
霊苗法兄有大忍者
忍子死ル時同歳ニ生ル須リ知ル長ク住メ也メ無レ行根苗ハ
還ス世ノ栽培者ニ鐵葉切テ霜ノ勝テ又ノ晴ル錐ニ然モ與ニ
如ク脱ル骨肉ノ還ス父ノ母ニ忽チ現ス大人ノ相ニ歸リ省ル春光ノ
師ノ如何ヲ指ス陳山ノ僧ニ示メタ擧レ拂ヲ擎ル鳥ノ齊ノ連ス脊ス
賀佛眼大興禪師結制開堂
荷負ス於千鈞ノ一ノ毛ノ乾坤ノ坐ノ斷ス化門高ク爛藤
横ニ拈ス活龍ノ勢ヲ卷キ上ス浪ノ華萬丈ノ濤ニ

賀　寺鑄大鐘

婆竭龍躍テ震フ大千ニ如来常住豈ニ聞然ヤニ論高シ
阿耶打心後ニ話ヲ古ルヘ下ア堂未聽先キニ不シテ招カ衆ヲ
尊者手近前メ止ヨ問コヒ幽師拳銀山鐵壁一鎚ニ
推リ月キ呼ヒ谷ニ酬ユ幾リ萬年

宗圓開山宣叟周太和尚遠忌

那伽城裏一彈聲二百餘年肉猶ヲ暖シ法界
周遍宣說ノ外カ涼風佳月可シ憐生

賀青山泉松寺道樹和尚誕日開堂
并引

吾師叔樹公大和尚道名洋溢緇白輻輳
故祖翁之道侶師尤大也茲羊己亥夏端
午日遇於古稀華誕之辰依是諸山之者
宿江湖之雲衲并門弟中懇請開堂演法
余幸結廬於傍卿而逢此盛事不堪歡喜
嗟歎謾綴俚語一律以奉賀介師之角壽

第三十四丁表

無轉法輪
青山之父白雲兒濟々鯀々無可以締構
梵室宜打令鞭笞衲子豈踰規矩寶座
圓千指不老彭眉結萬龜鄰辭孰言敢勞
鑒人天化育等懇々

賀活道首座

活路通霄到著底羅籠不住沒量機南溟
北陸信高歩象潟岸邊帶月歸

注：象潟（キサカタ）

賀不點首座

步々蹉々豈随功太虚不點跡難窮歸来

偶負泉松月和個杖頭擲海東

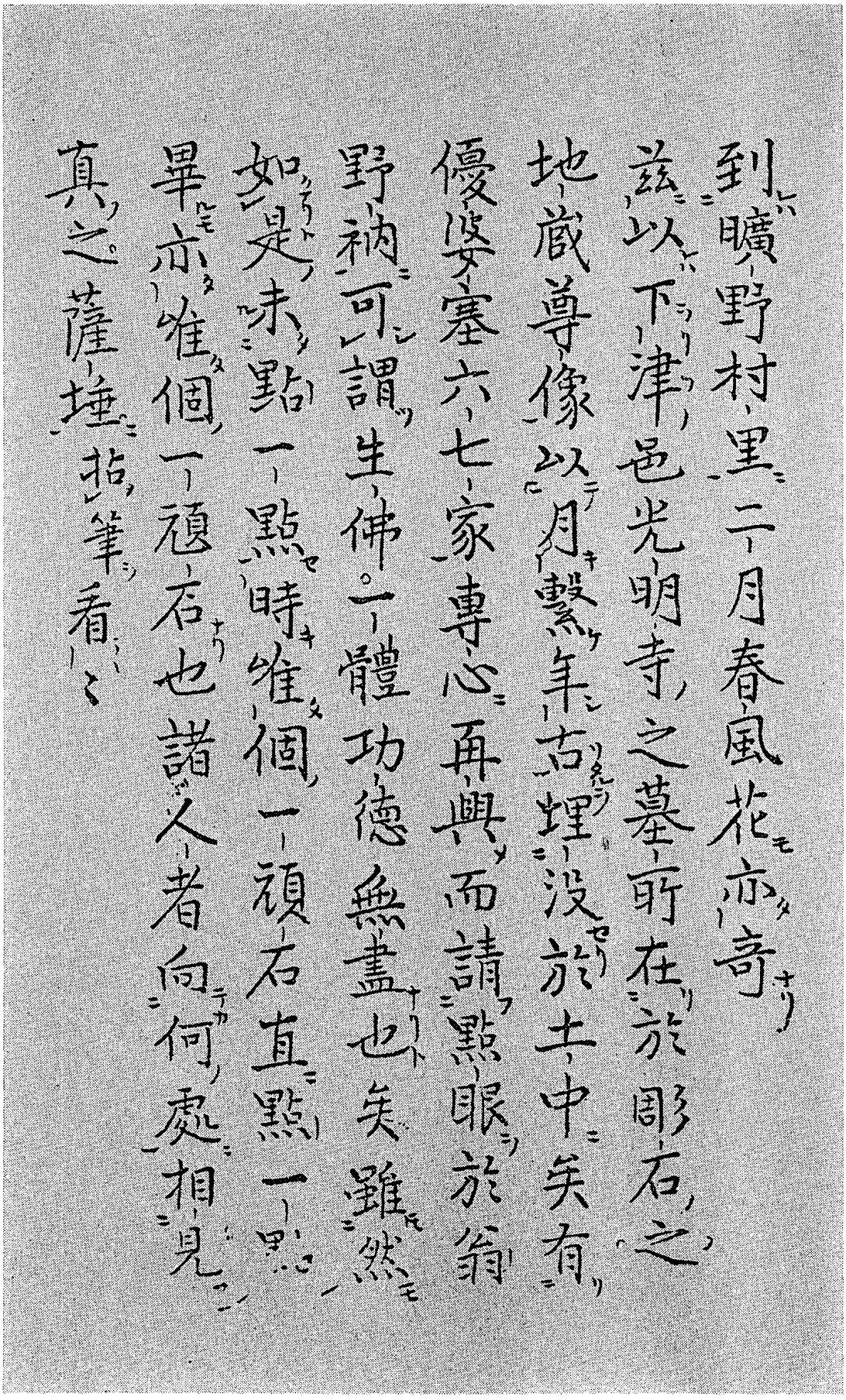
新豊開山忌丁酉九月香語

十一年前勤大千之手者也不虚傳因思

昔日紫胡狗砌牌漢猶檐一扇

石地蔵菩薩點眼香語

智錫持来丈夫兒天堂地獄是阿誰為



到、瞰、野村、里、二、月春風花、亦、奇、
茲、以、下、津、邑光明寺之墓所在、於、圀、石之、
地蔵尊像、以、月、繋、年、古、埋、没、於土中、矣有、
優婆塞六、七、家、専心、再興、而請、點眼、於翁、
野衲、可、謂、生佛、一體功徳無盡也、矣雖、然、
如、是、未、點、一、點、時、維、個、一、頑石直、點、一、點、
畢、亦、唯、個、一、頑石也、諸人者向、何、處、相、見、
真之。薩埵、拈、筆、看、ゝ

第三十五丁裏

報恩寺要山大和尚小祥忌
如訪在未遇小祥鳥飛免走豈其歟看虚
空克點頭去演若重聞哭一場

新豊寺大興和尚小祥忌語

篤一聲能令軌知信聞何有去来儀鳥啼帝
花笑春三月芳草緑楊歸興時

恭惟當山第二世大興禅大和尚今月今
日遇小祥忌辰継席燈公為其師設大齋

會教山僧焚香予如亦不能免伯仲之儀
新豊寺者遠州少林寺未以何奉獻倒把少林無孔笛逆風吹了
順風吹一曲

中秋示衆時無月

年々三五有今宵雲閉玉宮蔵妍妖若人
克圀嘶之力看寒山笑擲筇茗
奠湯長牧邑治助請

用秋菊與橘皮香和作家傳一椀湯妙手

豈隨緣可汲突然指出鷹長行
慚放閑橋畔不留跡只見長途牧野霜
黄西宮神
一葦為裾常游太虚竿頭在手不貪餌除
嘯不居深々海底難得慳心魚
禅堂聖僧彌陀如来安座
無碍妙行遍界寛西方古佛現蘇乾山僧
別指安眠地當所分明不相謾

第三十七丁表

先師十三回忌香語 新豊寺結制中

閔園猶ノ暖十一ノ霜須ク見ル某氏カ焼ルヲニ爛ノ香ノ重ヲ把テ
炎ノ雲ニ要ス打ノ着セント松ノ風六ノ月價ヒ難シ量リ

結冬入寺示衆

来鴈連ノ空數聲嘆ル明シ正ノ當此ノ時ヲ諸ノ禅徳相ノ
與ニ不レ違ニ道業ヲ這裏ニ来テ安單ス恁麼ノ飛鴈何ノ去ヘヲ
落ノ在ス挙拂疑ノ議飛ヒ過ギル去ル雖モ然モ如ナリト是ノ若シ與ニ諸
人ト全ス一ノ會百ノ二ノ十ノ日ノ奈ノ何ノ體ノ會ニ去ラン天水混ス

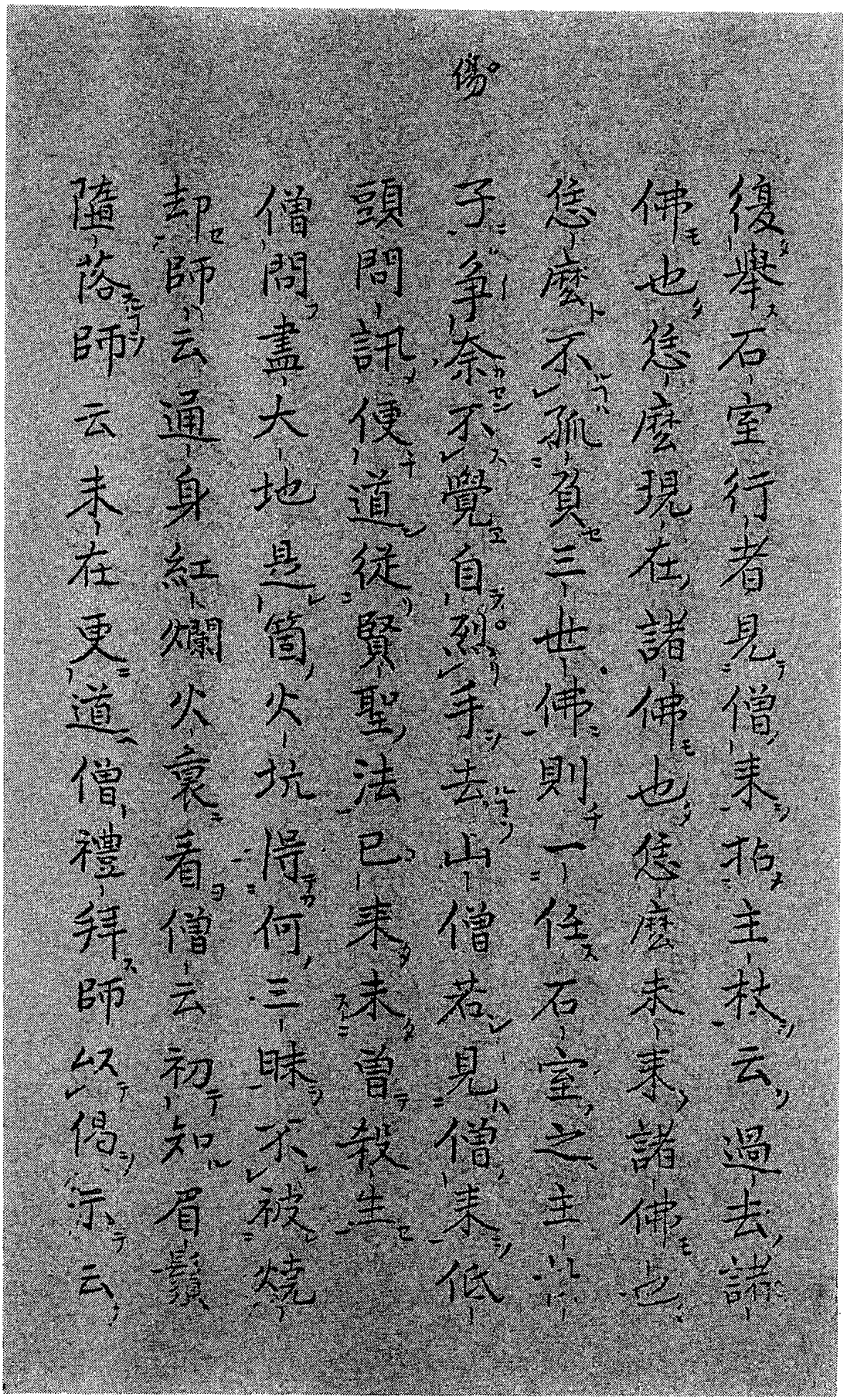
時秋一色衆皇攅處。崇微高。
今朝開爐上堂。十月初一諸方大開爐煅煉祖燒。
佛松雲門下柴炭又不當不妨諸仁。
向於冷灰裏各自撥將去甚麼故禮儀從。
貧處斷下座

達磨忌香語

漢土國中無慶。措少林影裏去躊躇別傳。
直指喧天下明眼衲僧謾掠虚
錐然噇

第三十八丁表

麼正當今日如為大師伸慶讃如何指陳
擧香云無人知斯意令我憶乃祖
結冬上堂以大圓覺為我伽藍寛廓非外
誰言長期百二十日心身安居平等證智
寂寥非内何用短期都九十日已是非内
外禁足修證錯下名言若能於此着得
隻眼朝露結為霜暮雲凝成雪不然則虚
空昨夜飛雹筋斗



復擧石室行者見僧來柏主杖云過去諸
佛也悠麼現在諸佛也悠麼未來諸佛也
悠麼不孤負三世佛則任石室之主
傷
子爭奈不覺自烈手去山僧若見僧來低
頭問訊便道從賢聖法已來未曾殺生
僧問盡大地是箇火坑得何三昧不被燒
却師云通身紅爛火衾看僧云初知眉鬚
墮落師云未在更道僧禮拜師以手作倒示云

第三十九丁表

山河大地一堆烟　通身紅爛火裏看　惟有眉毛落盡不知寒　霜雪逼人寒

賀瑞應首座

窮盡三洞千尺底　田瀾迸浪顕踪由　莫言被松雲活捉　元是禹門第一頭

滿戒上堂一切戒者　為體此心　且今無始無終　湛爾圓明　如是　我亦如是　受持不増　受與不減　本人高歌石女

起テ舞フ不レ干カラ能ノ所ニ減スル授ケ受ノ相ノ所ニ示ムス道ノ成ル性如レ
虚空ノ唯タ随テ氣ニ顕現ス若シ其ノ顕現スル則チ人々入ル者ノ
保ノ碧ニ来リテ現現ス何ノ成ル相カ看ヨ汝ノ等ラ當ニ時ニ發露シ一ト
僧立ノ地ニ證明ス山ノ僧三昧諸公不レ知ラ諸公ニ三
昧山ノ僧不レ知ラ徹底不レ知ラ噁闍羅王授ケ我カ名ヲ
阜主杖一下後ニ舉ス古徳云ク我ニ有リ一句子
師曰ク待テ虚空堕ル地時ノ便チ向テ你ニ道ヘ古徳知テ板歯生ル
毛ノ不レ知ラ舌頭不レ出ラ句上座即チ不然我ニ有リ

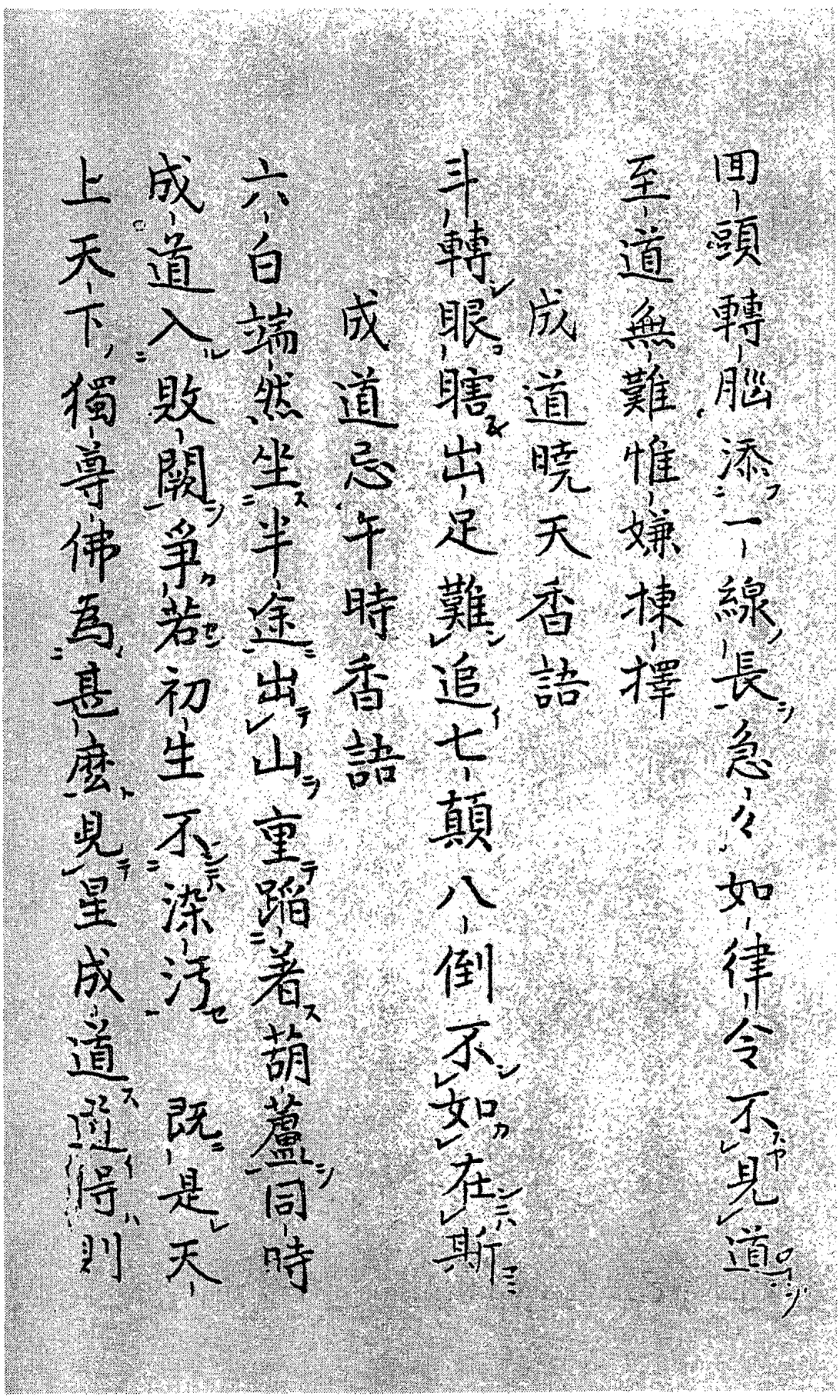
第四十丁表

一、句子ヲ柿撃ツテ香ヲ聞ク事

水陸舎香語

恒沙ノ会霊帰ス覚城ニ個ノ中ニ更ニ有ン何ノ遮障カ松山ノ幸在ニ一枝ノ好キ横ニ欖ケテ三汲ヲ徹底香レ三汲ハ地名俗言ニ三仗ニメト

冬至上堂極陰謂ノ之ヲ陽ト極陽謂ノ之ヲ陰ト両儀交泰雲行キ雨施レ品物流レキ形ヲ和寧レシ享ル載スル所ノハ道通ジ宗通ノ途ニ狭帯狭路錯然則チ吉不レ可ラ犯忤ス不レ悪ム麼ニカ去リ泰ヒ悪ム麼ヨウカ来ル看々東山水上行



田頭轉腦添一線長急々如律令不見道
至道無難惟嫌揀擇

成道暁天香語

斗轉眼瞎出足難追七顛八倒不如在斯

成道忌午時香語

六白端然坐半途出山堂蹈著葫蘆同時
成道入敗闕爭若初生不染汚既是天
上天下獨尊佛爲甚麼見星成道過得則

見ン如ク来ラ道ヲ不ン得則鐵ヲ辟ク
依テ齋ニ慶ヲ讀レ去レ可レ知ン紅ヲ燃ヘ有レ亂レ朱ヲ

斷辟

一顆ノ寶珠擲ツ雪中ニ由ヲ来個ノ玉ヲ元ト玲瓏雕レ文ヲ
可レ恨甚ダ喪レ徳舉テ世虛傳價轉豊ナリト

先師老和尚祥忌

蘆月籠レ霜十四回松雲影裏迎レ真ヲ来而今
憶ヒ著ス當リ時事寒入レ骨テ成ル七八枚ト雖然ト悠悠普年
今日山僧一句又無レ祇レ償ニ重ス先師ノ来後拠テ筆ヲ不ン盡ト言ヲ

巴陵有ニ轉語

第四十一丁裏

除夜小叅一年三百六十日祇有今宵唯有此夜已知二百五十九日之非故日々對衆謂莫光陰空渡自朝至暮上殿散堂坐臥経行喫粥喫飯折旋仰俯時々無廢閑閑玄關而不通宗趣一時知非則不三百六十日而已生涯不空渡倘又不知非則来年更有新條在脳亂春風卒未休祝聖三呼聲融入南山一年富國清夷已還

第四十二丁表

好是松雲一點瑞御爐臺下對龍顔
元旦示衆枚籌報刻天將白明眼衲僧也
太奇更問着新年佛法梅花吐蕊兩三枝

讀圓鏡授與第一座

鷲嶺風暖松雲月臨大圓鏡裏自古而今
咦 倘能掛在壁間去祖佛同床不失毫釐

爲要山和尚香語

山喚谷應五七時烏飛兎走却難追還來

猶恨違師命血淚滴爐柏一枝
應岩井白癡居士需并引
文明也者實名白龍蟠龍館別稱柳渓廠
父白癡居士悲其淵枯龍去附山僧需一下
語依之書偈追福渠儂於仲春上天之跡
也矣
極功窮變蟠龍館春勢衝天甚圍端文彩
分明何在處須知元被容籠瞞

第四十三丁表

為別傳曽宗上座
歸鄉得不歸何爭不涉二途第幾程誰識
別傳好消息嵓觸犯紅爛行步圀相逢
行吾無藏汝

悼曽宗侍者

春来侍我嘆能應雪柳未攀送夜燈何
蓮花橋上跡鷓鴣啼過幾重層
端午示衆。盡大地是藥那。箇是諸仁者本。

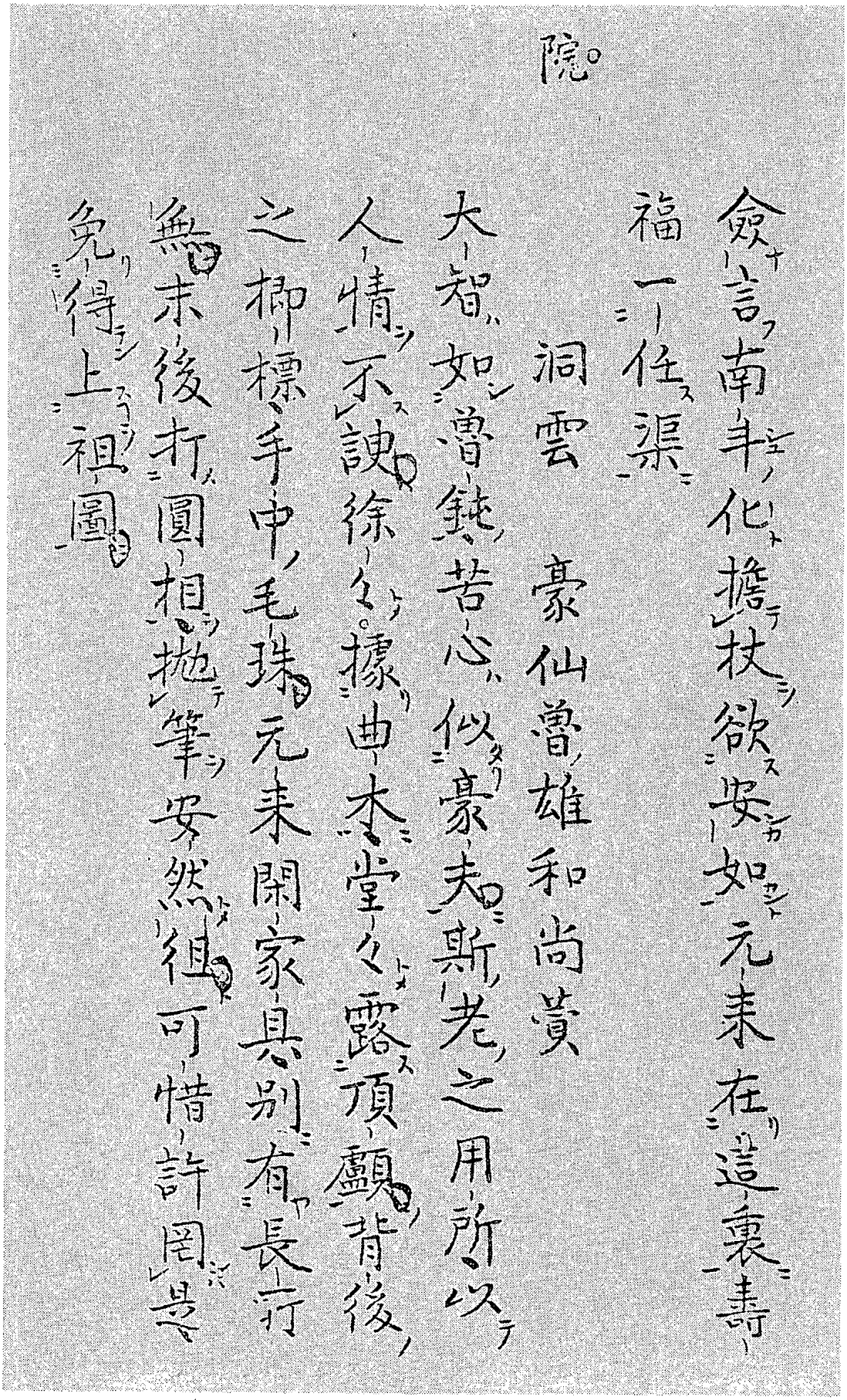
第四十三丁裏

未、面目挙拂云、金屑雖レ貴入レ眼成レ翳、任レ他
家々戸々擁レ門艾レ付レ護レ身、符レ袖僧問下不
要レ殺レ活別有レ通處、在不レ知則問レ取泗羅注、
上獨醒、之一人去。

鶴賛

清心雖レ望レ空噓レ叱、似レ求レ匹爾雌于雄手乞、
々々追不レ慄レ

壽老人賛



欵言南手化捨レ杖欲レ安レ如レ元未在レ這裏ニ壽福一任レ渠ニ

洞雲　豪仙曾雄和尚賞

大智如レ愚曾鈍若心似レ豪知レ斯光之用所レ以人情不レ詮徐々摸レ曲木堂々露レ頂顱背後之椰標手中之毛珠元来開家具別有レ長打無レ後打圓相抛レ筆安然但可レ惜許圀レ免得上祖圖

悼彌勒寺前巖老和尚順寂

前山長養鍾幽光撲玉自然聲法房久亭
海東安寶蓋忽驚天上還金床爭奈壯士哀
存亡術按劍徒迷進退坊二月霞融花泣露
雙林春痩鳥忘芳大慈掩草締三會雜記留書夢一場兜率宮中何在所人間豈
不憶津梁壬寅歳二月

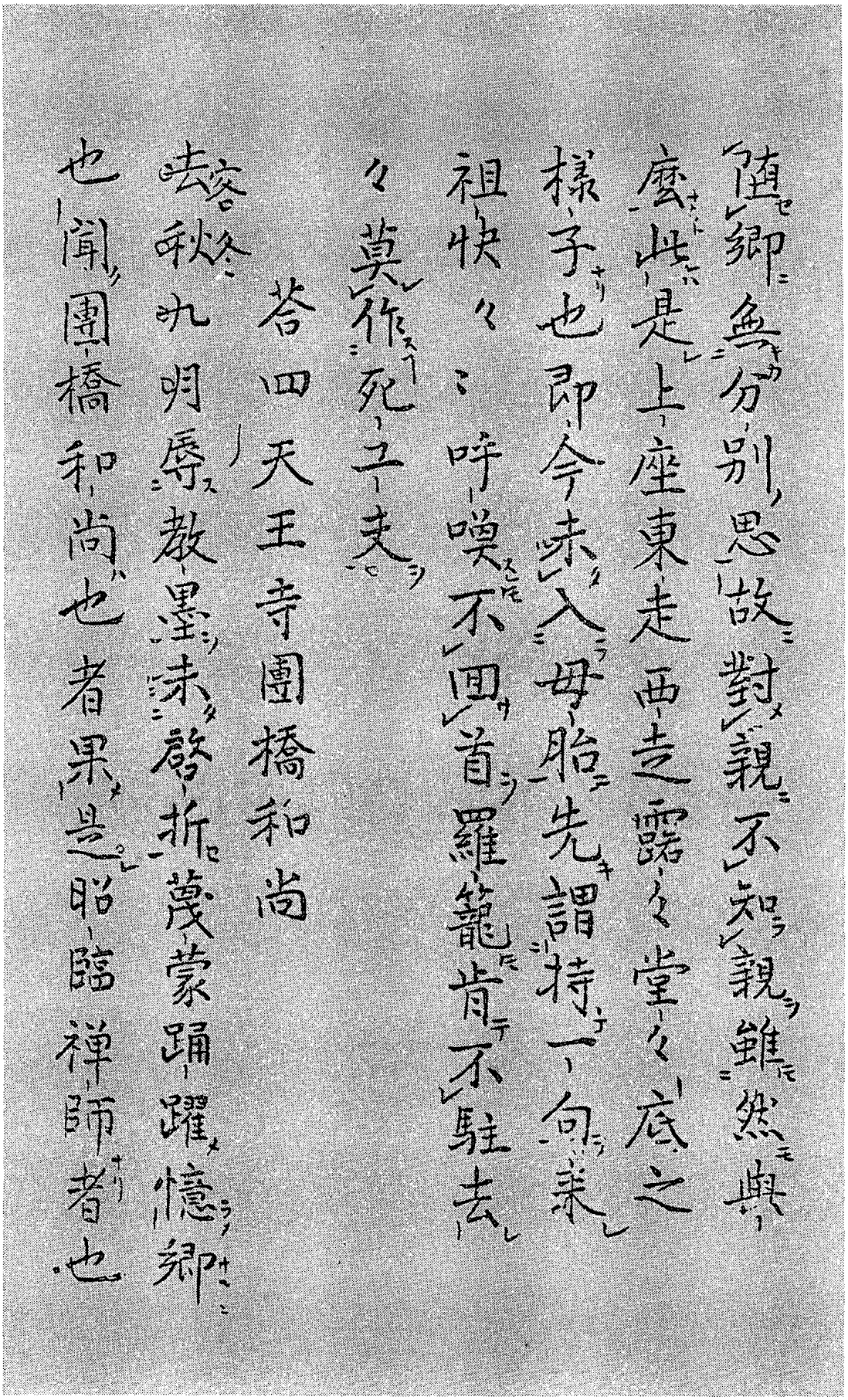
前巖惠撲大和尚三七日香語

紫金蚊纔真彌勒不出龍華度盡人八十
五年無數劫紅花啼鳥一般春一般春
何說多劫老漢倩抱濟物願垂化而應
来慢却隠于大慈院裏不覚顔也悔吾未
也遅矣先是三歳興師通宵道話而導
不見其疲色唉不圖今遇此齢遂實所
在世之時視我至醇愧無吾於雞足頭陀
之願雖然興慶到這裏唯貴瞻望反側而

第四十五丁裏

露下情也作麼〻〻　幸于林渓毛溫澡
却堪當一席炊巾
為祖快上座下火
在祖門下一快則休去看来猶是踈跟底
人汝尋常恭如来禅乎恭祖師禅乎若謂
不恭如来禅不恭祖師禅則弥天釋氏孤
謂祖快又謂恭如来禅恭祖師禅則佛無
去来相祖無分別思無去来相故在卿不

第四十六丁表



隨郷無分別、思故對親不知親雖然與
麼此是上座東走西走露々堂々底之
様子也即今来入母胎先謂持一句来
祖快々々呼嗅不回首羅籠肯不駐去
々莫作死工夫
答四天王寺園橋和尚
法容秋冷九明辱教墨未啓折蔵蒙踊躍憶郷
也聞園橋和尚也者果是胎臨禅師者也

第四十六丁裏

矣毎餉華緘於香奉讀獲揖清風素心乃慰久
違之思恭惟座下震艮多福特頃年匡勤
陽甲第之古名藍雲衲景附一國推重實
是法社田舂時載時載不任畏情忻慶激
切之至更示諭遙拆額望幣會同歓喜於
余可謂徳望光於枯朽質者也況賜以未
提一封之腆儀荷恩寵至厚茲宿久虧馳
隙而休憲遠之誠不忘舊好意愛之勤宣

第四十七丁表

到非深交至友何、皆如是哉余也久寓居
于陋巷之一小區徳薄才微不為時所信
月鬱々年積締窓乱紙衾瓦鉢之苦廬祖使云
袖之行李耳今限以冬制懲誨小衆故不
能敢頃歩而面申謝言徒増黙慚而已不
厚珠公和尚登于大利暗語雲月尋話及
余事依之閤家漬玉筆幸被露下懇並告
卒業莫謂天情良縁春寒尚在為人法千

第四十七丁裏

萬保重伏希垂鑑粛復

題墨鶴

水墨千年鶴止此忘九皐徒逢人舞翰恰
好畳霜毛

答仲井貞居士書

仲秋三日羽便一翰同月十八日領悉
春過于名府投貴宅後雖彼此不阻長塗
因循少便今辱恵書解絨讀之辞情懇々

慌如言面頗釋卑惊且去歳来于吾山詠於桂花一首尤有感情光陰早踰一歳今又有心訪山廬然恐亦看庭樹復奮懐賞人之情也雖然此是世間庸流之談道心之士何如是矣離却一切世間憎愛縁境豈有礙念耶故佛説破執遣疑識破執疑而普照塵穢無不清浄亦来書此為心如何山僧雖之文字此不筆其意又何忍

第四十八丁裏

耶夫心元無心苟存所智則不同爲無心
無心即是道先徳云道在平常中然則雖
謂無心非如草木瓦礫若春和花綻柳招
鳥語夏涼秋月冬雪如是對萬境此心數
起然泯智解則心境俱忘心境俱忘亦是
何物清風朗月咲花啼鳥映眼通耳閙然
送時是便快活自在也故古人云須求妙
悟語謂悟者何悟此心耳悟此心則徹底無

第四十九丁表

心大無心也乞居士須着精彩貴在信根猛利決定不退轉幸在指月之談示衆

凄首寄充間慮時秋色凄涼希保愛

中秋示衆

松雲吐月照海苔物々堂々現貨財好個時回顧脚下出門歩々塵埃一

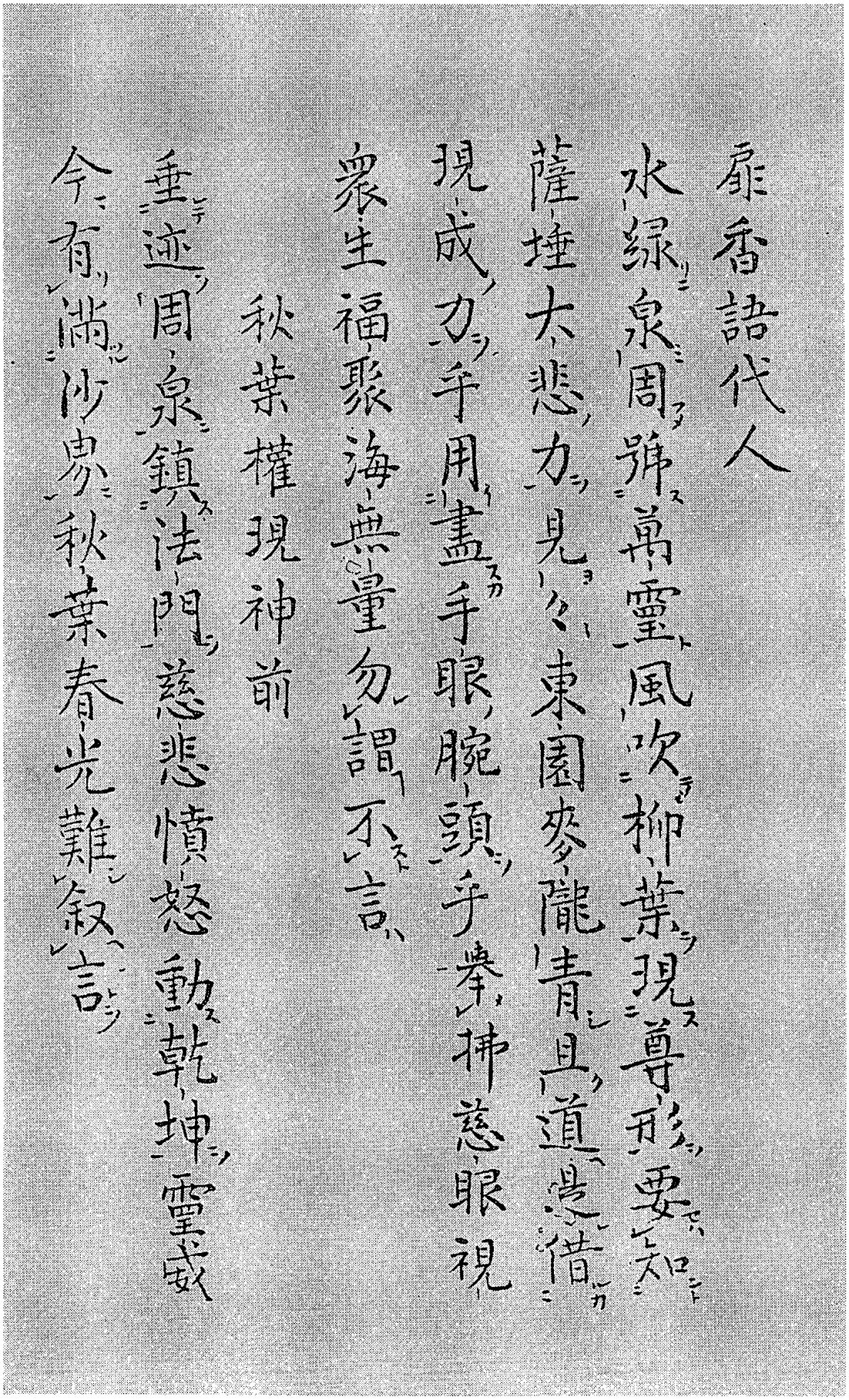
賀黄龍寺雄道和尚開堂演法

五十三程菩一峯不妨稱日國黄龍超師

第四十九丁裏

作麼非心句自是梅林興祖風ノ梅林山第、
賀大賢首座
二十年来也太奇梅林開落不知時ノ花一笑ス
雖當好節多ク清香當一枝
賀當清卿萬年山總心寺結制安衆ノ
我老久思師挙化一朝坐断萬年居来錐
識得路常清何敢容易與雨噓ノ
萬霊山周泉寺観音並秋葉權現開

第五十丁表



扉香語代人

水緑泉周徧萬霊風吹柳葉現尊形要大口

薩埵大悲力見々束園麥隴青且道恩借力

現成力千用盡手眼腕頭手擧神慈眼視

衆生福聚海無量勿謂不言

秋葉權現神前

垂迹周泉鎮法門慈悲憤怒動乾坤霊蚊

今有滿山秋葉春光難叙言

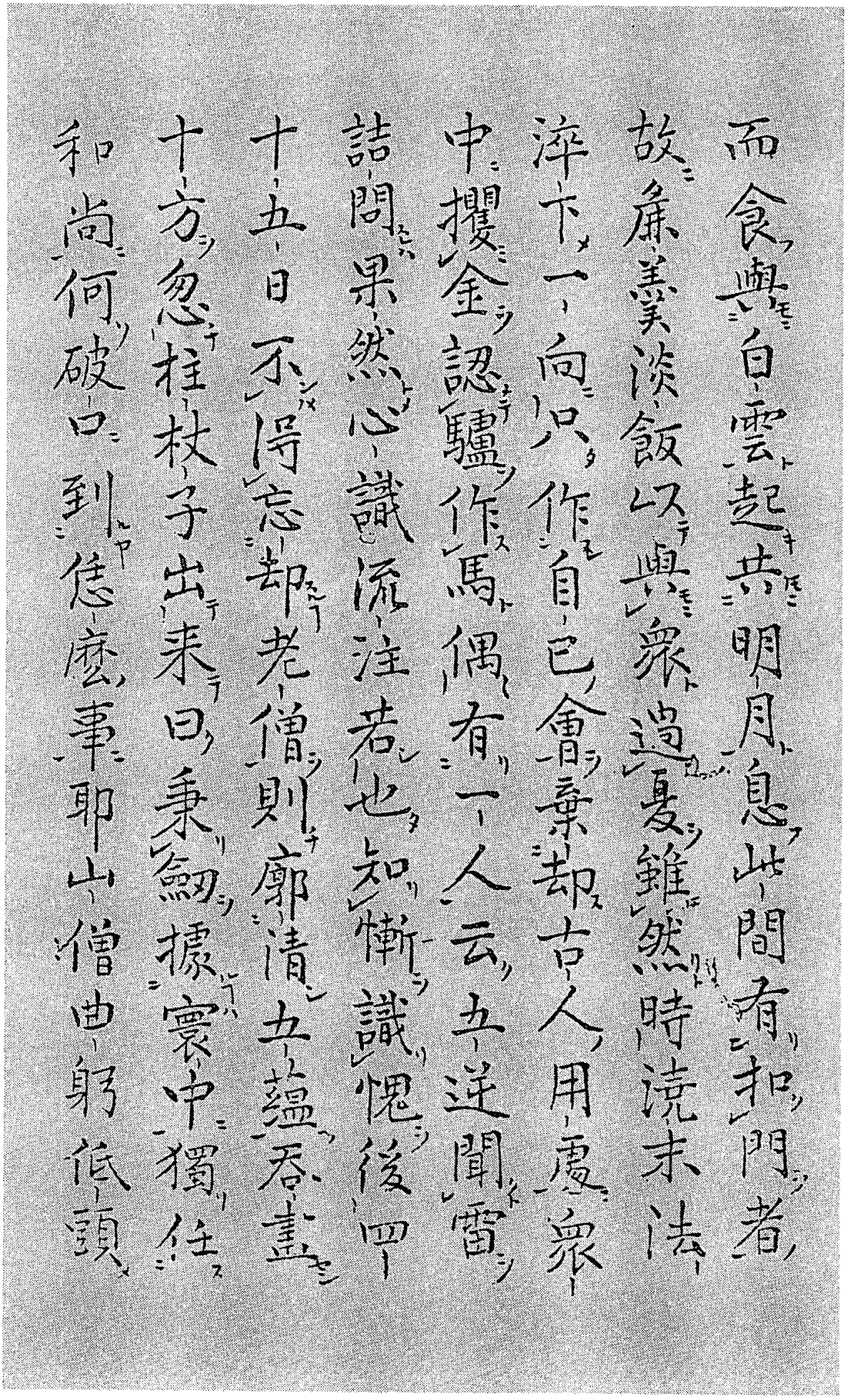
第五十丁裏

端午示衆

盡大地是藥那箇是諸仁者本來面目擧揮
金屑雖貴入眼成翳任他家家戸戸薬
艾符護身符袖僧門下不要殺活別有通
處在不知則問取汨羅江上獨醒人去

半夏小恙

前半夏已過後半夏未來中間底直須撑
鍬山僧住此山二十年來鑿井而飲耕田



而食與白雲起共起ニ明月息此間有和尚門者ノ故ニ屏美淡飯以テ與レ衆過夏雖然時流未法ノ淬下メ一ノ向ニ口ノ作ル自己ノ會ラ棄却古人ノ用處ニ衆中攫金ヲ認テ驢ノ作スレ馬ト偶有一人云ク五逆聞ト雷ヲ詰問果然心識流注若レ也タ知慚識愧後四十五日不レ得レ忘却テ老僧則廓清五蘊呑盡十方忽ナ柱杖子出テ来曰ク秉劒據ニ寰中獨住ス和尚何破口ニ到ラヤ恁麼事ニ耶山僧曲躬低頭ス

主杖子你智眼洞明我不如汝
泉松樹老和尚一周詩香語
天地庵中常在人誰言葉落知秋一
明月堂々著須辨即今無主貪雖收與
到者裏如為老和尚却攔柏根如何分貪
主去萬里無雲天有過碧潭似鏡月難
賀丹牛具壽高衆于濃陽之桃源山
生也牧牛有此人掌中推較解包辰莫

桃源遭牽去異苗繁草別逢春

嗣法師推擧狀

慎啟維時春和日暖花開柳綻此時運奉
叙起居拜謁之意專啓者不肖嗣法之孚
子某忝叨法臘備滿依之請攀承陽之積
翠補一朝之守塔當上奏鳳闕下賜墨詔伏希
大丈室爲法自宗爲祝頓首

永平高祖忌香語

徐々相載出扶桑太白峯頭脱布衾遊戯
神通無印子到今八月桂花香
推擧狀
欽上書維時金風蕩暑恭惟 寶座下法
體興居萬福錐未獲目撃彼此一氣千里
同風法愛茲祈今啓者嗣法劣徒某々
之法臘亢也仰望上奏 丹墀而紀綱勝
利發揮祖柄禪贊 皇猷併禱 大文室

第五十三丁表

萬安保重伏、詢、衣鉢下頓首、、

冬至示衆

羣陰剥盡、一陽来後諸念泯、時千聖出現

萬念一、念一、念萬念所々心所々心熟、時

徹底熱寒、時徹底寒何、説、陰盡陽来、雖然、

興廢如、日々添、一線長、聖體長養如何、変、

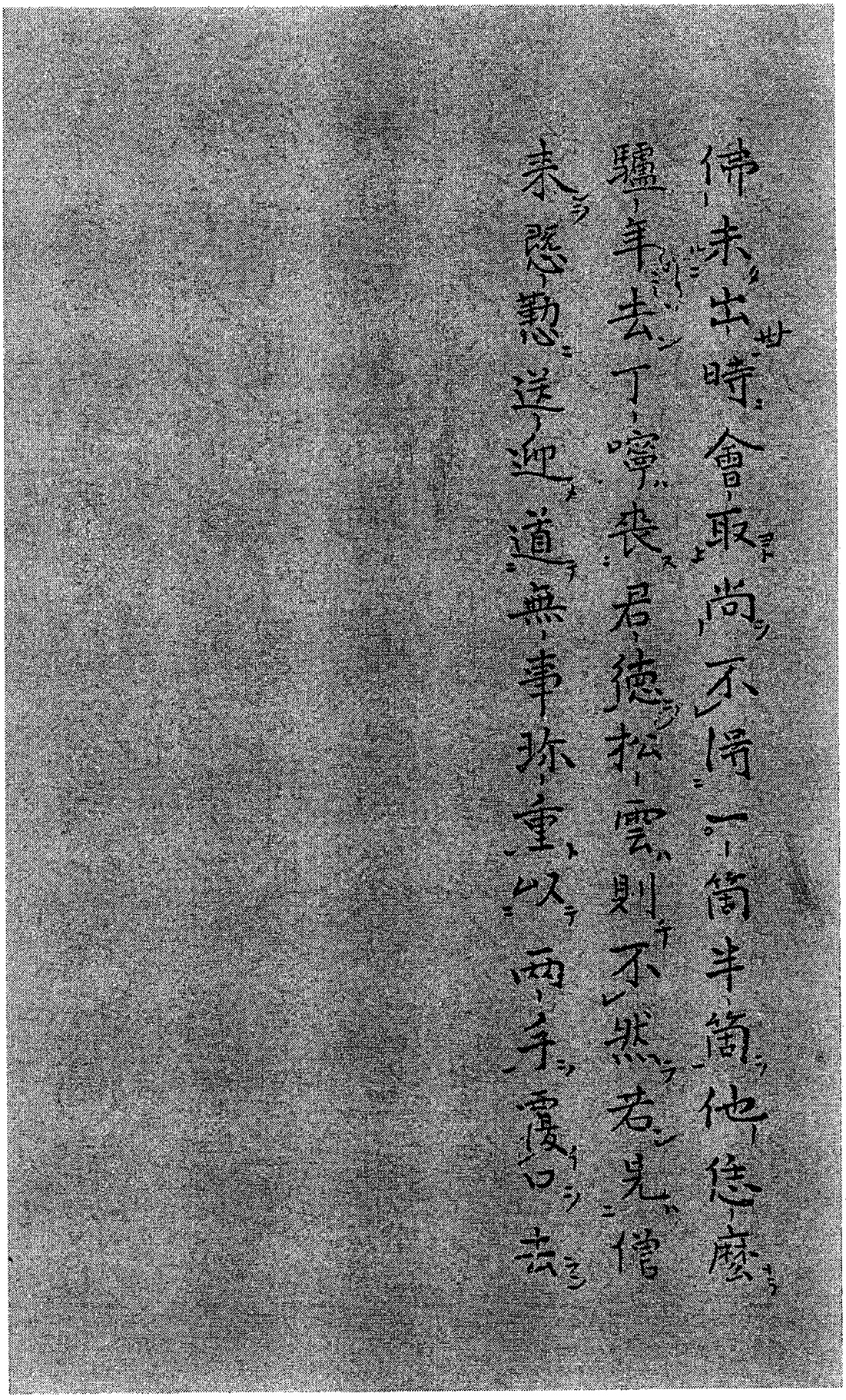
悉、

十五夜示衆

雨歇滿庭月色彰山河國土罔遮障南泉
拂袖在何處獨許桂枝擊鼻香
賀嘉山禪衲首衆於一色邑神藏寺
人天眼目得機先一色體中斷的的休調
西山亮隱子再来不較半文錢
除夜小恭

三百五十餘日更籌髣髴逼七十二數時候
主歲此終舊出頭天外看誰爲障孰爲碍

呼甚麼為舊年嘆甚麼為新歲好個時不
拘障碍不渡新舊能使得十二時一日不
管一日用但窮則變々則通故事理遷謝
暗往明来何用刻舟尋劒緣木求魚雖然
如是不心死一番盡是學語人山僧恁麼
告報又是不免學語早主杖一下
又擧潙祖雲禅師尋常見僧来便面壁心
不負人面無慚色南泉云我常向師僧道



佛未生時會取尚不得一箇半箇他底麼
驢事去了寧丧君徳松雲則不然者見僧
未隆勲迎道無事珍重以手漫口云

第五十五丁表

長栄静高開堂録

（島根県　松源寺蔵）

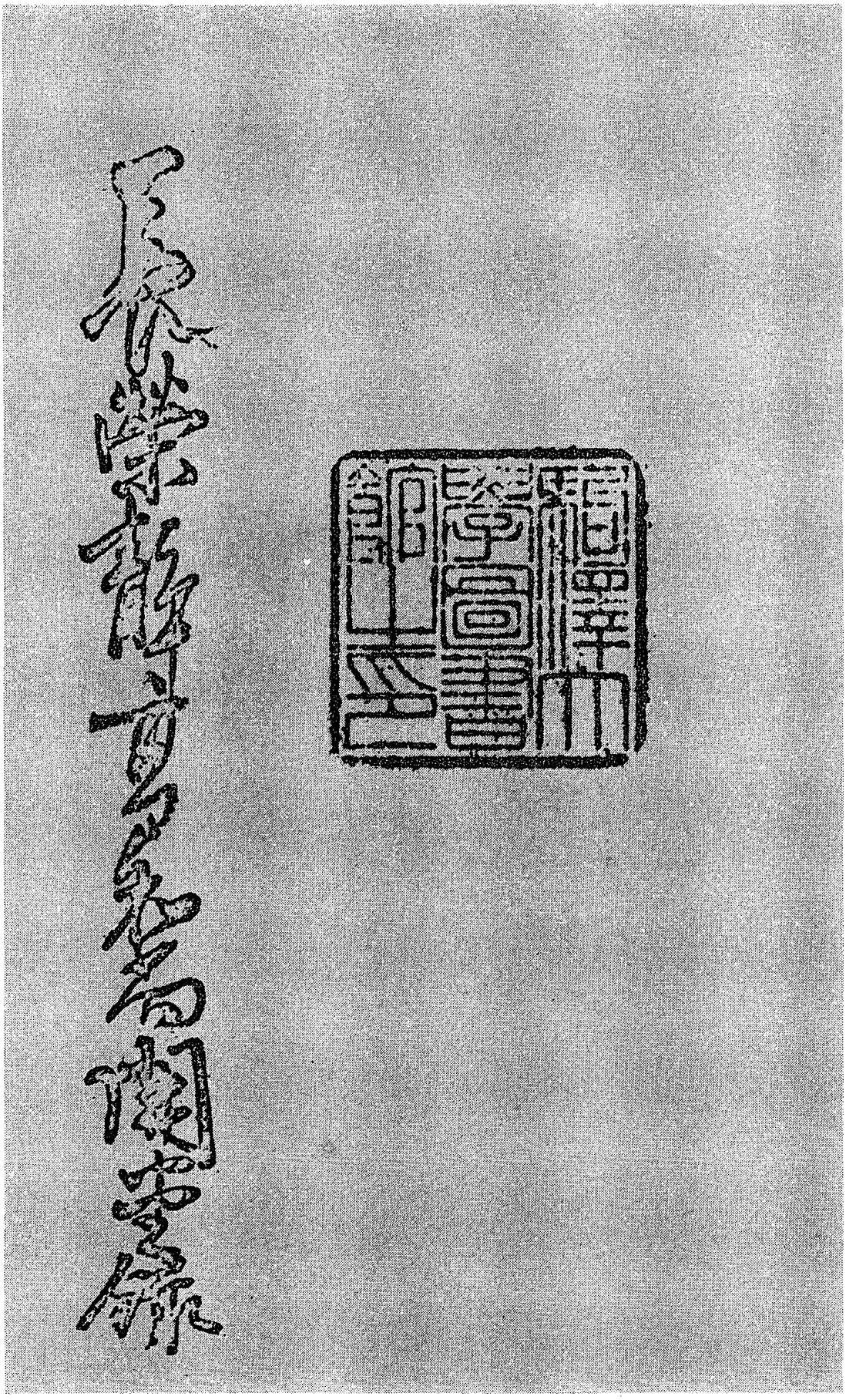
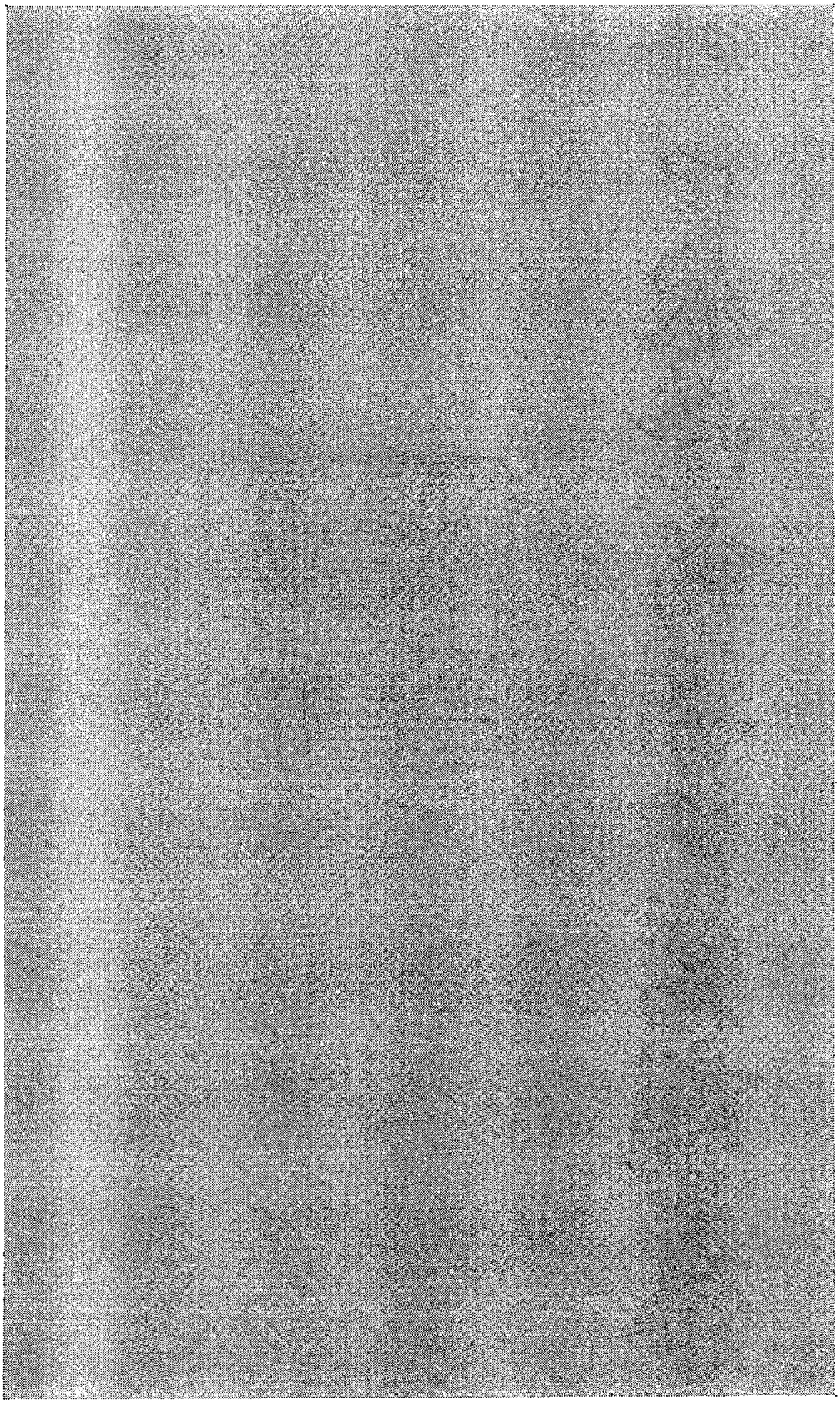
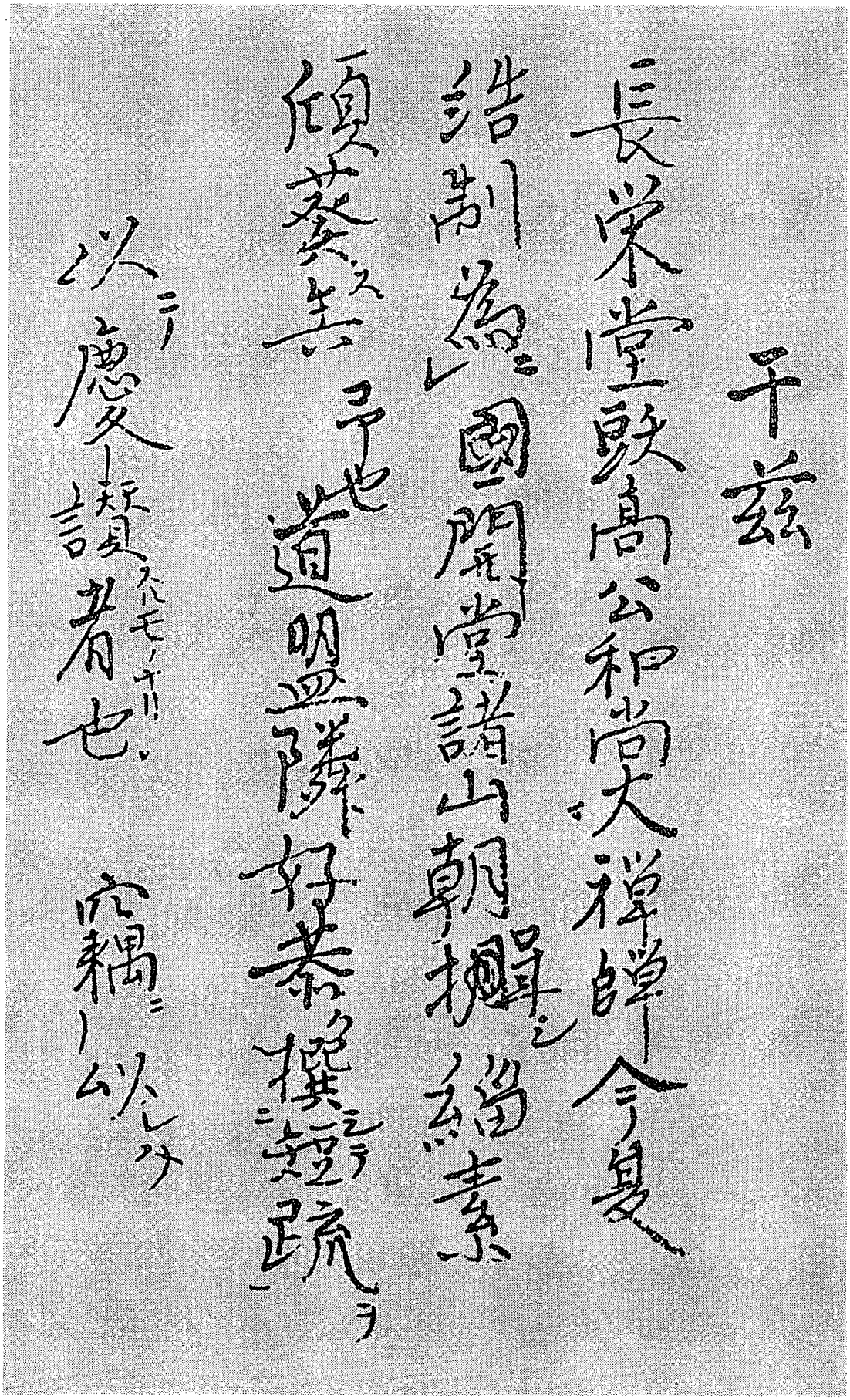


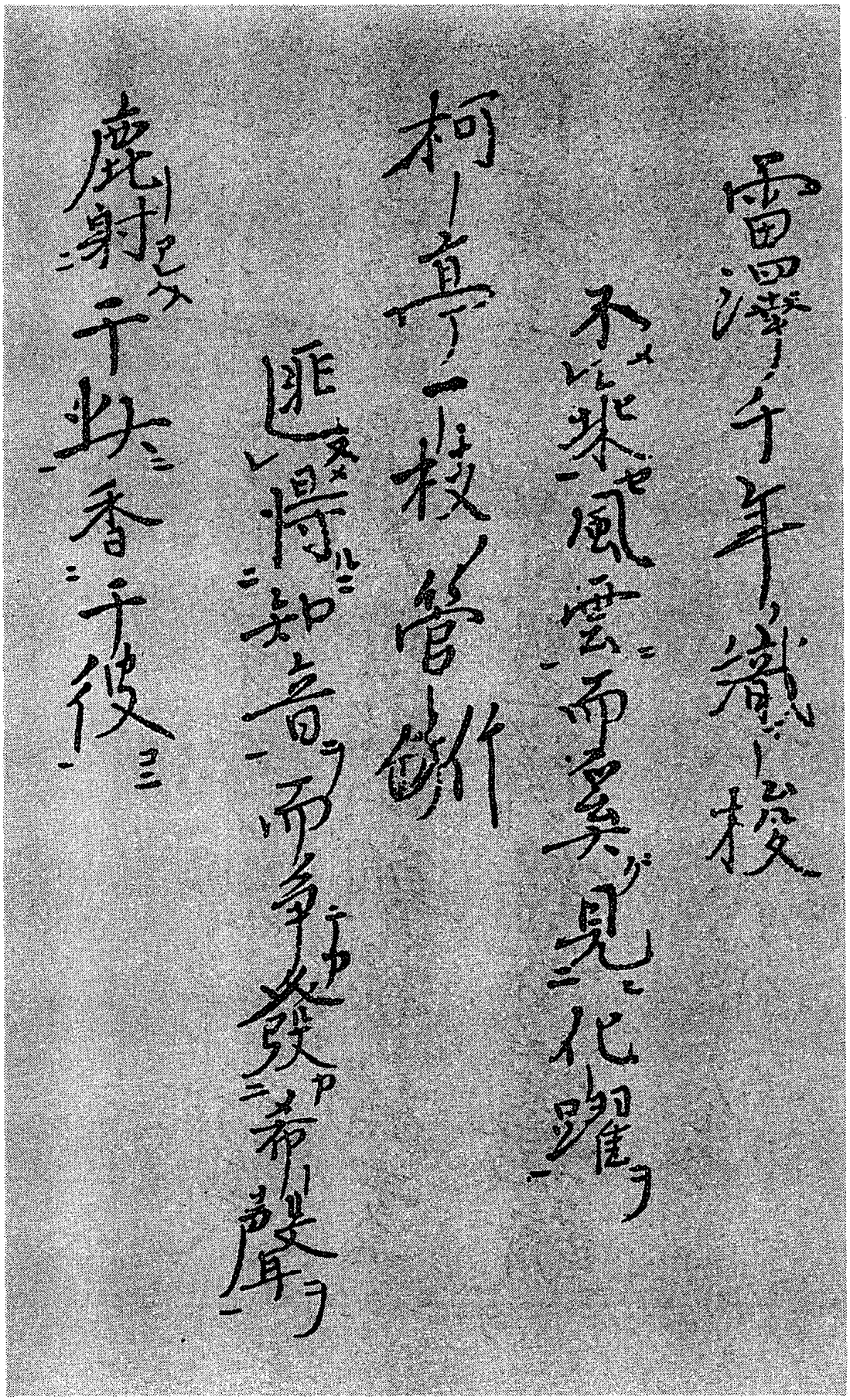
表　紙



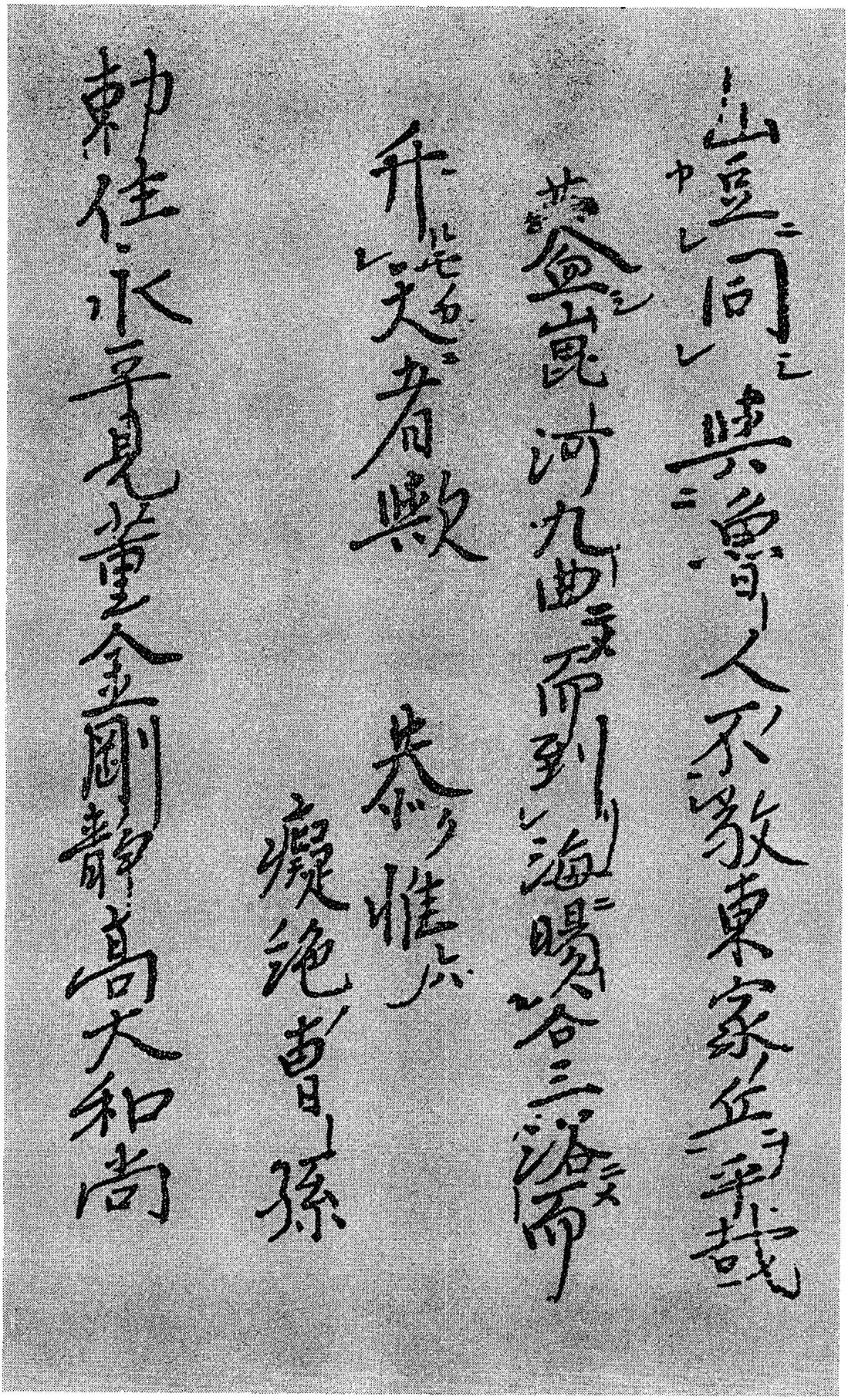
遊　紙



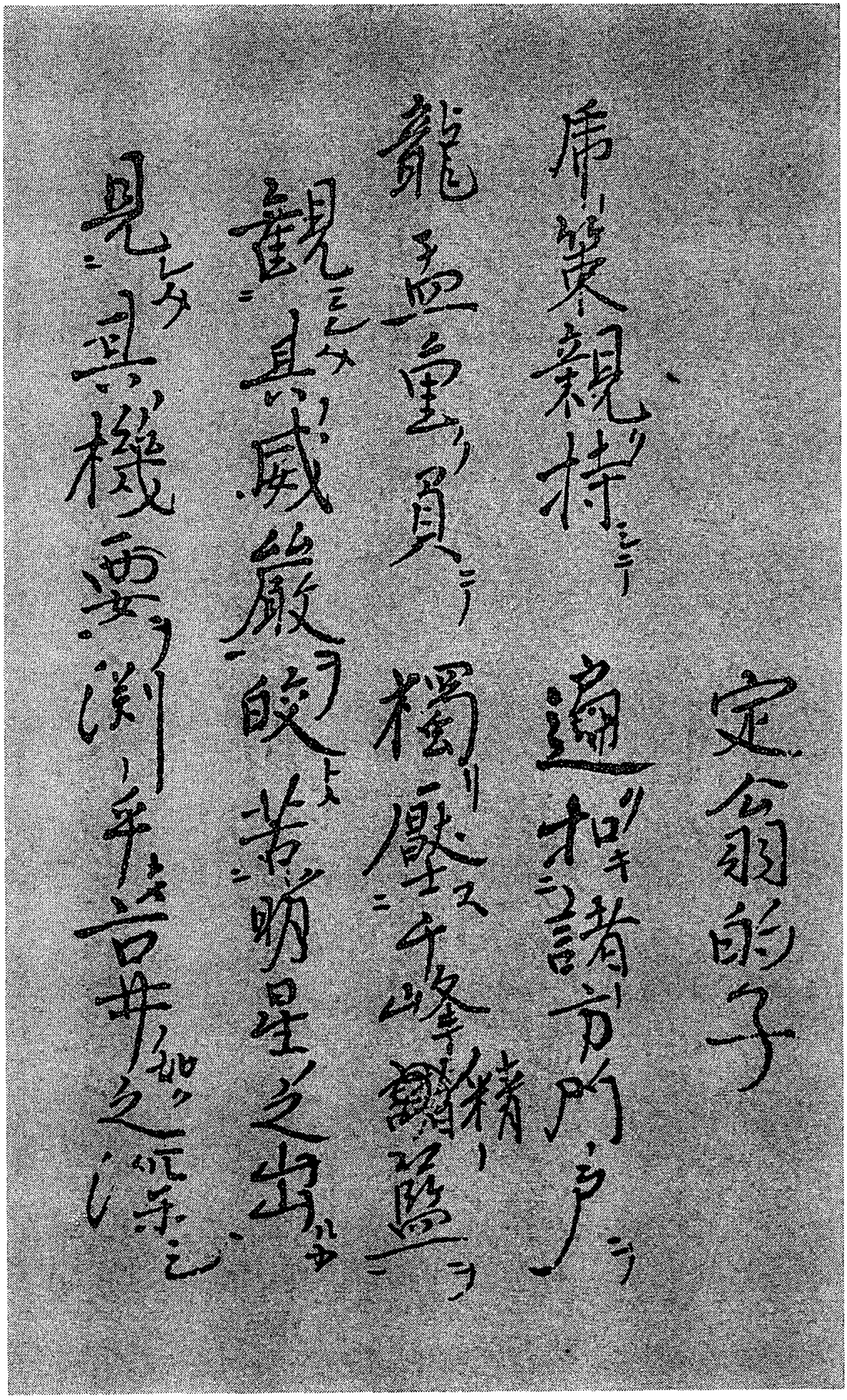
第一丁表



雷田澤千午歳校
不レ堪二悲風雲而喪一レ兒化鵑佳ヲ
柯亭一枝管斜
延陵何ニ知音ヲ而多二弦ヲ絶ヲ希聲ヲ
麁射ノ人千里ニ香千夜ニ

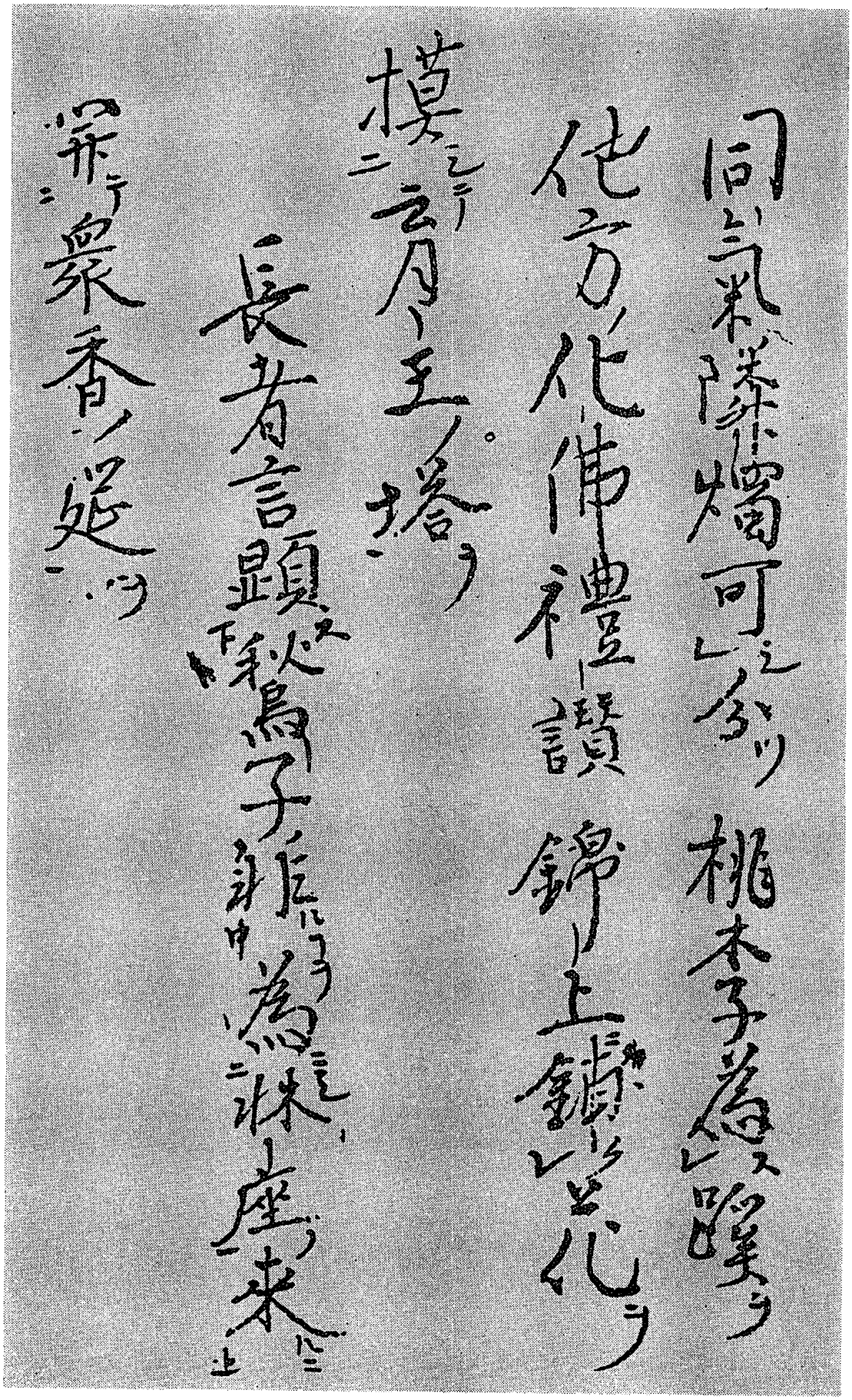


第二丁表

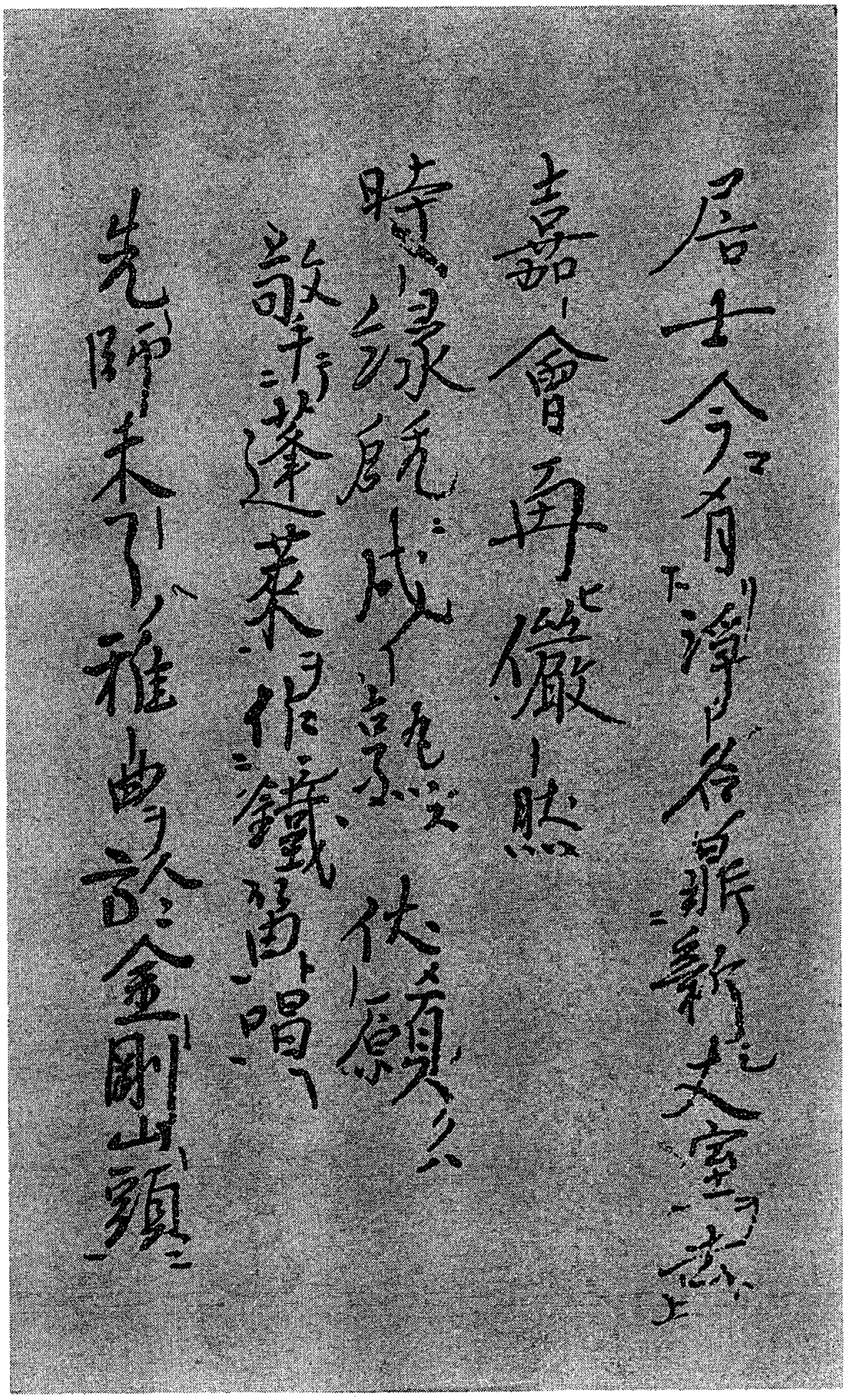


定額的子
爾寒親将ニテ
逾和キ諸方門戸ニ
龍如雲ノ貴ニテ
獨リ壁ヲ峰鰲踏ニテ
親ニ見ヘ威厳ヲ改ヨ若明星之出ヲ
見ンヤ機要ヲ測ル者甚ダ之ニ

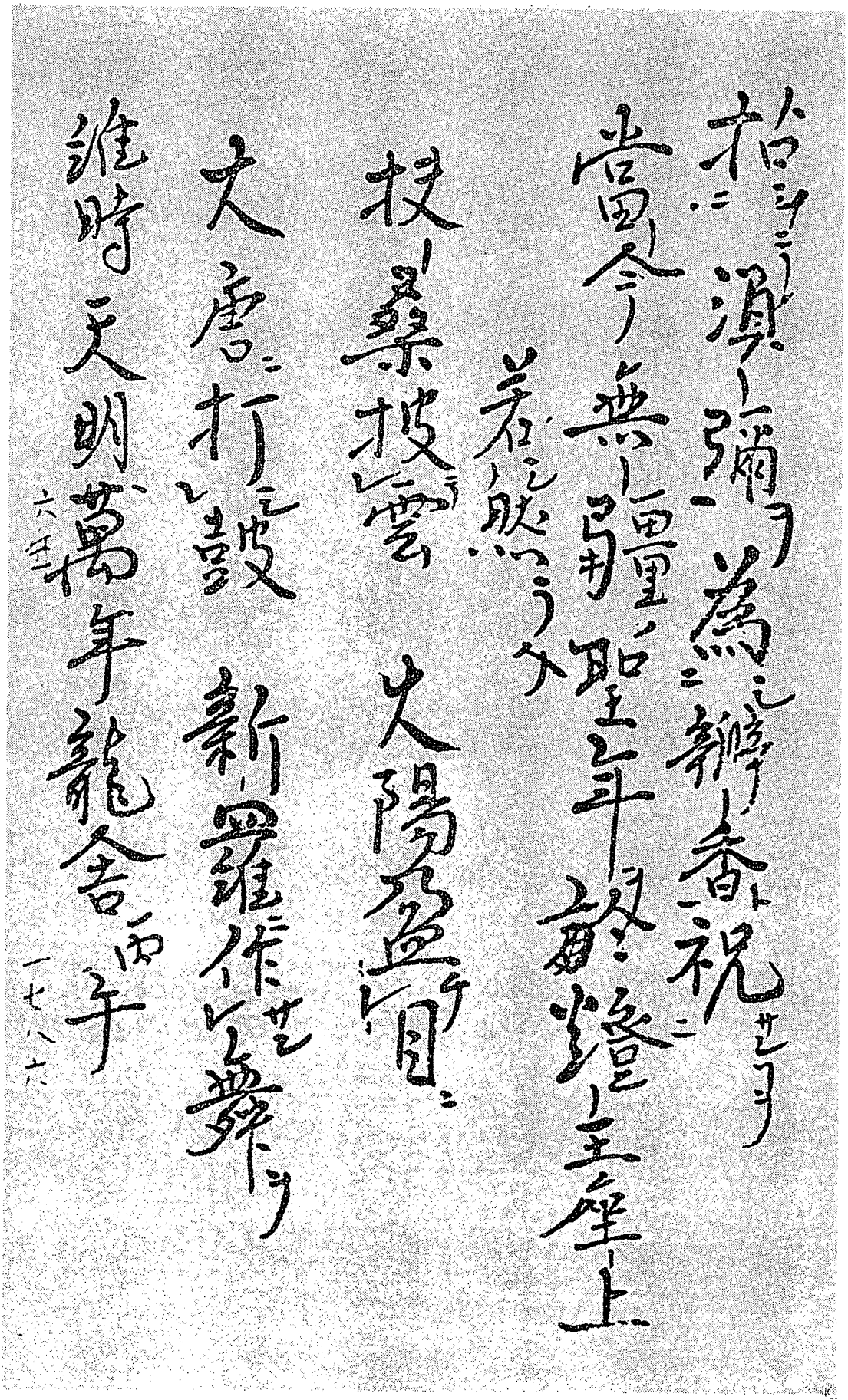
第二丁裏



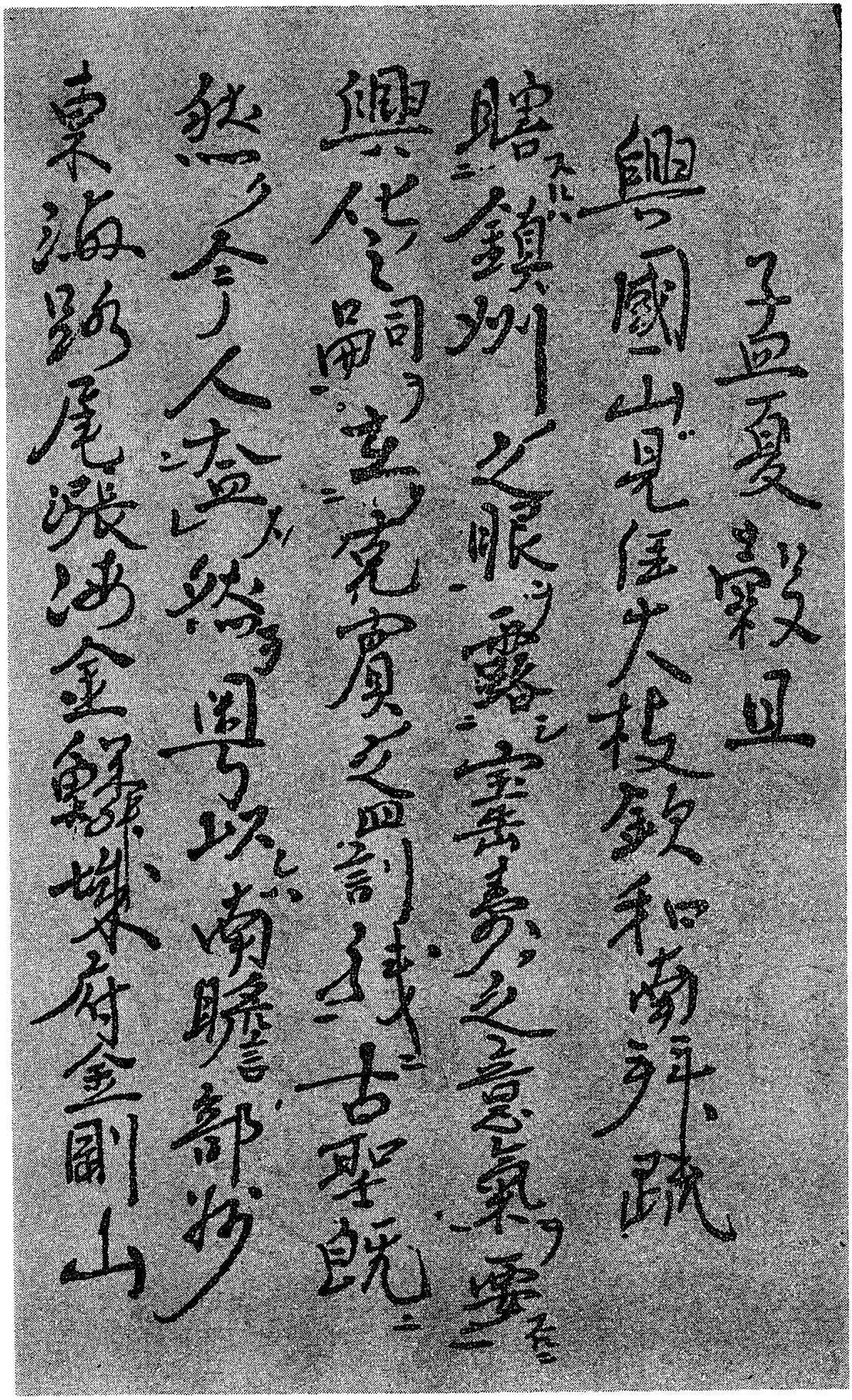
第三丁表



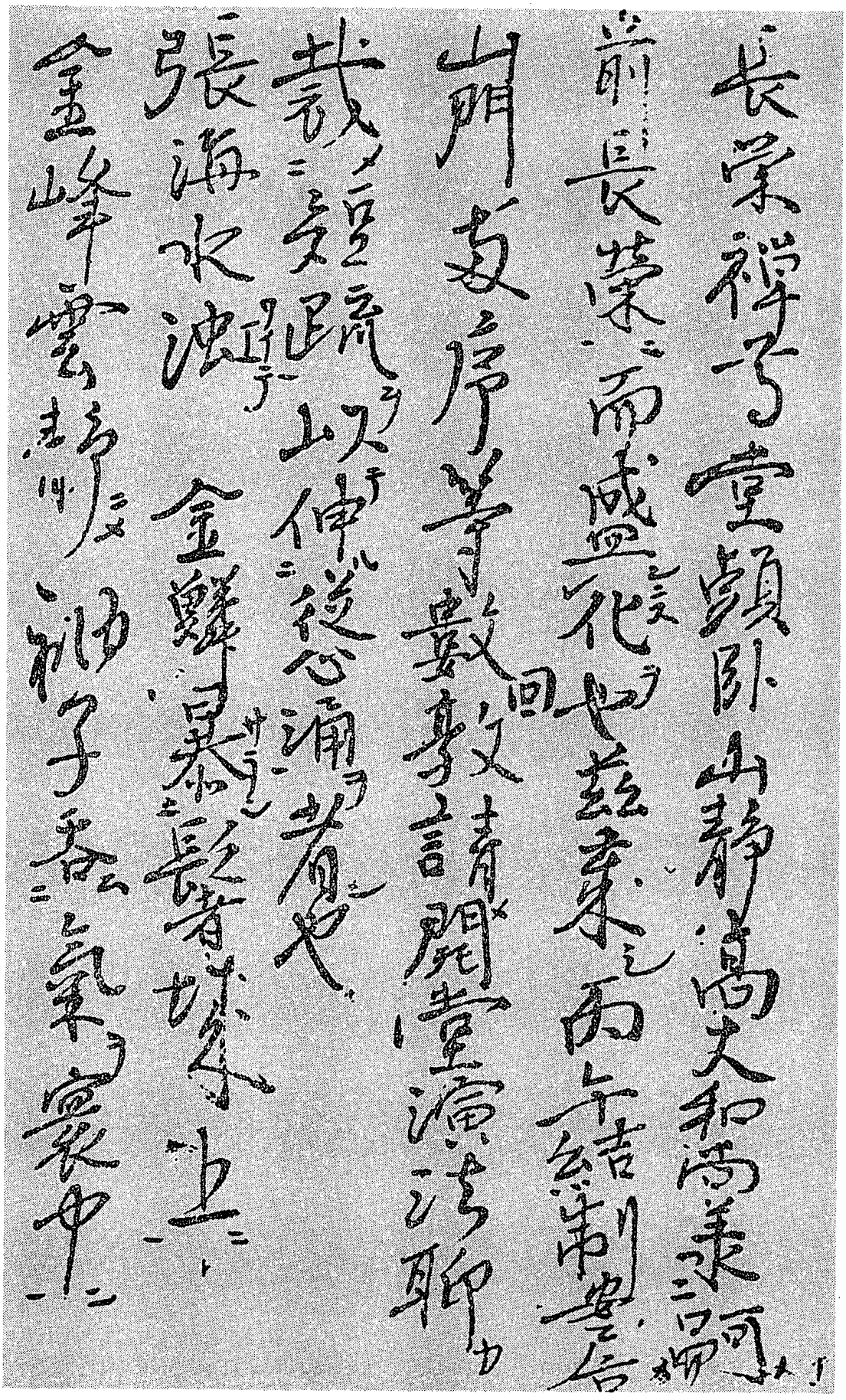
第三丁裏



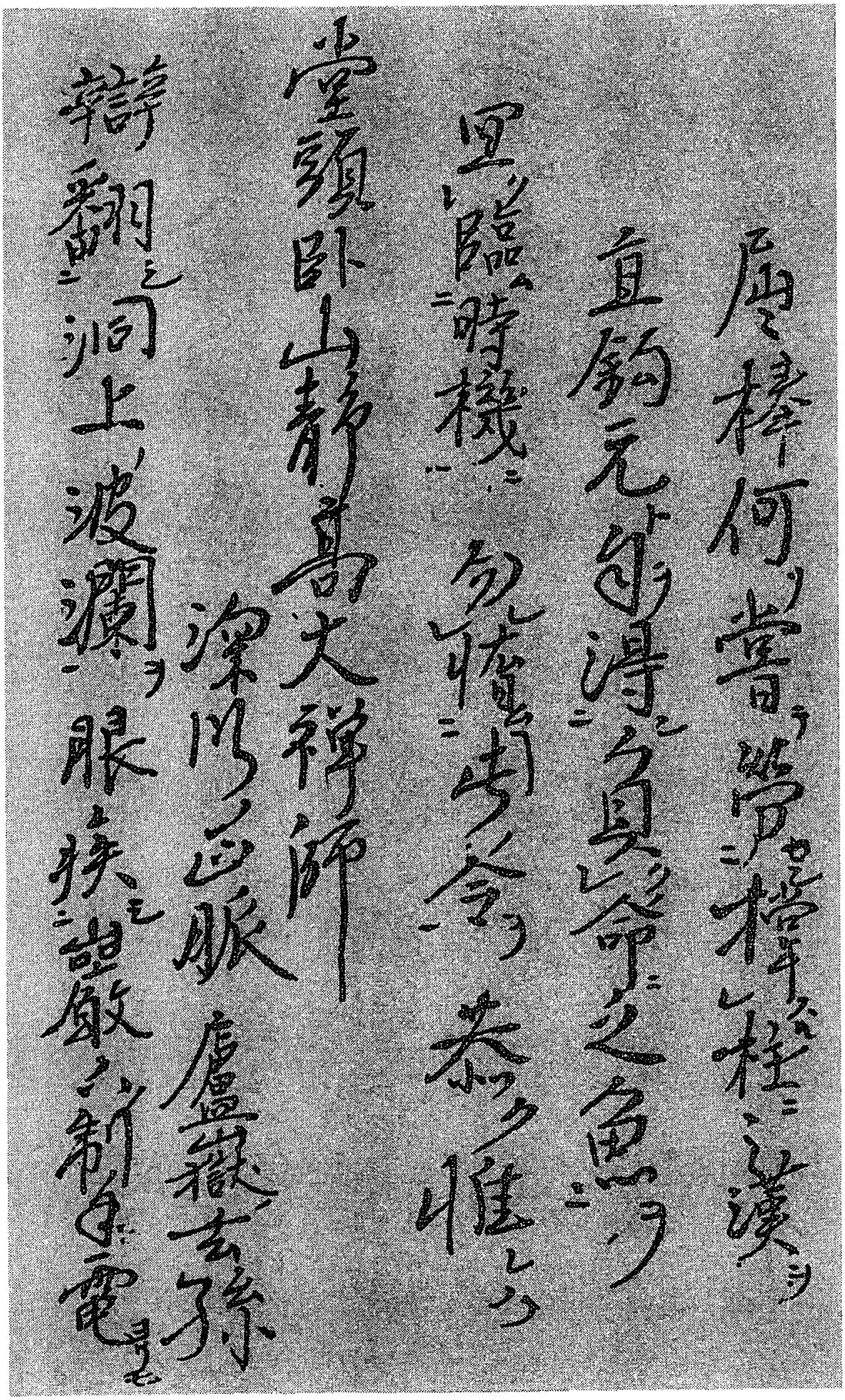
第四丁表



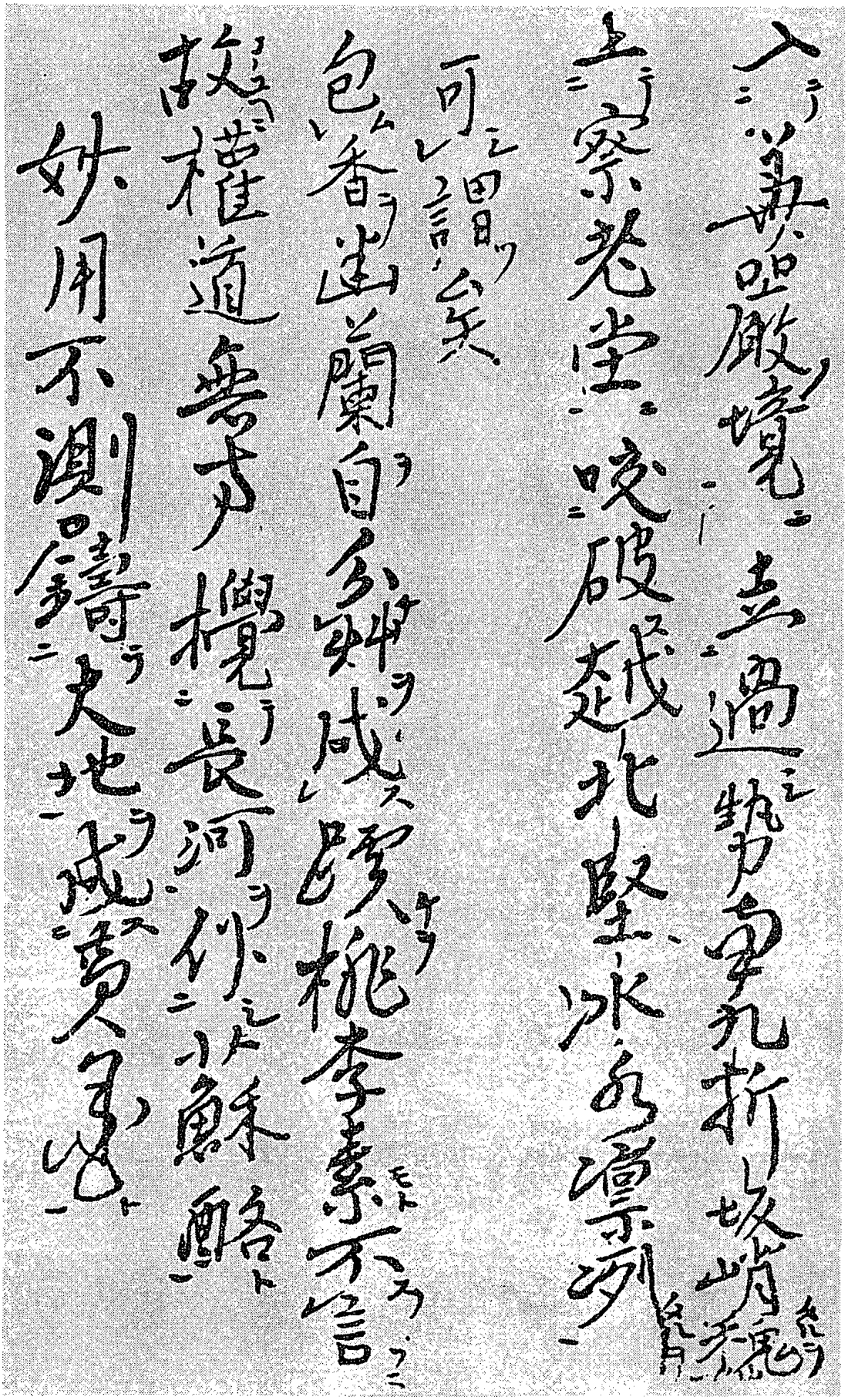
第四丁裏



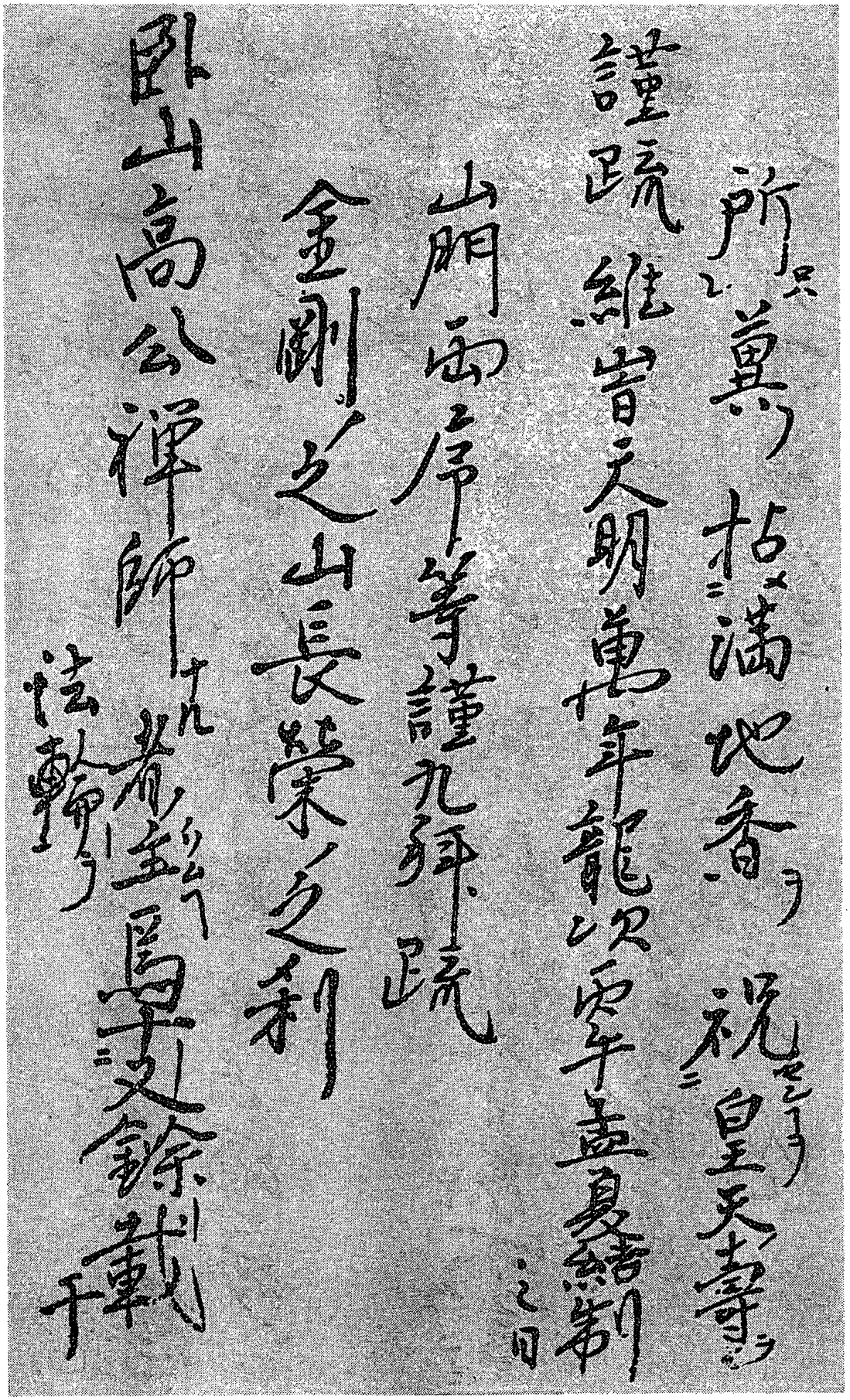
第五丁表



第五丁裏

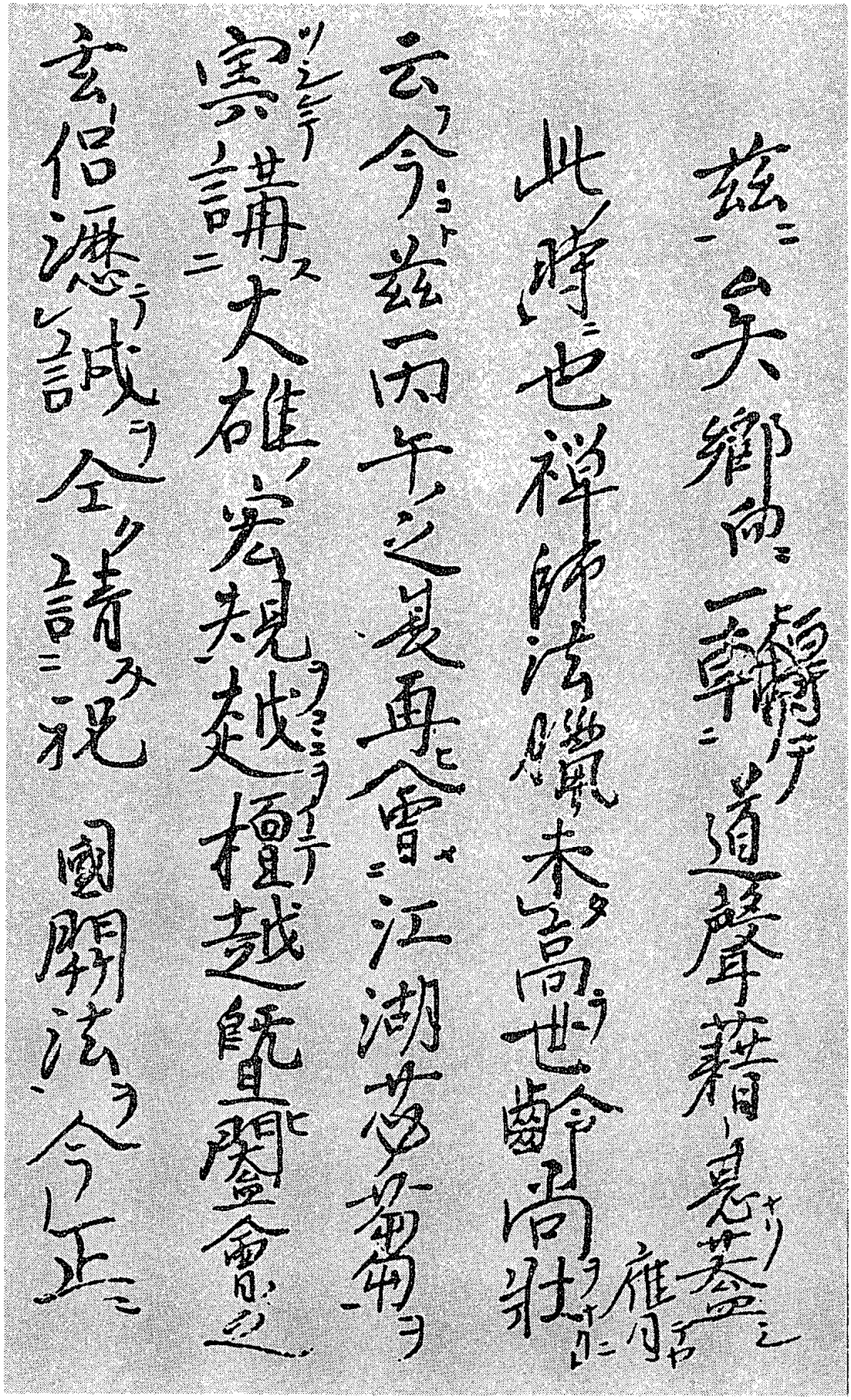


第六丁表



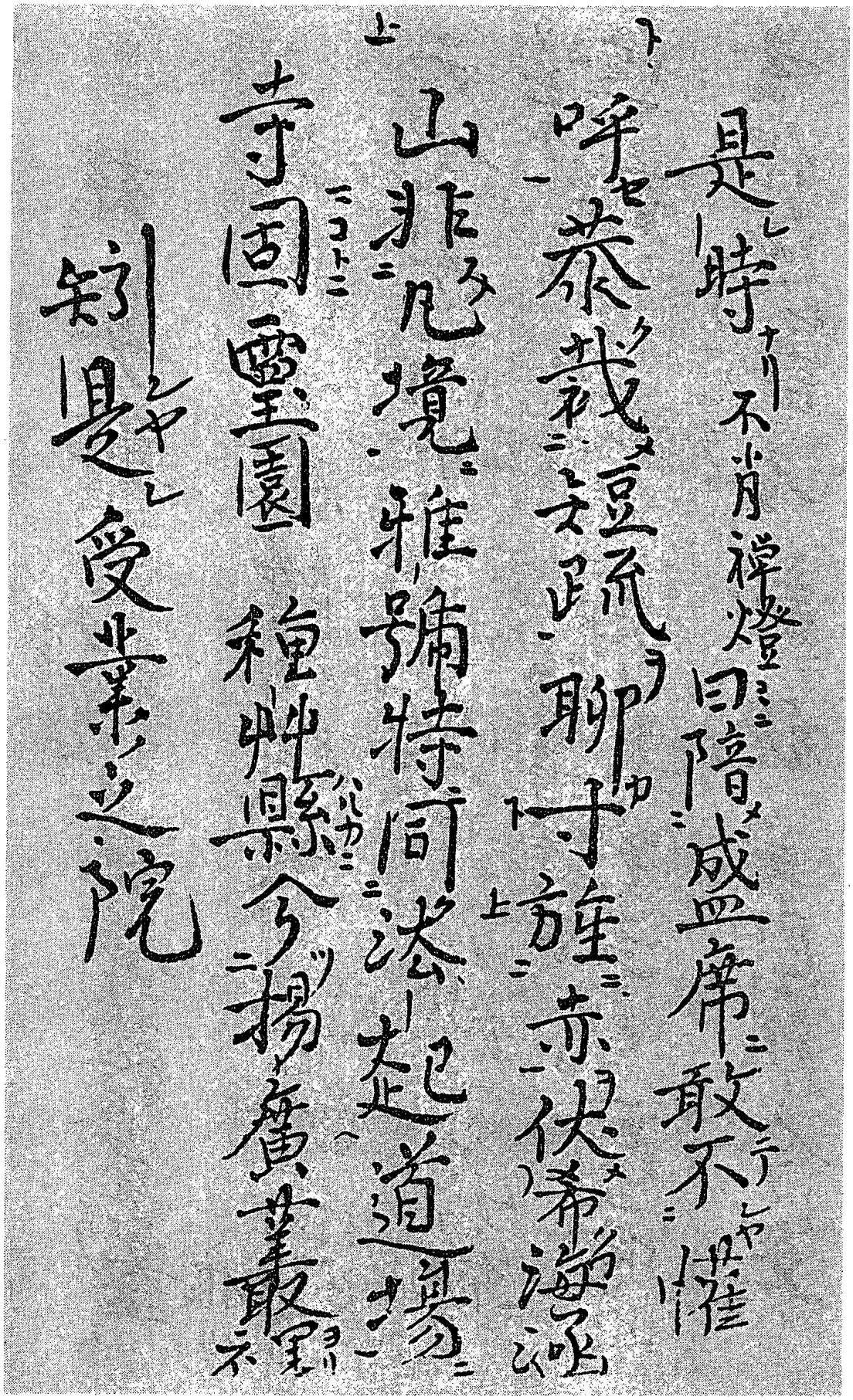
所ニ萬ノ拈ニ滿地香ノ祝ニ皇天ノ寿ヲ
謹疏 維皆大明萬年龍ノ宝算無窮
山門山序等謹九拜疏
金剛之山長榮之利
臥山高公禅師十九年忌辰
法斡

第六丁裏



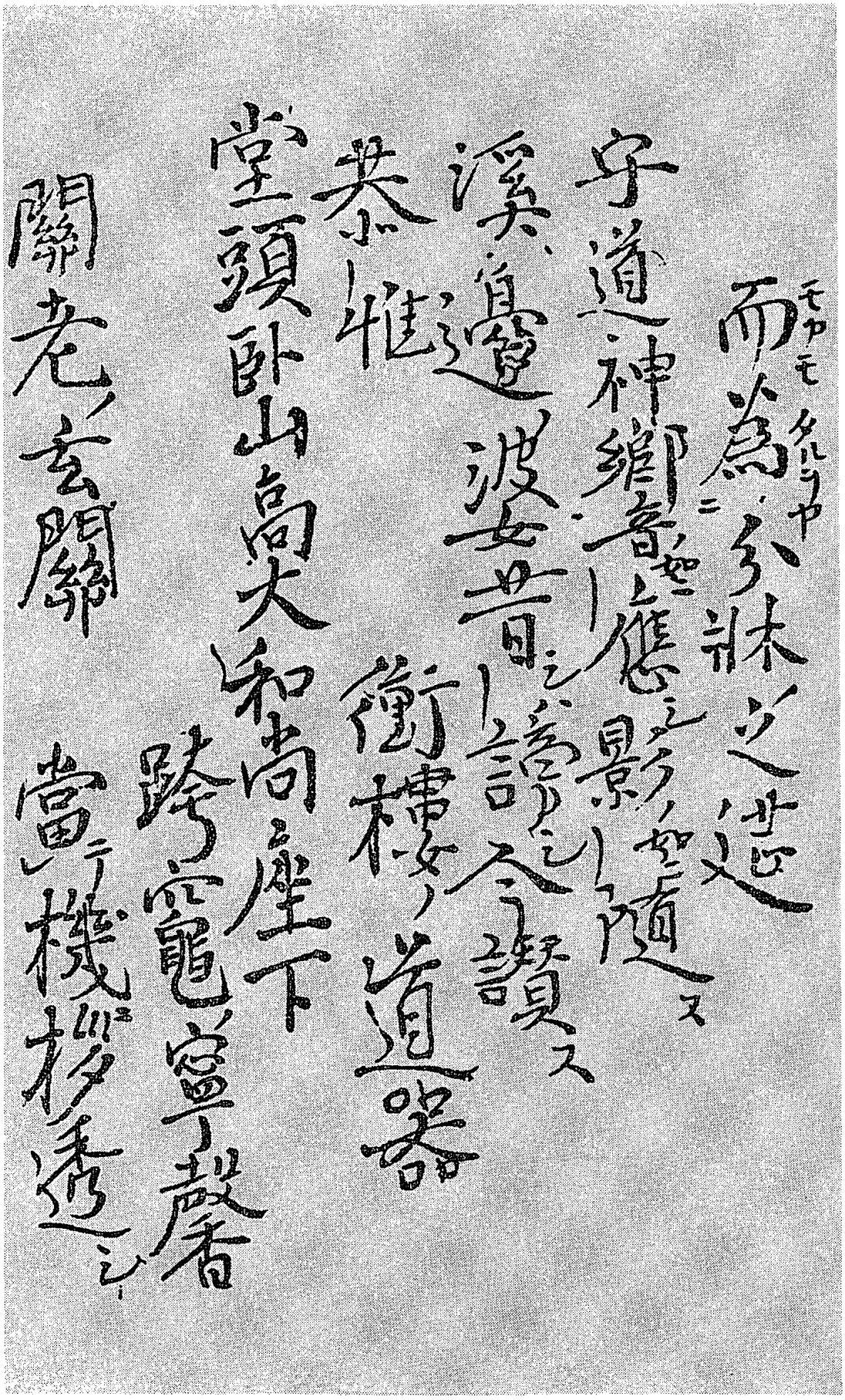
茲ニ矣郷尚一錡ヲ
一字ニ道慶尊蒼ノ号ヲ
雅号ト
此時也祥師法燄未タ高世歯尚壮ナリニ
云フ今茲丙午之夏再ヒ雪江湖多菊ヲ
賓詣ニ大雄宏規超越ノ見処ヲ
玄侶懇ニ誠ノ詩ニ
全ク請ミ祝
國開法ノ今正ニ

第七丁表



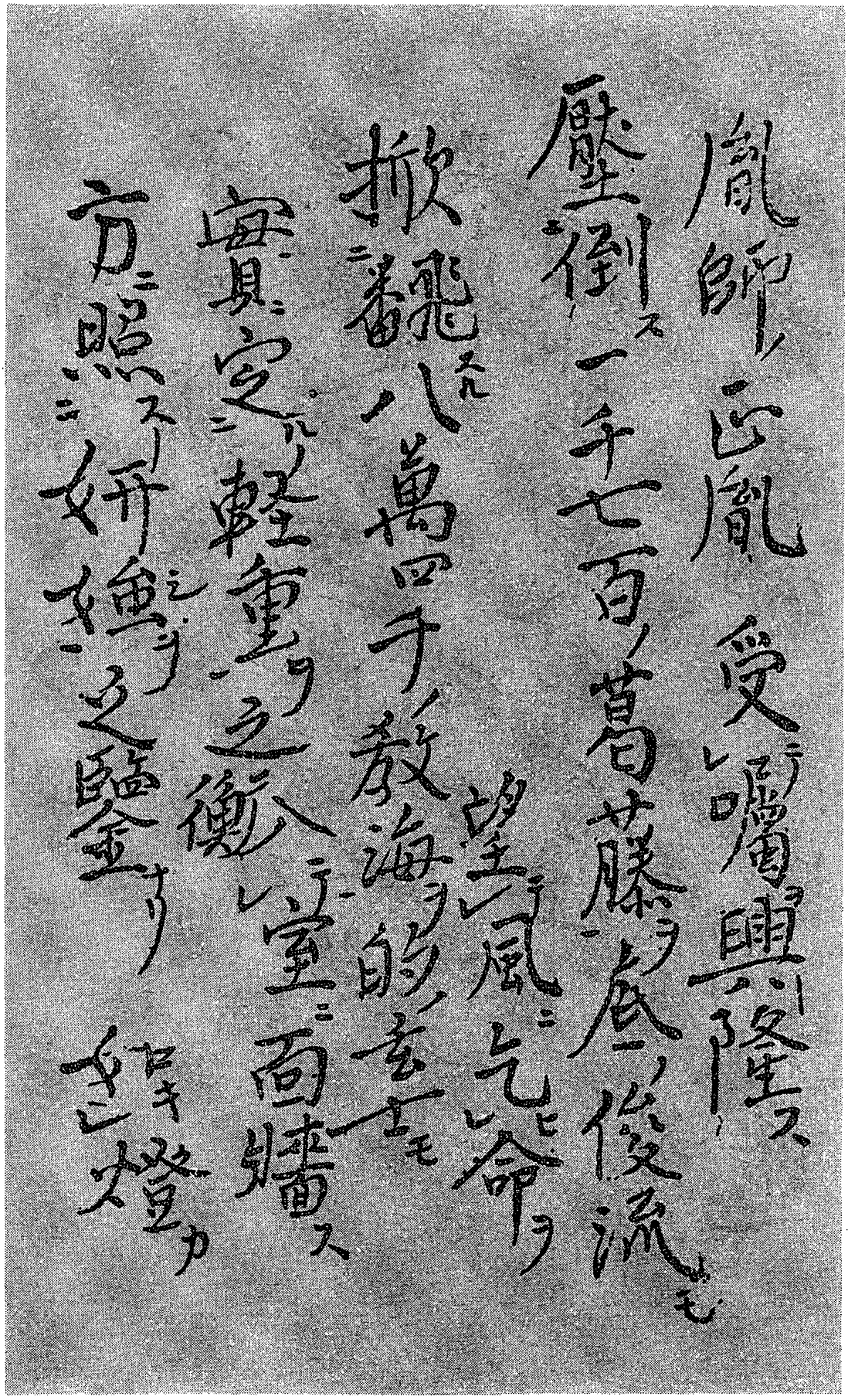
是レ時ナリ不肖禅燈ニ陰メ盛席ニ敢テヤ不揣
ト呼ヒ茶戎ヲ豆ル耶ヲ聊カ寸旌ヲ示ス帝謝
山非ス凡境ニ住ス強特ニ因テ起道場ヲ
寺固ヨリ園ヲ種ル県令ヲ扵ヲ萬葉ヲ叢ス
刻ヲ是レ受業之院

第七丁裏

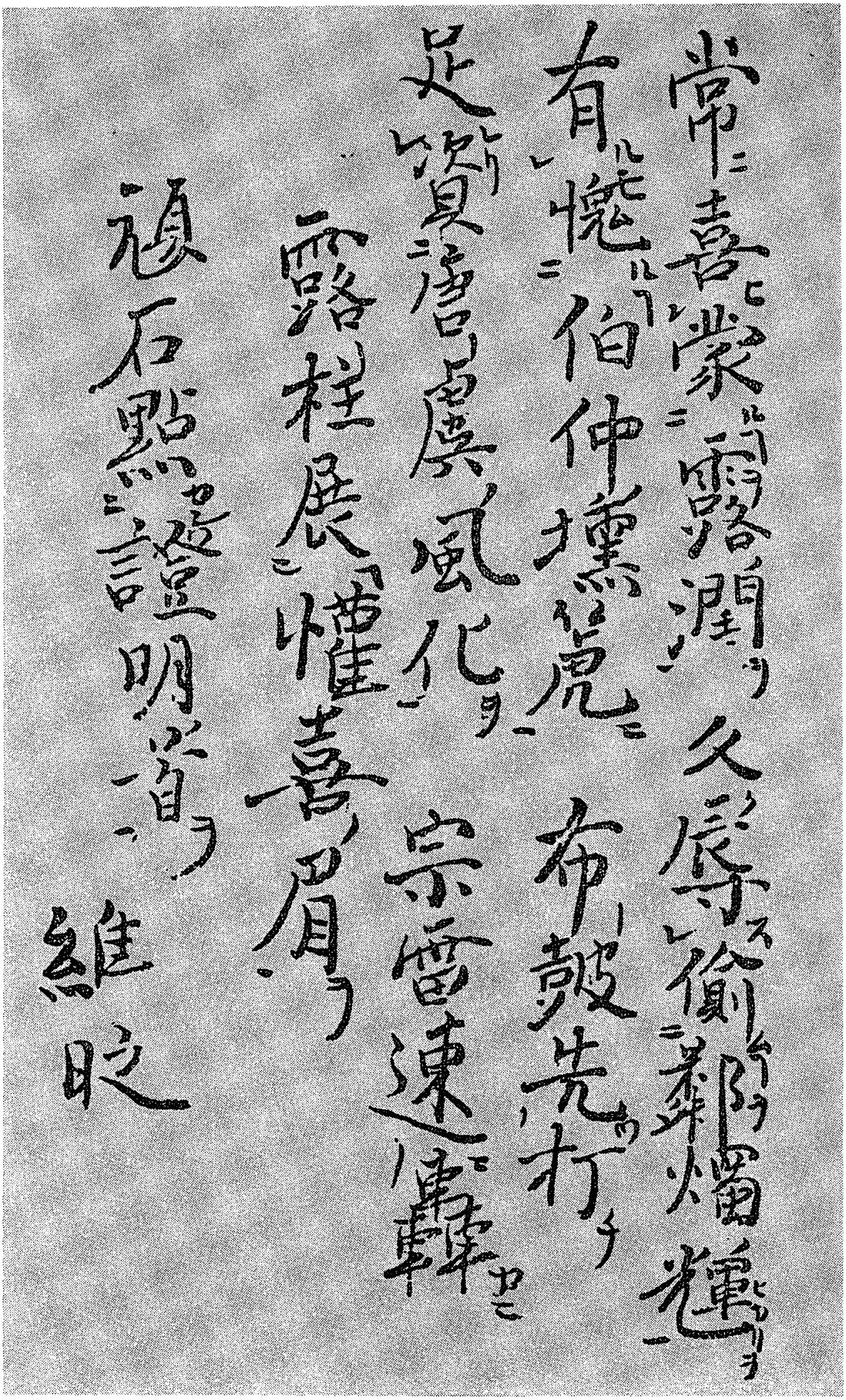


而（モヤモ）為（タルヤ）ニ林之一生ヲ送ン
宇道神郷音如（ノ）悠之景（ノ）如（ク）随（ヒ）ス
渓邊波声之語（ヲ）ニ詩（ノ）如（ク）賛（ス）
茶柱（ヲ）衛楼（ノ）道客
堂頭臥山高大和尚座下
路窟龍宮蔵者
閻老玄關
當機投透（ヒ）

第八丁表

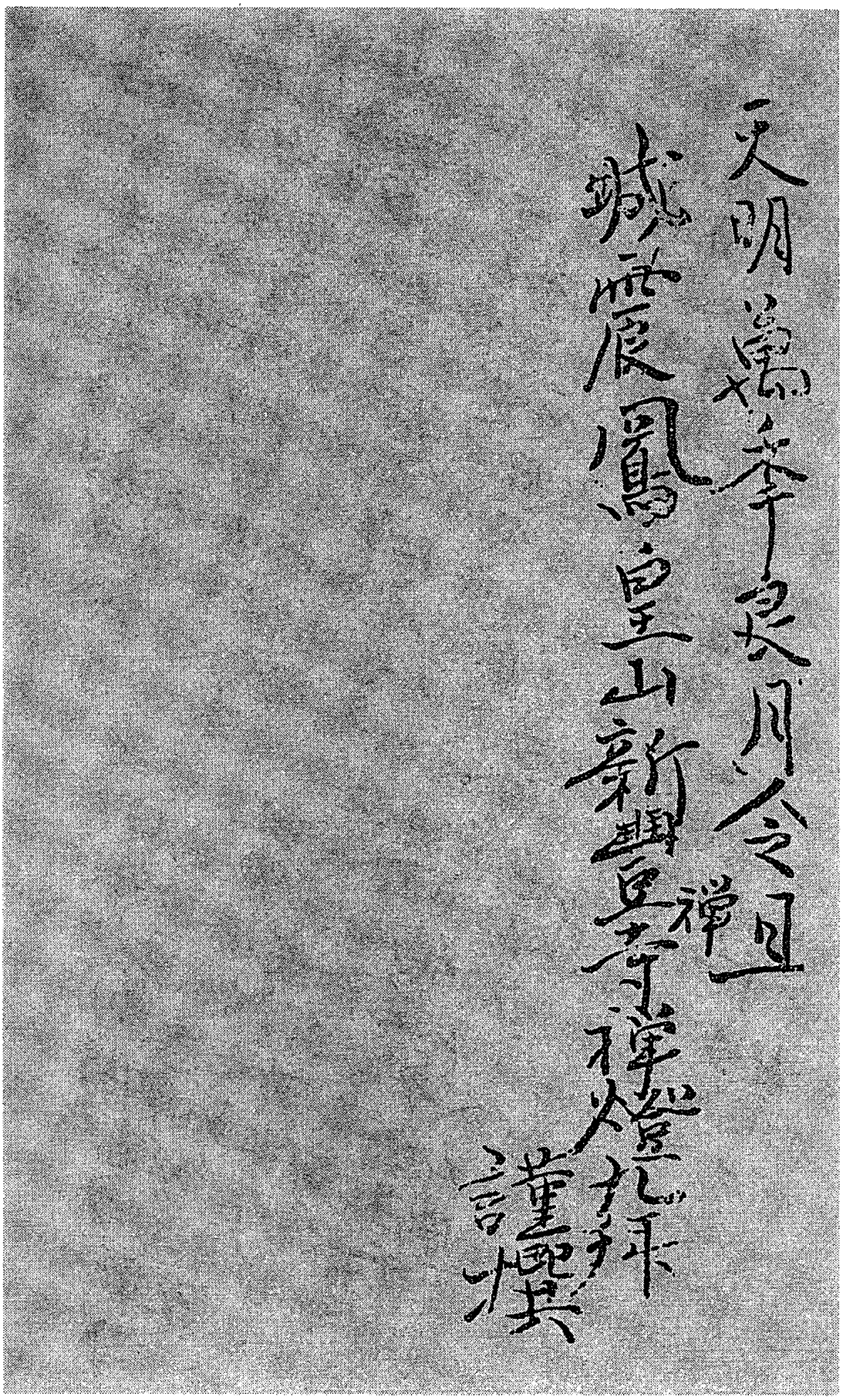


第八丁裏



常ニ喜栄ニ露閑ヲ久辱ス側ニ郡侯ノ光臨ヲ
有ルニ慌ニ伯仲ノ棠ノ覚ニ布鼓先ヲ打ヲ
足ヲ以テ喜唐慶ノ風ヲ宗営遠軒ニ
露柱展ル懽喜眉ヲ
殺石黙ヲ意明ヲ言ヲ
組旦

第九丁表



第九丁裏